

歌琴集曲

古文



255  
410

特30-211



\*1200800174069\*

211

特30



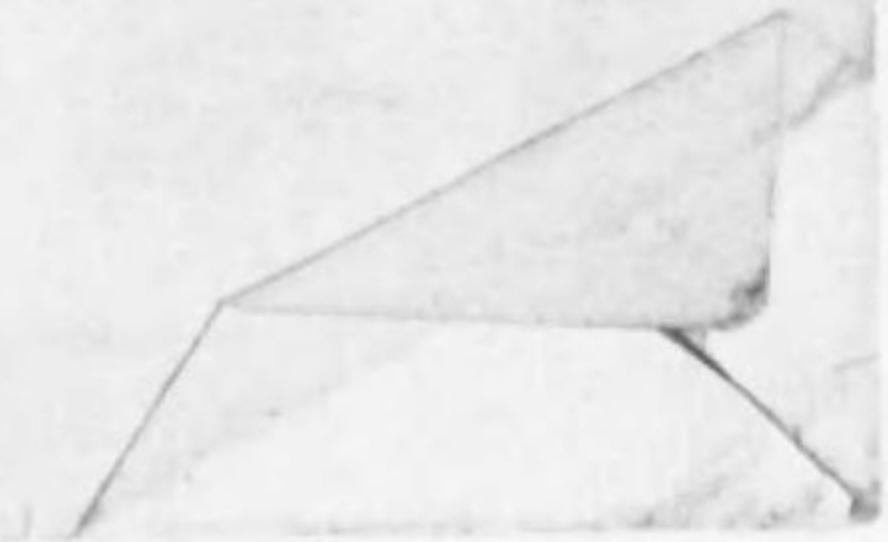
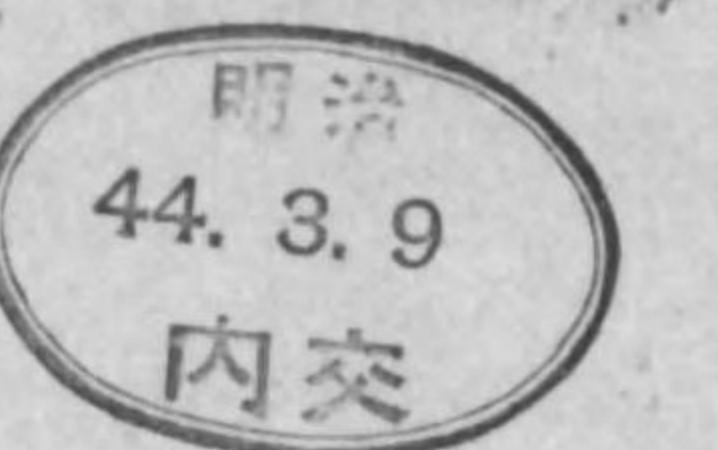
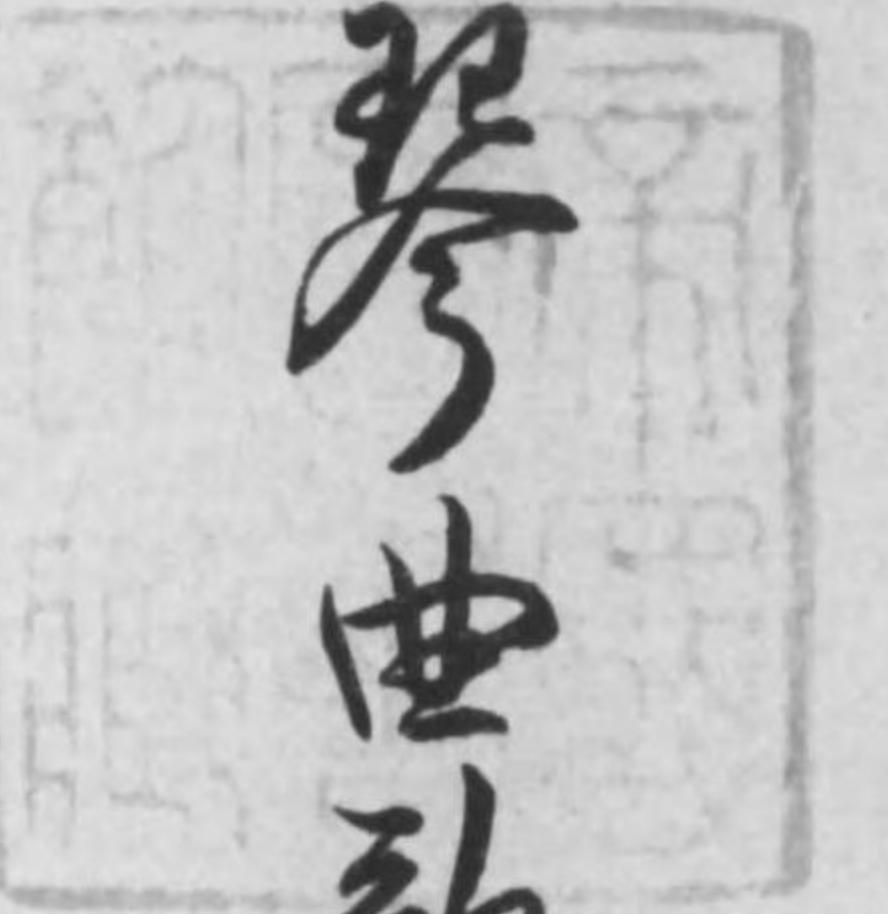
始



特30

211

琴曲歌集 楊之光



## 琴歌の起源及び沿革

琴とは十三絃の「コト」で秦の樂器の遺法に寄つて支那で作られた物で我國えは仁明天皇の御宇に輸入せられた高貴の人達に非常に歓迎せられたが琴の歌曲と云ふ物が無かつた、其れで當時流行して居に催馬樂や今様明詠或は支那樂高麗樂等の歌と歌の上から云つても何の關係も無い物を連續して唄ひ弾奏して居たのであつた漸く隆盛ならんとせしに偶々政柄武門に歸せし爲め琴も他の音樂と共に殆ど全滅の悲境に沈んだ。

降つて徳川氏の元和偃武世人漸く泰平に馴れ音楽再び起らんとするに及び三絃の名手八橋檢校筑紫に下りて善導寺の僧法水(或は云ふ玄恕又は玄淨)に琴を學び大成して江戸に上り新に十三曲の組歌を作り琴に合して弾す之れ實に琴歌の始で八橋は又琴曲中興の祖である

八橋作の組歌即ち菜路、梅ヶ枝、心薫、天下太平、薄雪、雪晨、雲上、薄衣、桐壺、須磨、四季曲、扇曲、雲井曲、何れも皆な尻取文句的な小唄の組合である一編の歌曲として一貫した意味を毫も有して居ない歌曲の形<sup>ズ</sup>としては恐らく日本特有の物でがな有る

稍長くして變化のある歌曲を作る可き必要に迫られながら統一した物を作る技倆がない故小唄の連續を繰り返して居たのだ併かし斯様な變手古な歌曲は琴によつて始まつた物では無い足利時代の狂言中或は延年舞などにも明に數首の小唄を組合せたのが澤山ある

是れより前琴は殆んど高貴の人の專有物の様な觀があつた故

琴曲歌集梅之卷目次

歌詞は三味唄の如く下品でない調も多く七五調で題材も源氏伊勢や大和物語或は勅選集などから取つたのが多い然るに琴曲の祖とも云ふ可き八橋檢校が既に三絃の名手で有た如く爾來の各檢校又三味に通じて居た故に徒然の興に三味唄を琴に載せた事があつたが卑俗の耳に入り易く遂に端唄地唄（三味の組歌から發達した稍長きもの）の類までも琴に載せる様になつた

是れより琴が町家に入りて愈々益隆盛をきはめるに至つたのである

地唄と云へば琴歌の様に世人は云ふが決して同一の物でない併かし方今琴の組歌よりも地唄を多く用ふるから同一視せられるのである無理ならぬ事だ

絵圖の作者と時代。  
各。毎ヶ枝。心監。

- 栄露。桐壺。心盡。扇の曲。雲井の曲。

●桐壺。須磨。四季の曲。扇の曲。雲井の曲。

●右十三曲、八橋検校作（元祿以前）

●明石雲井弄齊。末の松。比島検校作（元祿—享保）

●羽衣。若葉。空蟬。牧野検校作（元祿—享保）

●思川。生田検校作（元祿—享保）

●新雲井弄齊。倉橋検校作（元祿—享保）

●飛燕の曲。安村検校作（寶曆）

●宮の鶯。二長。雪月花。六玉川。浮舟。四季富士。

●四季戀。玉鬱。三橋検校作（寶曆）

●橋姫。元祿作者不明（再調寶曆三橋検校）

●四季友。友千鳥。久村検校作（明和—安永）

●花宴の曲。三の調。石塚検校作（明和—安永）

編者に

飛	本調子之部
有	二十四
西	二十五
ひ	二十六
女	二十七
女	二十八
女	二十九
新	三十
千	三十一
蓬	三十二
長	三十三
融	三十四
五	三十五
六	三十六
春	三十七
初	三十八
糸	三十九
稻	四十
妹	四十一
い	四十二
岩	四十三
磯	四十四
根	四十五
の	四十六
さ	四十七
も	四十八
か	四十九
し	五十
ら	五十一
め	五十二
春	五十三
松	五十四
仙	五十五
山	五十六
む	五十七
し	五十八
ろ	五十九
の	六十
段	六十一
戀	六十二
暮	六十三
駒	六十四
音	六十五
縁	六十六
想	六十七
手	六十八
手	六十九
芦	七十
尺	七十一
想	七十二
行	七十三
ふ	七十四
櫻	七十五
扇	七十六
拭	七十七
刈	七十八
鳥	七十九
菜	八十
思	八十一
き	八十二
へ	八十三
な	八十四
ふ	八十五
櫻	八十六
り	八十七
く	八十八
へ	八十九
き	九十
扇	九十一
拭	九十二
刈	九十三
鳥	九十四
菜	九十五
思	九十六

○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
宮橋は雲 の 鶯姫段	思若羽は 新井弄齋の 曲	雲扇四 季の 奥組新曲	五七九 季の 段	雲春は四玉六 季の 段	四空末明須 季富
井九	葉衣曲 川葉衣曲	曲組調 (三曲ノ一)	調調 (三曲ノ二)	宮懸川 (三曲ノ三)	士蟬松石磨 の
		十八	十九	十六	十五
		十九	十九	十七	十四
		十九	十九	十六	十三
		二十	二十	十五	十二
		二十一	二十一	十五	十一
		二十二	二十二	十五	十
		二十三	二十三	十五	九



星夕紅舌新四レし	新新新四レ松	新都御御都名ゆ	雪由ゆ夢タ福	葉子季	玉都季	陰秋十代山	所	だ縁の露	月插章草
船	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ	づ
の	く	く	く	く	く	く	く	く	く
月空し	み	日雪月柳	ら	子き	月花色	月春は子産	産	き	月插章草
九十九	九十八	九十七	九十六	九十六	九十五	九十四	九十三	九十三	九十九

卷之三

三下り之部

か	夜よ縄か鐵か春は硯すたり	末う	あ	海あ	か	和や	三水う水う	あ	黒も東ひ	東ひ鄙ひ	一丹ん	道吉	百五十二
た	々の	日ひ	の	ちづ	を	ね	歌かば	らし	や	ま	の	人り	頂ちゆう中ちう
い	の	つ	か	契き	が	が	津づ	馴なれ	ぎ				の双
と	星ひ	帽げ	海う	盤さ	士士	岬み縁い	山鏡	棹	ぬ	髪	ど	山袖さ寝鶴	六く野
(かがぶし)	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
百六十八	百六十七	百六十六	百六十五	百六十五	百六十二	百五十九	百五十七	百五十八	百五十六	百五十五	百五十五	百五十四	百五十三
百六十八	百六十七	百六十六	百六十五	百六十五	百六十三	百六十二	百六十一	百六十	百五十九	百五十八	百五十七	百五十六	百五十五

琴曲歌集梅之卷目次

琴曲歌集・(梅の卷)

表組

○菜  
路  
一名越樂天

序 菜蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在徳ありて、冥加あらせ給へや

一春の花の金玉、花風らくに柳花園、柳花園の鶯は  
同じ曲を嘲る二月の前の調べは、夜寒を告ぐる秋風、  
雲井の雁が音、琴柱に落つる聲々三長生殿の中には、  
春秋にとめり、不老門の前には、月の影晩し四弘徽  
殿の細殿に、テむは誰々、朧月夜の内侍の頭、光る  
源氏の大將五誰ぞや此の夜中に、さいたる門を叩く  
は、叩くともよもあけじ、宵の約束なければ六七尺  
の屏風も、躍らばなごか越えざらん、羅稜の袂も、  
引かばなごか切れざらん

○梅 が 枝 一名千鳥

ん、花に宿る鶯、二花散る里の徒然、たえだえの琴の音、花橋の袖の香に、山郭訪づるゝ三思ひ寢の夢の間、枕に契る明け方、覺めては元の辛さにて、涙のはかはあらじな四小夜更けて鳴く千鳥、何を思ひあかしネ、浮世を須摩のうらみにて、我れと等しき涙かや五しらま弓のまゆみの、そるべきはそらいで、八十の翁の、こひに腰をそらいた六三保の松風、吹きたえて、奥津なみもあらじな、水にうつろふ月ともに、眺につゝく富士山

○心盡 一名小車

一心盡のあき風に、須摩のうらはの浪枕、ころもかたしきひとりねに夢も結ばぬよなよな二ふる里を遙遙と、隔てゝ此處にすみだがは、都どりにことゝはん、君はありやなしやと三夏の夜の曙、夢を覺ます郭、白砂に見ゆるは、月にさらす卯の花四霧にたゞすむ小車、やつしてたつる小車、人目忍ぶの契りこそ、更けて閨の通ひ路五飛鳥川の水上を、硯の水にせき入れて書く言の葉は盡きまじや、今日も暮さん

命かな六契りし宵のたそがれ、知る邊深きそらだき止め居る方の萩の戸を、開くや袖のうつり香

○天下太平 一名雛鶴

一天下太平長久に、治る御代の松風、雛鶴は千歳ふる、谷の流れに龜遊ぶ二人知れぬ契りは、淺からぬもの思ひ、包むとされご紫の、色に出づるぞ果敢なき三果敢なくも隈なき、月をいかで恨みし、兎に角に我が袖に、たえぬ涙の夕暮四花のゑんの夕暮、朧月夜にひく袖、定かならぬ契りこそ、心淺く見えけれ五住吉のみやごころ、かき鳴らす琴の音神の恵みに逢ひ初めて、過ぎし昔を語らん六秋の山の錦は龍田姫や織りけん、時雨降る度毎に、色の増すぞ怪しき

○薄雪 一名東雲

一うらめしや我が縁、薄雪の契りか、消えにし人のかたみとて、涙ばかりや殘るらんニ比翼連理のかたらひも、變れば變る世の慣ひ、さりとては恨むまじや、昔は情ありしを三若紫を手に摘み、深き心の色

増す、長き契りを結ひしも、草の縁と知るべし。四東雲の眞垣に、露を含む朝顔、玉のかつらたをやかにかかるや花の面影。五世々の人の眺めし、月は眞のかたみぞと、思へば思へば、涙玉を貫く。六吉野川の花筏、竿さすひまもあらじな岩浪高き山風、四方に散らす花の香。

○雪の晨 一名葵上

一雪の晨の嵐は、梢の花の散る風情、名こり惜しきは免に角に、待ち得し君の歸るさ。二淺ましや我が身は、雲井の雁に夕霧のおとしめられし思ひをば、いつの世にかは忘れん。三まとろめば面影の、しげしげと短夜に郭おとづれて、初音に夢ぞ醒める。四眺むればいととだに、戀しき人の戀しきに、曇らば曇れ秋の夜の、月の恨はあらじな。五峯の嵐の通ふか、谷の水の流れか、寝覺めに聞きし松風は、琴の音に違はじ。六葵の上のときめき加茂のもの見の折柄、車争ひつきなきは、深き恨みなるべし。

表組新曲

○花の宴

一幾春もこゝになほ、御はしの桜色まさり。雲井の花はひさかたの、空ふく風も、おはばじ。二雲の上人かざして、色をあらそふ紫の、袖のかわりはうちはゆる、大内山のゆふづくひ。三夕ぐれの薄がすみ、誰がならす糸竹、思ひある身にはたゞよそのしらべもなつかし。四梅つぼの邊りより、こすの隙にもれくる風のかをりは宵のまの、暗はいとゞあやなし。五弘徳殿の細殿に、千むは誰れたれ、臘月夜の内侍の頭光る源氏の大將。六いとゞなほ深き夜の、あはれを知らすいる月の、臘けならぬ契こそ、今身に思ひ知らるれ

○友千鳥

一満千たへせぬ壇の山、さし出の磯の友千鳥、君が御代をば幾千代と聲もゆたかに鳴き交はす。二日陰のどけき春日野に若菜つみつゝ萬代を、祝ふ心の道すぐくに、神の恵を祈らん。三誰れかはあかん常盤なる松の縁も春はなほ、今一人の色見にて眺めも深き此の

頃<sup>四</sup>うつし植ゑてし庭もせに、老いそふ竹の枝しげ  
み、茂<sup>レ</sup>くも見ゆる千代の蔭になるよ齡やいつまで  
向<sup>五</sup>ふも廣<sup>カ</sup>きわだつみの、濱の眞砂を數へつゝ、世<sup>二</sup>  
の有りかず取りなして、久しき程を知らばや 六  
なれし鶴龜も、千年の後は知らなく、あかぬ心に  
まかせつゝ、限りもあらじ行末

○六段調 手事唱歌なし

○歌れんぼ

絶<sup>三</sup>て逢はずとな<sup>合</sup>文をば通へ文は妹脊のはしとなる  
合妹脊のな妹脊の文は文は妹脊のなかとなる合人の  
つらさにな<sup>合</sup>こりもせず<sup>合</sup>憂<sup>カ</sup>き玉の緒のいつまでか  
合<sup>合</sup>絶<sup>四</sup>ぬ思ひにくれ竹や<sup>合</sup>いくよ伏見の袖ぬれて<sup>合</sup>か  
はく間もなき涙のふちせ<sup>合</sup>夢になり共あふせは嬉<sup>カ</sup>  
合寝<sup>合</sup>よげに聞はさまの尺八<sup>合</sup>一よきりにも情あれか  
し<sup>合</sup>ねよげに聞はさまの尺はち<sup>合</sup>ひとよ切りにも情<sup>カ</sup>  
あれかし<sup>手事</sup>梅<sup>手事</sup>は匂ひよ櫻<sup>手事</sup>は花よそれく人のなき  
けは毎<sup>手事</sup>も花の香

裏組

○雲の上

一雲の上のながめは、ありし昔にかはらねど、見し  
たまだれのうちぞたゞ、なつかしやゆかしき<sup>ニ面白</sup>  
やさみだれ、花たちはなのにはへり、郭公おとづれ  
て、短夜なれど寝られね<sup>三中々</sup>に始めより、なれず  
は物思はじ、忘れは草の名にあれど、忍ぶは人の面  
影<sup>四思</sup>ひ餘りせき兼ねて、恨みぬる夜の涙は、床す  
さまじや獨りたゝ、枕に戀ぞ知らるゝ<sup>五武藏野</sup>に行  
きくれて、月をながめて草まくら、こひしき人を夢  
に見て、うたゝねの袖しほる<sup>六軒</sup>をめくるてんてき  
琴の音に譬へてしちねんの夜のあめ、かつて知らぬ  
夢の世

○薄衣

一數ならぬ身にはたゞ、思ひもなくあれかし、人<sup>合</sup>  
なみなみの薄衣、袖の涙<sup>合</sup>ぞかなしき<sup>ニあこがれて思</sup>  
ひ寢の、枕にかはす面影それかとて語らんと、思へ  
ば夢<sup>合</sup>は醒めにけり<sup>三白雪</sup>のみゆきの積る年は経ると  
もあくまじや諸共に、亂<sup>合</sup>がみの顔<sup>合</sup>ばせ<sup>四引</sup>く人は

それぞれ、數多あれともつま琴の、元の心かはらず  
ば、琴路に落ちよ秋風。五かしは木のゑもんの鞠をと  
んと蹴たれば、まりは枝に止りければ、梅ははらり  
ほろりと六さりとてはつれなや、ひかふる君がたも  
との、あや憎になひかぬは、手飼ひの虎の引き綱。

### ○桐壺

一桐壺の更衣の、比翼連理のちぎりも、定めなき世  
のならひとて、夢の間ぞかなしき。二短夜の夢さめて  
面影は夏虫の、身よりあまた思ひをば、いかで人に  
詰らん。三秋の夜は更けゆき、月は西にかたむく、松  
風や浪の音、鹿の聲ぞ淋しき。四道しるべせし小君の  
なかだちに引かれて、行衛迷ふか空蟬の、衣のかを  
りぞゆがしき。五誰ぞや今宵さよ更けて、柴のとぼそ  
をたゝくは、尾の上下ろしのおとづれかくゐなの告  
ぐる聲々が六青柳のかたいとに、よりて鳴けや鶯。  
鶯のぬふてふかきは梅が枝の花がさ。

### 裏組新曲

### ○四季の友

春たちくれば我宿に、まづ咲きそむる梅の花、君が  
千とせのかざしそと見るものごけき色なれや、たき  
の白ら玉千代のかず、岩根に落つる五月雨の雲間過  
ぎ行くほこゝぎす、たゞ一聲のをとづれ、月をのみ  
ながめてもかくばかり、おしまる、秋の夜ごとをい  
たづらにつぐる人こそつらけれ、神無月時雨ても色  
かへぬ、松ヶ枝のみごりうづめるあら雪はとかへり  
の花ならん

### ○雪月花

一櫻卯の花白菊に、まがふは雪の色ながら、まがわ  
ぬ雪の白重ね、とむるは袖の梅が香。二小野のみむろ  
のつれくを、夢かと思ふ雪の夜の、深き心に踏み  
分けて、訪し君こそ忘られぬ。三久方の中に生ふる桂  
の、にほふ花ならば一枝たれも折かさし、世々につ  
たへん月の名。四葉月なれば月すみて空飛ぶ雁の聲  
おつる白妙ごろもうつなり、夢の契のあはれさよ  
五花は三吉野小初瀬や嵐の山もをしなべて、雲とな  
がめし人丸の、昔の名こそうれしけれ。六世の中は物

かわり星移れごも春の花、柳の糸の絶やらでくると  
しぐのたのもしさ

○八段調 唱歌なし

○亂輪舌 唱歌なし

○二 長

一足引きのいはほなでしこや、なほ眞鶴の羽衣を、  
千代に一度うちつけて、なづとも更につきすまじ、  
二ながらの浦や春の日の、葦の若葉の柔に、ひなを  
も連れて遊ぶなる、鶴の景色ぞほこらしき 三鶴にの  
りし山人の、心に任せ行き通ふ、蓬が島ときこえし  
は、いつも老いせぬ所とや 四此の内知らぬ思出は、  
物數ならぬいにしへ、高き位を許され、車に乗りし  
試もあり 五御手洗川に住む龜は、神代をかけて知り  
ぬらん、蓮の上葉に遊ぶ子と、千年の後ぞ身は輕ろ  
し六かずのうらもじおい出でし、後にならひて今も  
なほ、ゆふげを訪へばなにごとも、吉におさまる目  
出たさよ

○浮舟古

一思ふことはでやつひに山城の、うちのわたりの  
うきせにもしづみははてぬゆくゑこそ、なか／＼な  
りし恨みなれ 二うき世をわたるしばふねの、みなれ  
く／＼てさすさほのしづくを見ればいつとなくものお  
もふ袖のかくばかり 三身をわくることはかたしやた  
まくしげふたみちかくるわりなさに、思ひみだれて  
うちかへすこころひとつくるしさよ 四をのゝすま  
ひのおのづから、きこへやありとつ、ましく、峯の  
嵐やさをしかの聲にもたてずなりにけり 五いにし  
のふたうたならでなにとなくこゝろゆかしの、手な  
らひは、つれぐ／＼なる日ぐらし、忍び／＼のなみだ  
なり 六田の面の秋になりぬとや、稻葉にまじる小女  
子が聲はおかしう打そへてうたへばそらに雁そなく

中組

○須磨

一須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、さら  
しなの月共に、眺めていざや歸らん 二春によせし心  
も、いつしか秋にうつろふ、黒木赤木のませのうち

に、よしある花の色々 三きりぎりす夜すがら、何を  
恨みすぐぞ、我れも思ひに堪えかねて、いとこころ  
の亂るゝに 四中々に人をば、恨むまじや恨みじ、兎  
に角に數ならぬ憂身の程そ悲しき 五三五夜中の新月  
隅なきぞ面白や、千里の外の人までも、暎や眺め明  
さん 六深更に月きて、車の音の聞こゆるは、五條  
あたりの破屋の夕顔を知邊に

○明 石

一所柄名にしおふ、明石の浦の秋の頃、月さえ渡り  
よる浪に、うつろう影の面白や、此頃はいとごしく  
都の方の戀しきに、かゝる所の人心、憂を慰む今宵  
かな 三何時となく長き夜を、語り明石の浦なくも、  
いかで岩根の松の葉の、契りは末も變らじ 四幾夜明  
石の浦の浪、よせてはかへり浮沈、憐れを思ふ折か  
らに、憐れを添へて鳴く千鳥 五庭の落葉か村雨か、  
かきならす琴の音か、他所に知られぬ我が袖に、餘  
りてもる、涙かな 六四智圓妙の明石がた、迷ひの雲  
も打ち晴れて、八重咲き出づる九重の、都に歸る嬉

しきよ

○末の松

一末の松山浪越すとも、變らぬ色は松が枝に、君が  
千歳の限りなき、み際の池に龜遊ぶ、二身に浸み渡る  
秋の頃、月も隅なき閨の戸に、歸るさ告るくだかけ  
の、まだ木に鳴くぞ恨めしき 三中々に今はたゞ、思  
ひたえなんとばかりを、人傳ならで言ふよしも、あ  
らで焦る、身ぞ辛らき 四しのぶ山しのぶ山、あはれ  
忍ぶの道ちがな、人の心の奥までも、見てや止みな  
ん我が思 五さよ千鳥夜もすがら、鳴くは我れを訪ふ  
やらん、須磨の住居のもの憂きに、涙を添ふる聲々  
六契りきなかたみに袖をしほりつ、末の松山、浪越  
さじとはいかに言ひけん、あだになりし恨みかや  
七

○空

一空蟬のあるかと見れど、面影の影もあやな、香を  
とめし小夜衣、もぬけし人ぞ戀しき、尋ねても中々  
に、逢はでのもりの逢はでのみ、つれなきものは命  
にて、一人胸をや焦すらん 三よるよるにも我が袂、

ぬれつゝ増さる戀心、人こそ知られ忘られぬ、身の程  
いかでわびまじ 四戀し床しとつれなくも、甲斐なき  
世にも住吉の松は我が身の思ひにて、逢はでや年を  
經るらん 五思ひ重ねて年月を、經れば昔の懷しく思  
ひ出でたる今宵にも、涙に雨や誘ふらん 六兎に角に  
眞のあらで荒磯の浪のあなたに隔つとも、よるべの  
なごかなからん

○四季 富士

田子の浦浪うち出て見れば雲井に高き名の山の姿  
に四の時分くるぞわきて云ひ知らぬ

一春は霞の朝もよい、昨日の雪をそれながら、上な  
き花の色ぞて見るや山は富士の根 二雪に譬へてみ  
へかさね、扇を取れる手のうち、夏は消へて夕暮れ  
の眺をうつす富士の根 三秋ば更なり月雪見ぬ人にし  
も語りなば、中々なれや中々に、いはでや見なむ富  
士の根 四御冬になれば都人まつらん雪を鳥がなく東  
に住めば朝なげに見てこそあらめ富士の根、時知ら  
ぬ、時知らぬ山は富士の根、いつとてか鹿の子まだ

らに雪の降るらむ、鹿の子まだらに雪の降るらむ

中組新曲

○六 玉川

一いはで思ふ心の色を八重にしも、移しそむてふつ  
れなさに、春のつきけの駒とめていざ水かはん山吹  
ニ己が秋とやさをしかの、しがらむ花のすり衣、う  
つろふなみも紫に、みだれそめにし白露 三かはごに  
づとふ松風の、音だにあきはさびしきに、衣もうつ  
きのかきもあれてきぬたもいといそぐなる 四きの  
ふの袖もほしやらで、まだきぬそふあさつゆに、  
なみも光りをうちよせてさらすや賤が手づくり 五し  
ほかぜこして夜もすがら、月もみがけるかはなみに  
くだけてものを思ひねの、夢をさそひてなくちざり  
六とかへるかたの山深み、しかはあらしのこがらし  
に、ながる、水のなのみして氷もむすぶばかりなり

○玉 麻

一いかなるすじと夕顔の、つゆのゆかりの玉かつら、  
むかしをかけて戀わたる、えにしもいかであさから

ね二初音ゆかしき螢の、すだちし松のねをとへば、  
谷のふるすのめずらしく、春の日かけのごけき三さ  
くら山吹とりくに、はなのまがきにとびちがふ、  
胡蝶の舞ははかなくも、あがくれゆくけしき哉 四聲  
はせて身をのみこがす螢こそ、うすきひとへのなさ  
けにて、それかとばかり忘られぬおもかげぞゆかし  
き五さきみだれたるませのうちに、とこなつかしき  
なでしこの、もとのかきねを人しれず、こゝろにか  
けてしのべり六かゞり火にたちそふ戀のけぶりのよ  
とともに、たえぬ焰となりぬるは、ゆくえもしらぬ  
思かな

### ○四季の戀

序もの、あはれはこれよりぞ、しらざらましやしら  
ざらめ、ときにつけつゝうつるこゝろ、いづれか思  
のたねならむ

一いとよりかけしみごりこそ、ねみだれ髪のおもか  
げ、ながめせしまにいろもかも、うつろひやすき人  
心ニうすき情をおりはへて、いとはかなくもなきく  
らしつゝむにあまるむぬの火に夜すがら身ををやこ  
がすらん三年ごとに逢ごともぬる夜すくなきちぎり  
かななげゝごてやはりてりそふる、かけにぞちゝの  
かなしき四をざゝが上にたばしるは、わかれの袖の  
白玉おもひふるや軒につもる、うらみはごけてしの  
びね

### ○春の宮 みつの調と云ふ

一春の夜の間の風に吹き、開らく露井の桃の花、半  
ばならざる宮の前、月の桂の影高しニ雲井の空に君  
愛づる、姿優しき舞姫の夜や寒きごて惠そふ、花の  
錦の袂かな三静けき宮の窓の中、綾なく花の香り來  
て、恨みの長き春の夜に、巻きも得やらぬ玉すだれ  
四斜に琴を抱きつゝ、月に向へば曙なる影さへやが  
て、木隠れて一人情なき夜半の床五池の芙蓉も及び  
なき、人の袂に吹き渡る、風の香は中々に花よりも  
尚香ばしき六君が情の忘られて、捨てぬ扇の秋もふ  
け、斜ふく月の夜もすがら、御幸を待つぞ果敢なき

### ○雲井弄齋の曲 調子本雲井

一月 こや色 やれのふ山の端に 合 離れ離れのうき雲見  
れば 合 明日別れもあの如く 合 二思ひ染めたよ濃き  
紫の 合 袖は血汐の我が涙 合 さゆえい我が涙 合 三忘れ  
草かなふ一本欲しや植て育て、見て忘すりよ合さ  
ゆえい見て忘りよ

○九 段 調 唱歌なし雲井九段に合

○七 段 調 唱歌なし

○五 段 調 唱歌なし

### 奥組

○四季の曲 三曲ノ一

序花の春立つ朝には、日影曇らで匂やかに、人の心  
も自、延びらかなるぞ四方山

一春は梅に鶯、つゝじに藤に山吹、櫻かさす雅人は、  
花に心移せり 二夏は卵の花橘、菖蒲蓮撫子、風吹け  
ば涼しくて水に心うつせり 三秋は紅葉鹿の音、千草  
の花に松虫、かりなきて夕暮の月に心移せり 四冬は  
時雨はつしも、霧風、さえし夜の曙、雪に心移せ

り

### ○扇の曲 三曲ノ二

一扇は櫻の二重重、霞める月を書きて、水にう  
つろふ心ばへ、ゆへ懷しき有様 二黄昏時の紛れに、  
ほのぼの見へて咲けるは、こいゑ勝なる軒のつまに  
餘りてかかる夕顔 三武藏野もさらしなも、須磨や明  
石の面影も寫して此處に見る月の眺めはいつもひろ  
さは 四夢にばかりよなよな、思ふ人をみちのくの、  
勿來の關を誰れかすへて、現に事も通はず 五戀ひ戀  
ひて戀ひ戀ひて、戀しき人を待つち山、待つらんも  
のを行きて見ん、行きていざや逢ひ見ん 六明かしか  
ねたる霜夜の、床も淋しき、嵐の音はそよそよさら  
さらと、降るは霰の玉笛

### ○雲井の曲 三曲ノ三

一人目忍ぶの中なれば、思ひは胸に満ちのくの、千  
賀の壇签名のみにて、隔てゝ身をぞ焦る、二忘る、  
や忘らるゝ、我が身の上は思はれて、仇名たつ憂き  
人の、末の世いかゝあるべき 三たまさかに逢ふごて  
も、尙ぬれまさる袂かな、明日の別れもかねてより

思ふ涙の先立ちて 四雨の中の徒然、昔を思ふ折から  
憐れを添へて草の戸を、たゞくや松の小夜風 五身は  
浮舟の楫をたえ、依る邊も更に荒磯の岩打つ浪の音  
につれて、千々に碎くる心かな 六雲井に響く鳴る神  
も、落つれば落世のならひ、さりとては我が戀の  
などかは叶はざるべき

○ 羽衣 奥組新曲

一君の恵みはひさかたの、天の羽衣稀に着て、撫で  
し巖は其儘に動かぬ御代のためしかな 二星をこなふ  
るすべらぎの、雲の上まで長閑なる、朝の景色新玉  
の、春日曇らぬ天が下 三奈良の小川の夕風に白ゆふ  
かくる浪の音、神の心をすゞしめのみそきぞ夏の印  
なる 四齡久しき山人の、おる袖匂ふ菊の露、打ち拂  
ひ千年の秋や送るらん 五にはの海面見渡せば、比ひ  
浪間に有明の、月影冴えて白妙の雪をかけたる勢田  
の橋 六萬世かけて相生の、松と竹との深縁、變らぬ  
色は諸共におひせぬ契りなるべし

○ 若葉

一縁よしある初草の、若葉の上をみつるより、いと  
、乾かぬ袖の露、尙憂増さる旅寢かな 二現なや一人  
寢の夜半の枕に吹きまよふ、深山嵐に夢醒めて、涙  
催ほす瀧の音 三いざさらば都人に、行きて語らん櫻  
花、木の間の景色異なるを、風より前に見せばや 四  
隠れ家深き奥山の、松のとぼそを稀に明けて、まだ  
見ぬ花の顔を見るよりぬる、衣手 五黄昏過ぐる折か  
ら、ほのかに見えし花の色に、迷ふ心は朝霞、たち  
病ろうぞもの憂き 六いつしかに汲み初めて、口惜し  
と聞きし山の井の、淺きながらもさりとては、絶え  
ぬ契りを頼まん

○ 思川

一逢ふ脊仇なる思川、岩間によどむ水莖の、書き流  
すにも袖ぬれて、干す日もいつと白浪 二面影のつく  
づくと、忘れもやらぬ思ひ寢の、夢だに見えて明け  
ぬれば逢はでも鳥の音ぞ辛き 三いつの間にかはかき  
絶えて、隔つる中となりにけん、見し玉章の門司が

關と、名を聞くだにも恨めし四つれなくも行く人を  
こゝめがたみのからごろも、たつよりいとゞ我が袖  
は、露にぞしほれしほるゝ五戀ひ詫びて只一人、伏  
屋の床に夜すがら、落つる涙は音なしの瀧とや流れ  
出づらん六中々に辛からば、只一條に辛からで情の  
交る僞りご、思へば深き恨みかな

## ○新雲井弄齋の曲

一月諸共に郭、鳴きて入るさの山の端見れば、はや  
短夜も明け渡るニ又の逢ふ瀧もいざ白露の、餘りて  
置ける袖の上、實も袖の上三あはれ、果敢なき浮世  
の中に共に絶えせぬ契をぞ待つげにも契りをぞ待つ

## ○雲井九段 唱歌なし但シ中組の九段調に合

## ○橋姫

水の上の水泡、露に宿る稻妻、あるかなきかの世の中を宇治川の橋姫、身のうき時はたちよらんかけと  
たのみしあいがもと、むなしきさとゝなりにける契の程ぞかなしき、峯に生ふるさわらび、昔の花のお  
もがけ、忘れがたみに摘みおきてぬしなき宿におく

らん、先の世の契か今世のうちの情か、むなしきあ  
とゝ宇治の里、絶ずこゝにやどり木、一方ならぬもの思ひ、寄邊定めぬ浮舟、仇なる名のみ橋の小島ヶ崎にこがるゝおのゝはなの秋の頃、ねやのすまの紅梅それかごまがふはなぞの、昔の人ぞ戀しき

## ○宮の鶯

ほくわせいの春の朝霞、柳櫻の色深く、錦の秋香り

来て、御幸を待つぞ美はしき

二宮の鶯花になき、軒の燕は雨を呼ぶ、羨ましきは  
己が身の、心のまゝに任すらんニ揚家を出てし其の色に、君も心を惑はされ、一人の外は目につかで、遠ざくるこそ恨みなれ三擇れ出でし二八の春、移されて來ては六十の秋、空しき床に老はてし、ねをのみ鳴くぞ憐れなる四芙蓉花哀ろへて、露の玉光なし今は見えじな見えもせば、うとき人には笑はれん五壁にそむける燈火の、まだ焚き残す夜はすがら、窓打つ雨の音聞けば、いとゞきへ寝られぬ六たとへて言はゞ花鳥、文に作り詩に歌ふ、今様姿とりどりの

中にわびしき只一人

二十四

○飛

燕

一名清平調

一ひさ方の雲の袖、古りし昔忍ばし、花に殘る露よりも、消えぬ身ぞ果敢なき二世を照らす白玉の、數の光ならずば、天津乙女のかざしして、月に遊ぶなるらん三紅の花の上、露の色も常ならぬ、夢は殘る横雲、降るは袖の涙かな四懷しや古を、忍ぶに匂ふ我が袖、ぬれて干すこすのに、あはれ慣れしつばくらめ五類なき花の色に、心うつす此の君、現なき思ひこそ、いとくなほも深み草、散りやすき慣とは他所にのみ聞きし身も、うつろふは我がとが、恨むまじや春風

## 本調子之部

○巖根の松 三味 本調子

君が代は、天の羽衣稀にきて、なづごも盡ぬ岩根松常盤の色も春來れば、今一しほの増かゞみ、曇らぬ御代に住馴しつちの車の我ら迄、豊にすめる武藏野

に、月のいるさの山も無し合草より出て艸にこそ、入間の郡みよしのゝ、田面の稻は數つみて、民の合籠も賑はひて、朝な夕なに煙り立つ、霞ヶ關をもらさねば、名は假初にしらまゆみ、弓は袋に有明の合月のごかなる玉川に、さらす調布さらさらに絶せぬ御代こそ久しけれ

○磯の春 三味 本調子

琴のねになゝとせすぎし夜の雨合軒より落るおもしろさしらてくやしともろこしの合人のいひけんことはを合思ひいづればうべなれや、月雪花のうつり香に合あさくしまめやわが袖にゆかしく合のころ合磯の春 手事 そのこしかたのしたはるゝ合おなじ心にならひつゝ合世におもしろき糸竹の合しらべを友となしはてあそばん

○いざゝめ 本調子

つくば根の合嶺より落るみな川合戀ぞつもりて合淵となりぬる合つもりて戀ぞ戀ぞつもりて合ふちと

成ぬる

○いもかしら 三味 本調子  
世の中にあやかりものは、いもがじら、子に子が出  
来て孫だいて、成人すれば末ひろく、朝夕黄金の、  
露は浮くらん

## ○妹脊山 三味 本調子

千代迄合とたのむ妹脊の山になぞ合隔ての關や三芳  
野の、花の川よご瀧津浪合よひくごとに打ち寝す  
岩もる水の涌かへる音いとし殿御と招けご呼べご合  
みなぎる音につ紛らされ、辛氣辛苦の心のだけを  
書いて流せご片便り合思ひは同じ此方の座敷合またの  
思ひは合しら糸の合吉野をかりの御祓川合神に手向  
の柏の若葉合つみて岩間のそば傳ひ合見やるあなた  
に雛鳥が合逢ふて嬉き飛立こゝろ合空にしられぬ雪  
のうち合しごけ難所もいごはす下りて合戀し懷敷久  
我さんご、云ふに嬉き思はずも合逢ひたかつたの言  
葉さへ合山ご山とに隔たれば合見かはす計り聲ばか  
り心ばかりか鶯鶯の合陸に迷へる風情にて雛鳥久我

さん雛ごりご、いふが此世の名残りぞと知らぬ合心  
ぞ哀れなる

## ○六歌仙 本調子

其昔、立田の川のもみぢ葉を、鏑ご観覽ましませば  
吉野の山の櫻をば雲かご覺え久堅の、天地わかぬ國  
つふみ、中に六種の言の葉や合先遍昭のさま見れば  
實に繪にかける女を見て合心うごかす淺みどり、糸  
よりかけて白露の、玉にもぬける青柳の、なびきな  
びくや業平は、心あまりて言葉は、ほんにほんに言  
葉は萎べる花に、匂のこりて大かたは、月をも愛し  
これぞ此、積れば老の康秀の、言葉は身にもおはず  
て、心を云は、商人の、よき衣すゝし吹からに、  
秋の草木のしほるれば、むべ山風に散る木の葉合  
きしく庭の苔衣、喜撰は言葉かすかにて、月を見る  
にも曉は其の雲井より我庵は、辰巳にしかぞ住馴し  
よを宇治山の花よりも優る色香のいつゝきぬ合ニ上り  
それは小町よ袖ぶりし、衣通姫の流れごて合つよか  
らぬ女ごゝろか佗ぬれば、身を浮草のねを絶て、誘

ふ水あらば汲てぞしるき黒主は合薪をおへる山人の  
花のかげにも鏡山合いさ立寄りて見て行ん、曇らぬ  
儘に數島の、道に妙なるまれ人

○稻むしろ 本調子  
稻庭、川そひ柳合水ゆけば合みづ行けば、起臥すれ  
ど其ねはたえず手事二段ア、水行けば合おきふしすれ  
と其ねは絶ず

○糸の縁 本調子  
つれなくも、返らぬ西の月なれや、細き縁のそれそ  
れに合鳥が鳴ごいらへ無き、明の寢姿きくさへ愁く  
はかなき夢の東雲に廻りきて合二上りあれ自安寺の鐘  
さゆる合此川竹の流れに添ふて合焼野の薙子なく音  
は何處合問へご答へぬ幻しの、さるの泪を乳房にそ  
ぐ、都の空をちらくくこ、峯の嵐か松風雲ふ  
きはらせ琴の音に

○初 音 三味 本調子

世のちりをつゝむみゆきのふる歳も、ひと夜明れば  
合二上り 春景色合まだ里なれぬ鶯の合初音やさしくさ

」やきて合さゝより松の枝づたひ合につと軒端に笑  
ひ顔前彈手梅と添寝のかり枕合ともに嬉しき夢さへ  
も合さめてめでたきみつの朝風

○春 駒 三味 本調子

目出度やく春の始めの春駒なんご夢に見でさへよ  
いとや申す、よいとや申す花のや、盛りのや伊達く  
らべ、品よきふりを太鼓の拍子にな、打つれ引つれ  
合春の小町の粧ひなんごも、夢に見てさへよいとや  
申すくオ、それよくさ合筆にはかりを文とは讀  
まぬ、言葉の返事がよいとや申すチ、それよくさ  
合九十九夜くよ口説ばおちよ、情ないぞやあた胴よ  
くな、どうぞ暫しはなびかんせ、眞實せいもんでな  
ふ、御座んするまあ嬉し、せんご欺されたからは一  
ぶん立ぬぞへ、ア、辛氣それで寝もせで、迷ひまよ  
ふ人の心と川の瀬は、定めなや、春の山路はおもし  
ろや

○六段戀慕 三味 本調子

松の枝にはなひなづる巣だつ合たにのながれにかめ

あそぶ合ながれはながれに谷の合谷の流に龜遊ぶ  
沖の石とはな、おろかのさたよ合かはくまもなきそ  
てのうみ 手事六段 懸くらし懸あかし、松にしぐれは眞  
葛が原にうらみしに、今はなうれしやなびきあふ  
夜のあかぬちぎりは千代もかはらじ

## ○融

三味 本調子

前彈 あの籬が島の松陰に明月に船をうかべ、月宮殿  
の白衣の袖も三五夜中の新月のいろ、ちゑふるや雪  
をめぐらす雲の袖 合二上り さすやかつらの枝々に光り  
を花に散す粧ひ 合二上りにも名にたつしら川の浪の  
あら面白や曲水の盃受たり受たり遊舞の袖 三下り手事あ  
ら面白のゆふがくや、そも明月のその中に、また初  
月のよいよいにかけもすがたもすくなきに、いかな  
るやはれなるらむ、それは西笛にいり日の未近けれ  
ば其影にかくさるゝ譬へば月のある夜はほしのうす  
きがごとくなり、青陽の春の始にはかすむゆふべの  
とを山、まゆずみの色に三日月の影を船にもたとへ  
たり、又水中のゆうぎよはつりぱりをうたがふ、雲

上の飛鳥はゆみのがけにもおごろく、いち輪もくだ  
らず萬水ものぼらず、鳥は池邊の樹に宿し魚は月下  
の浪にふす 合聞こもあかじ秋の夜の鳥もなき 本調子手事  
鐘もきこへて月もはや影かたむきてあけがたの 合雲  
となりあめとなる、此光陰に合さそはれて月の都に  
いりたもふ粧ひ 合あらなごりをしのおもかげやあら  
名殘をしのおもかげ

## ○長 想 思 三味 本調子

にくからぬものとていと、わびしきは、獨り詠むる  
ねやの月合艸の庵の夜の雨合山ほと、きすひとことゑ  
合 ゆめばかりなるたまくらの下着にのこるうつり香

## ○蓬 菜 三味 本調子

明けましてよい初春や松柏樹、彼の浦島があとたれ  
て、八千代を祝ふ蓬菜の松の位を移してん合竹の園  
生も遠からぬ、雲井を此所に土器の合土も木も我大  
君のお流れを、ニ上り戴きますと手示波よふ、廻りか  
けたる酒機嫌、嘘じやないかや合ほんだわら、かう  
じて浮名たちばなの色香に名づけかしますと合熨斗

の附たい何所やらをところがら辻よろこんぶ、彼餅花の柳さへ、それ春風が吹くわいな合だいぐ重ね伊勢海老や齡ひの腰の屈む迄、かはり給ふな變らじと、永き縁をかち栗や、古言ながら縁もよし、よし曇言の何時までか、盡せぬ眞砂限りなく、夜はほのくと、日の脚も、はや山草に出にけり

○千鳥 三味 本調子

不便や濱邊に只一人、友無ちどり泣わめき、武士は物の哀れは知といふは、偽りよ虛言よ、鬼界が島に鬼はなく、鬼は都に有けるぞや、馴初し其日より御免の便り聞せてたべと、月日を拜み、龍神へ願立てのりしは、連て都の榮輝榮花の望みでなし、簾むしの様な姿を、元の花の姿にして責て一夜は添寝して、女に生れた名聞と、是一つの樂みぞや、女一人のせた辺、軽い船が重らふか、人の歎きを見る目ないか、聞く耳持ぬか、乗せてたべ、乗せをれと、聲を揚ては打招き、足すり爲ては伏轉び、人目も耻ずに泣居たる、海人の身なれば、一里や二里の海こは

ひとは思はねど、八百里九百里が游ぎも水入も叶はねば、今此岩にかしらを打あて、打碎き、いま死る少將様、餘殘惜いさらばや、無さうが者とりんによぎやつて呉めせと、泣々岩根に立あがる

○新芦荷新 三味 本調子

名に高き、難波の浦の夏景色、風に揉れて芦の葉のさはくとも音に聞く合此處は伊勢の濱萩をよしやあしとは誰がつけし合上我は戀には狂はねご戀といふ字が迷ふ故、さりとては白鷺にとゝまれ留れと招く手風に行過て、又も催す濱風に、芦もさは立ち磯の波、松風とこそざざんざ

○五尺手拭 三味 本調子

五尺、いよこのてぬぐひ、五尺てぬぐひなかそめて合おれにいよこのくれうより、おれにくれうより、やごにおけ合やごがいよこのよければ、やごがよければ名もたぬ合佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ合橋をいよこのかけふやれ橋をかけふやれ船橋を合はしのいよこのしたなる橋のしたなる鶴の

鳥が合小鮒いよこのくはへて、小鮒くはへてぶりし  
やりと

○濡 扇 三味 本調子

夜をこめて合鳥のそら音を忍び出合心の末は深草や  
深くも契る草枕、立ならびつ、裳裾ふむ合忍ぶ思ひ  
や稻荷やま、何れ浮世を薄紅葉合青かりし葉も嵐ふ  
く、秋のよすがののべ鏡合千艸百草いろ飾り、露を  
含みし虫の音も、鳴は我をば訪やらん合伏見の里を  
餘所に見て、鳥羽の懸塚こひ故に合何處定めぬ玉章  
を、空飛ぶ鴈に古郷へ合言傳もがなあくがれて心の  
花か亂菊の合狐川にもうろくと、草の袂も我袖も  
思ひぞ積る山崎の合情に結ぶ水の縁、かの合貫之が  
ひとゝきを、くねると書し水ぐきの合淀の川瀬の妹  
脊なみ合月の桂の男山合さもあらば有れ我々も、同  
じ心に同じ道合咲亂れたる花すがた、花の夫婦と散  
はてん、むら村時雨秋しぐれ、しぐれつたひに歩み  
来て難波ぞ戀の溜り水

○ことぶき 三味 本調子

明渡る、空の景色も麗かに合遊ぶいと遊なごりの雪  
と合なぞを霞にこめてや春の風になびける青柳すが  
た合縁りの眉が朝寝の髪か、好た枝ぶり慕ひて蕭る  
すかいで是が梅の花やごる、うぐひす、きの合ふた  
同士、かはらで俱に祝ふ壽

○女手まへ 三味 本調子

世の中に、勝れて花は吉野山、紅葉は龍田茶は宇治  
の、都の辰巳それよりも、廊は都の未申、數寄とは  
誰が名に立ち、こい茶の色の深みごり、松の位に競  
べては合かこいと云ふは低けれど、情は同じ床かさ  
り、飾らぬ實あかし合ふ、まぶや人目の中くゞり中  
だちいらぬ口切と、後は浮名のしたち窓影もる月の  
さしつけて、夫と云はねご世の人の合口にさる戸も  
立られず、逢ふて立名がたつ名のうちか、逢はて憧  
る、池田炭、炭を雪かといふたが無理か、其白炭を  
雪と見て合雪にはあらで霰灰、碎けて物を思ふ夜は  
夢さへ合ろくにみづこぼし、水さす人にふはふはと  
乗るは三ツ羽の輕はづみ合輕いは不諾と飛石の据ら

ぬ胸の裏表、紗帛さばけぬ心から聞けば思わく違ひ  
棚、逢ふて何して香合の、柄杓の竹は直なれど、そ  
ちは茶七のゆがみ文字合口説に解けし茶筅髮、憎い  
天窓のはち叩き、瓢箪成らぬ炭斗の瓢の花は夕顔の  
其れは棗の黄昏に、五條あたりや五帖半合よしや氣  
長に待合し、茶磨の廻る月と日の、有らば花咲花器  
に、離ぬ火箸より添ひて、憂さも話も初昔、昔話の  
祖父婆々と、成迄釜の中冷す縁はくさりの末長く、  
千代萬代もエ

○女 猩々 三味 本調子

うかむせばじんようの江の小さかづき數重ねても色  
かへぬ合松の位のいつ迄も老せぬや／＼女郎の名を  
もきくの水合大きかづきも浮み出で呑めとも盡ずか  
はらぬはきりころからころ面白や、みきごきくみき  
ときく名もことはりや秋の夜の合更ごも更に寒から  
ぬは身あがりのみの理りや、理りや白菊の着せ縫な  
らで、白粉の面色はさらにな變らぬは合宵の化粧のく  
まもなき所はじんやうの鐘聞までの酒宴に、猩々舞

をまをふよ合樹の歯の笙をふき浪にはあらぬ舌つ、  
み現か夢かそれがあらぬか亂れ足、折しも紅のうら  
風に秋の調や殘るらん合三下り千草の冬枯に雲のあな  
たに春や消へて、風に飛こふ雪の花散々たゞよふ君  
が袂につもるは思ひ千々に心は亂れて合本調子亂さか  
づきかざふれば宵からまいた家雞の合聲もばらく  
明かる空に酒ほしますぼしに合酒の泉のよも盡じ  
く萬夜さ明のとこ取ば合蒲團にはひ立足もとよろ  
くと、よはり臥たる枕の酔の、醒ると思へば銚子  
はそこにさめやらで、あたゝめ酒の燭鍋にばつと咲  
たる酒中花をちらすな餘處へ

○ひなぶり 三味 本調子

戀の重荷のな島の内、送りむかひにかく駕の誰であ  
らうとしてこいな合棒ばなに括りつけたる提燈の合  
日柄の約束、爲て來たな、高いも低いも、色の道な  
へ、立るたてんの息杖も、盡ぬ樂みゑいきつさ、さ  
つきおせ／＼夢の通路なへ

○西行 櫻 三味 本調子

九重に咲けども花の八重櫻、幾世の春を重ねらん然るに花の名高きは、先初花を急ぐなる、近衛殿の垂孫さくら合見渡せば柳櫻をこき交て都は春の錦さん亂たり千本の櫻を植おき、其色を所の名に見する、千本の花盛り、雲路や雪に殘るらん々毘沙門堂の花盛り、しわうでんの榮花も、是には争て増るべき、上なる黒谷下河原、昔遍昭僧正の手事二上り浮世を厭ひし花頂山、鷺のみやまの花の色、枯にし鶴の林まで思ひ知られて哀れなり合清水寺の地主の花、松吹風の音羽山手事三下り此處は又あらし山、戸無瀬に落る瀧津波までも、花は大堰川、ゐせきに雪やかゝる覽

○有馬じゝ三味本調子

風の手に打や鼓の、瀧なみに、松のしらべの合音そへて、狩出すしゝの數々は合雪に妻乞ふ聲々の、紅葉の色にひるがへる合旗さし物や飛道具、弓は袋に太刀は鞘合二上り治る御代にあいたけの、千代に八千代も盡ぬ言の葉

○老 松 三味 本調子

大君の、國やゆたかに秋津洲の、浪静なる四の海四方の景色もうらゝかに、眺たひせぬ御法の庭の老松も合梢に添へる若縁り、千枝に五百枝の木のもとに合二上りうきみかけにぞ群遊ぶ鳩も三枝の禮義をば亂さぬ御代こそ目出度けれ

○落し文 三味 本調子

うたゝ寝の、夢おごろかす風鈴の、憎やうらめし我思ひ曇りかちなる五月闇、誰がとふ人も夏の夜を明しかねたる窓のうち合聲もかすかに時鳥、鳴ゆく方は東か西か、戀しき方へ行ならば、あけて云はれぬ心の底を、告てくれかし落し文

○おちや乳人(七ツ子といふ) 三味 本調子

おちや乳人の癖として、脊なに子を負ひ寝させて置ひて、院の子ゐのこと言たものは、目なかけぞよの、花の踊りはな、さて花の踊りを一をござり合ここな子はいくつ、七ツに成る子が、いたいけなこと言た、殿がほしと謠ふた合ても扱もわごりよは、誰人の子なれば、定家かづらか、放れがたや、川舟に乗

せて連て去やれ神崎へ神さきへ合三下りても扱もわごりよは、踊り子が見たいか、踊り子が見たくば北嵯峨へごされの合北さがの踊りは、つゞら帽子をしやんと着て、踊りふりが面白い、吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、懸しき人を見たい者よ、所々おまわりやつて、どう下向めされ、とがをばいちやが負ひまゐらせう

○老の友 三味 本調子

世のうさをはなれて今は八阪山、月雪花のたのしみを、松のみどりや梅が枝を、つたひ遊びし鶯のおひたる聲をしるべにて、たづねし友をよぶこごり、木々の若葉の風そよぐことはぐさの糸の音を、聞きつくしてぞうたゝねの、夢の浮世にたつ月日、花に匂ひあらば月には草の露の玉、雪に景色のはるゝ明けばの

○川千鳥 三味 本調子

雲と見し東の山の初櫻合みどりとなりて鴨川の合岸の柳のなびくよは合ひるのあつさを忘れつゝ如意

のみねより出る月の合手事上りさはまさりぬる霜の夜に合早瀬を傳ふ川千鳥合幾千代ちよとつぐるにぞ合君がよはひのかぎりしられず

○かはづ 三味 本調子

水無月頃の晝烟へ來て見れば合茄子夕がほ白瓜冬瓜汗を流して暑を凌ぐ、かかる所へくさむらより蛙一疋にげ出て、掇々ひやいや危険こと、あまの命を拾ひしと、悦ぶあとよりざはぐぐ、草押分て蛇が鎌首合もつたて合もつ立合舌をびらく飛掛れば、蛙驚き飛しさり、たつた一言聞いてたべ、私が親父は鳥に取られ合ごうそ敵がとりたいと、一家一類相談なかば、夫れをお前に呑れては、斯る望みも水の泡哀れと思ふて蛇さん、どうぞ助て給はれと、雨を呼ぶより聲高く、鳴より他の事ぞなき合ことはり聞いて蛇も、おれが悴を薦にかけられ、世には似た事有ものと、ぞろりくと立かへる合あと見送り、蛙はことく打笑ひ、彼奴をまんまと事計し、口は重寶なる物と、傍への溝へとんで入る

## ○通ふ神三味本調子

田毎に寫る月影ならで、夜毎にかはる枕の數の、中に粹あり不粹有り、すまぬ心に清月の合何が辛氣の種じやら、尻目遣ひを餘所にして、任せぬ首尾を譯ある様に合愚痴なせりふか戀の實、末は野となれ山水の、神に縁を任せなん

## ○鎌倉八景三味本調子

まだ夜をこめて在明の、月も宿かる武藏野の、空も一つに契りこし、妹脊の中をふり捨て、かく立出る我つま之心の合中こそ恨めしや、恨みながらも立て、ふりさけ見ればほのくと、霧に隔たる安房、上總、出入船のかずくは、遠浦の歸帆これならん合汀の鳥もつがひく羽を休め、寄せ集りてふはと立や雁かもめ平沙の落雁おも白や合あれに見ゆしは有難や、いく千代くの神かぐら、鈴の森嵐木がらし颶と吹けば合笠にやかさに木の葉がばらくとちりいよくばらくと、江天の暮雪まのあたり遙に高き御山は、いつもかとこの富士の山、されく其

れ見て、見てからく戀がまします、數々の御言葉にはつと欺された、それで寢もせて迷ひゆく、思ふ願ひを神奈川や、沖にたゞよふ海人小舟、笞漏しづく諸ともに合泪にあかす舟のうち、是や誠に肅相の夜の雨とも云ひつべし、雨もはるれば網を引く、ひく、になびかぬ合つれなさよ三下り君を思へば合かく忍へども、甲斐ぞなき、つれなき松に降る時雨、情にへだては無きものを、忘れまじ、盡せまじ、思ひはつん／＼釣の糸合引てしやくる處で本調子釣た心は面白や、漁村の夕照合うつすらん實にものぞけき海の面一首はかくぞ詠じける合東路や合野島が磯の濱風に、我ひもゆひし、妹が顔のみと詠じ捨てぞ行程に、山市晴嵐おもしろや合千両とる共馬士いやよ馬かたいやよ、腰にや間柄約合手にや又煙管月の都をふらねばないよき、何した心底しほが無い合日もはや西に入相の極樂寺の晚鐘と、聞しに優るはつ池や合由井が汀による波、峰の合嵐にもみ合せ寄る波がごうくと、ごつと打てはさつと引き、日本無双

の名ごころや、これぞ妾が住家とて雪の下にぞ着たまふ

○桂 男 三味 本調子  
思ふこと、有ればこそ寝ね初雁の合夜渡る聲も寒からで合それに立名も久かたの月にや影を亂すらん、手事ニ上り露しんくとして眞葛に虫のうら音さへ、只まつ虫の音信も、尾花が秋を招くやら誘はゞ越ん關もめでし合虚音やつたふ夜半のくだかけ

○袖の雨 三味 本調子  
花ごろも袖もかはかでふるまゝに合ころしも宿のさみだれに合のきにわびしきあやめぐさ、あやめもわかれ天つそら、夜をうば玉のしるべもあらん聲までも、きにて行らしほとゝぎす、かりにもあらばふみだにも合よそなるも國のたれしらば雲のとほちのはるくと合三下りそこにぞてらすしやうみやうの月、手事本調子ふきはらひ心のちりもなにはがた清きたもとに法のうは風

○をきな(十二曲の内) 三味 本調子

とうくたらりくら、たらりらがりらりとうちりやたらりたらりら、たらりらがりら、とう所千代までおはしませ我らも千秋候や、鶴と龜との齡ひにて幸ひ心に任せたり、君が千歳を経んことも歌天津乙女の羽衣よ鳴は瀧の水鳴は瀧の水日は出とも絶へずたうたりありうごうくく、歌絶ずとうたり常にとうたり、あげまきやとんごうや、ひろばかりやとんごうや、座して居たれご歌まいろうれんぎりやとんごうや、合歌千早振神のひこさの昔より久しかれとぞ祝ひそよや、およそ千年の鶴は萬歳樂をうたふたり又萬代の池の龜は、甲に三玉をそなへ合渚の砂さくくとして合朝の日の色をらうじ瀧の水はれいれいとして夜の月あざやかに浮かんだり手事中にてニ上り天下泰平國土あんをん今日の御祈禱なりありはらやなじよの翁ごもよ合あれはなじよの翁ごもぞや、何國のをきなごうくくそよや千秋萬歳の悦びの舞なれば一まひ舞ふ萬歳樂くく

○呼子鳥 三味 本調子

我妻の、振袖しらぬ妹背中、芦の浦邊につき纏ふ  
浅き契りといふ中を、外の雌鳥と羽うちかはし合塘  
さだめぬ跡々を合尋ねて誰をつくも髪、よその見る  
目は呼子鳥

○よるべ三味本調子  
まかなくに、何を種とて浮草の合花に浮れく年月  
なびく合風のさしひく心のかちに合しめつゆるめつ  
得手に帆を合上げの暇に身をぬきばなは、ほんに阿  
漕が浦にしき合かひとる、棲のしごけなき、行衛は  
何處あま小舟

○竹の縁 三味 本調子

川竹の流れも深き、戀の細道たどり来て合君がよす  
がは白竹の、笛を相圖の一節に合心のだけを吹こむ  
翠簾の、隙洩る風のしみぐと合戀のしがらみ人目の  
の關に身はなよ竹の憂き思ひ合日もくれ竹を待詫て  
箭竹心に忍ぶ愁きの、つもりくして雪折れ竹よ合千  
里の竹に虎すむ辺も、私が思ひは熊笹や、直な操を  
立てこそ、二肌竹に結ぶ縁の願ひも叶ひ合上りいつ

縁  
○玉 川 三味 本調子  
か根びきの色まさる合肌への雪の下紐とけて竹の子  
山城の、井出や見まじと駒留て合猶水かはん山吹の  
花の合露添ふ春も暮れ合夏來にけらし見渡せば、波  
の棚みかけてけり、卯の花咲る津の國の、里に合月  
日を送るまに合三下りいつしか秋にあふみ成る野路に  
は人の明日も來ん合今を盛りの萩越にて合色ある浪  
に宿りにし、月の御空の冬深み本調子雪氣催す夕され  
ば合沙風こして陸奥の、野田に千鳥の合聲淋し、床  
敷合名だる武藏野に、晒す手事晒す調布さらく  
に合二上り昔の人の戀しさも今、將そひて紀の國の、  
きのごく成は忘れても、汲やしつらん旅人の合高野の  
の奥の水迄も、名に流れたる六ツの玉川

○たぬき三味 本調子

四十七

鐵砲下し弾薬、火繩おつ付てねらひ寄る合狸たまらずぐわさくと這出て、のふ暫く待たまへ合あの岩蔭の森の内合男だぬきが居り申し合夫婦が中を睦敷互ひに變なかはらじと言かはしたる睦言を身持に成て身も重く、それをお前へ打れては、腹成る我子は間から間、どうぞ助てたまはれと手を合してぞ頼ける合宮守ともに泪ぐみ、人間畜生と異れ共合恩愛の歎きかはらじと合鐵砲おろし立上れば、狸大きに悅んで、命助かる御禮に我妙得たる腹鼓、只今きかせ申すべしと、腹撫下し坐を組で合手事宮守ほとんご感じ入り、ちい／＼ぼう／＼の打分は、眞の鼓に増るべし合目出度／＼／＼と、笑ふてこそ歸りけり

おく山にあまたきりだすその中に、ひょくれん木と  
いつなれそめて合けむりのたねと小原女はらめのめが合手事あわせごとこゝ  
ろづくしにおくる日の、おもにもなんのいとふまじ  
君きみをつむりにいたゞきつれてあしならすりこぎ人瀬ひとせ  
の里さと

○玉の臺 三味 本調子

玉のうてなもこひしたふなみた川を我身じてと  
ふ瀬のあるなら、こひにやんさすてばや、戀はあだ  
ものな合手事散しひとむらさめに立よろやごもなごりは  
かなしきに合ましてやこれは淺あさからぬちぎりあるに  
さんせきかづきを、のもふちけを

○椿盡し三味 本調子

連々椿はる秋の、名は千里まで、臘か峰、その本阿彌の花の色、合白きをのみの寫繪もいかで及ばん妙蓮寺合薄くれなゐに濃紅は、同じ花形の因幡堂合まだき枝折の秋の山、嵯峨はつ嵐身にしみて、露時雨ふる頃よりも、好もてあそび埋み火の春にうづれば天ヶ下手事ニ上り賑はふ民の煙り立つ合これは鹽籠ちかの浦、汐汲海人の腰みのゝあづま合からげや東路や、きよすの里の散つばき合咲も殘さぬ角のくら合數の中なるかうの物、ぼくはん佗助から椿、八千代盡せ

かす  
○つま紅くれなみ 三味 本調子

春草の、青々として一入に、わきて床敷琴の音の四方にひびきて、可愛らしきつま紅ゐに、すみそむる送るこゆみに、かくはちがはじ

○みつのを 三味 本調子

幾年か、仇に調べし三つの緒の合いとし可愛と音じめの口説、退の退ぬとすねたせりふは心の手ごと、手事愛想づかしは云はぬが花よ、花も此身の今や世にふる詠めせぬまにナ、それよ合いつそ五ツの湖に棹さし留ん海人小舟

○つゝじ 三味 本調子

さなきだに春風ゆかしみよしのゝ、さとにながるゝ櫻川花とは見へしたにくのゝ、雪こそ見ゆれ、くれなるしほる八重紫やこむらさき合二正りゆかりの水の吉野川、おぼうの月のひまくにせめて一本折り入て花のなきのその奥を、たづねして奈良坂や合このてがしはのうらおもて、とにかくものを思へとや、いはねの山の岩つゝじ嵐の山のみねの高松合しごれにさへもそまでいくとせすごす身の、げに春毎

に咲きそむる大きりしまや小きりしま、ばたんつゝじの色とほく三下りさつませんよの花さかり夏山かけて合かをりくる其花車あいらしく、いとくれなゐに飛入りまんよ合まがきつゝじの花の露手にやむすんで我そでにくれ行く春をしばしとめん

○つれぐ(十二曲の内) 三味 本調子

徒然なる儘に、日ぐらし硯に向ひて、心うつり行よしなしことをそこはかと無く書つくれば、あやしうこそ物ぐるをしけれ合萬にいみじく共、色このまさらん男子はいとうそうぐ敷、たまの盆の底なき心地ぞすべき、露霜にしほたれて所さだめす惑ひありき親のいさめ世のそしりを、つゝむに心の暇無くあふさきるさに思ひ亂れ、さるは一人寝がちにまごろむ夜なきこそおかしけれ合世の人の心まごはす事色慾にはしかず合二より久米の仙人の物洗ふ合女のはぎの白きを見て通を失ひけんは誠に手足はだへなんごの清らかに肥あぶらづきたらんは外の色ならねばさも有んかし合されば女の髪すぢをよれる綱には合大

象もよく繋がれ女のはける足駄にて作れる笛には合  
秋の鹿かならず寄るとぞ言傳へはべる自らいましめ  
て恐るべき合つゝしむべきは此まごひなり

○鶴の聲 三味 本調子  
軒の雨、たち寄るかけは難波津や合芦ふく宿のしめ  
やかに語り明せし可愛とは、嘘か誠か其言葉に鶴の  
一聲幾千代までも、末は互ひの友白髪

○釣 瓶 三味 本調子

百夜通ふ車にあらで其もとに、双ぶ姿のぬれ乾く合  
ひまも互ひになみの上へ、嬉ふあふぞと心のいそも  
やがて引手にふり分られて、辛氣ほむらの炎も水  
にうつりやせじと耻敷、顔はもみぢも汲て知る、綱  
手に通ふ泪の零合落て音する音信合露も洩さぬ闇の

内

○鶴のすこもり 三味 本調子

前引げにことぶきの御代なればぎりよふはそのまに  
あそぶしんじやくそのはやしにすむ、伶人は鼓をな  
らし、龜はうき木に戯れて合その枝々に鶴が巣をく

む難鶴もうけし眞鶴に、松のみごりに千代かけて、  
鶴の巣ごもり末をまつ手事二上り君が代は君が代は、千  
代に八千代に、さゝれ石の、いはほとなりてこけの  
むすまで、げにおさめばや國とかやな

○閨の文 三味 本調子

夜や寒き、衣や薄き一人寝の、夢も破れてうつとり  
と合硯引よせ摺墨の合音さへ忍ぶ閨のふみ合一筆染  
て顔あげて昨日は、恨み今日はまた合戀し床敷とり  
くを何から先へチ、辛氣合ふみだに身には儘成ら  
ぬ、まして浮世はことわりや

○子の日 三味 本調子

千代を重ねし常盤の松は猶も御代をば仰くなり、君  
が代は納る國や、四ツの海、岸うつ波も長閑にて千  
歳を過る難鶴が、直なる枝に巣をくひて、惠も深き  
玉川の流れに住る我等まで、心うきの龜あたま合  
萬代までも幾千歳合二上り實に納れる國かなと君に引  
る、松ヶ枝の、立寄る影はいつまでも、老ても朽ぬ  
常盤木と合誰か言けん瑞籬の、久しき世々を崇ひこ

め、高臺にのぼりて見れば煙立、民のかまごは賑は  
ひて、治るかごの目出度さよ

○難波獅子 三味 本調子

君が代は合ちよにやちよにさゝれ石のいはほとなり  
てこけのむすまで合たちならぶ合やつほの椿八重櫻  
ともに入千代のはるにあはまし 手事二段 たかきやに合  
のぼりて見れば煙たつたみのかまごはにぎはひにけ  
り

○名取川 三味 本調子

みちのくのしのぶ文字すり誰ゆゑに、みだれそめに  
し思ひをも、せめてしばしは忘れ草の合それにはあ  
らで我名をば忘れんことの恥かしと、袖にうつして  
行く道の一人の旅の名は二人づれ慰めながらひとふ  
しの、踊り拍子のかけ聲や 合二上り ひんだのをざりは  
面白や合お、それそれよわが名はなにとくりかへし  
かへしつゝ合ゆきゝ人の笑ふとも、なんのまゝよ  
き、まゝの川これも川邊につきにけり 合三下り いさや  
渡らんむかふの岸と、おもひ渡りてよく見れば袖に

あとなき襦衣我は戀せぬ身なれども、浮名をながす。  
此川の名も今更に恨めしき合よしや流れもはてしな  
き、底なる我をすくはんと合川はさまく 多けれど  
伊勢の國にては御裳すそ川の流れには天照太神の住  
み玉ふ、熊野なるおとなし川の瀬々には權現みかけ  
を遷し給へり合光る源氏のいにしへ八十瀬の川と詠  
めける合鈴鹿川をうち渡りて、近江路にかゝれば、  
いくせわたるも野洲の川そのまたあぜかぐんぜ川、  
そば、淵なる堅瀬川合思ふ人によそへては阿武隈川  
もなつかしや、つらきにつけてくやしさは藍染川な  
りけり合墨染の衣川、衣の袖をひたして、岸かけや  
まこもの合藻くづのしたをおしまはし、かづきあげ  
すぐひあげ、見れどもく 我名はさらになかりけり

○夏景色 三味 本調子

ゆたかなる御代に住身の嬉しさは樂しみしげる夏山  
の合松にかゝれる藤浪の裏紫にさける色合青葉まじ  
りのおそ櫻初花よりも珍らしく合眺めもあかて干旱  
振加茂と日よしの葵草そのみまつりの頃ほひは合所

々に若竹の代々を榮えんためしかや合また五月雨になりぬれば早苗とるなるさをとめの合よごれぬものは田歌哉、げに面白くいさぎよや合匂ひも深さ花橘にひかれてしとふ、やまほとゝきす合なほをちこちに音信て返るけしきや又の日はおふさくるさの道のべの中にしげれる柳影清水流る、合涼きにしばし合とてくむ盆の合めぐれるほごは久かたの合そらもなくもらぬ水無月のなごしのはらひ清くして千歳のいのちをのぶそめてたき

○露の蝶 三味 本調子

世の中を、何にたとへん飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬と、變りやすきよ人心いまは合此身にあいそもこそも、つき夜の空や鶴音を、恨みし事も仇枕、憂きを知らずや、草に寝て、花に遊びて朝には、露に養ふ蝶々の合身ぞうらやまし無爲や思ひきり無き女子氣の、涙に浸すそで合袖まくら

○横づち(打ばんに合) 三味 本調子

横づちはもしやほかよりあひづちがあいにくるかと

たなのはし合こけつまろびつかたでうち合ちから一ぱい色つやを合うちだしたるくぜつごと合よいのきぬたはきぬ／＼に手事かなしき風の袖のあめ、かはくままちてあすの夜も合かたいやくそく打ばんのせなかをなでたりたりたり

○七小町 三味 本調子

まかなくになにを種とて浮草の、なみのうね／＼生ひしげるらん合草紙洗も名にし負ふ、その深草の少将が百夜かよひもことわりや、ひのもとならばてりもせめさりとてはまたあめがしたとは、下ゆく水のおふさかの合二上りいほりへ心を關寺の、うちも卒都婆もそでつまを、ひくてあまたのむかしは小町合いまははづかしいちはらの合こぜきも清き合清水の大悲のちかひかゝやきて合手事三下りくもりなき世に雲の上、ありし合むかしにかはらねど、みしたまだれの合うちやゆかしきうちぞゆかしき

○萩の露 三味 本調子

いつしかも、まねく尾花に袖ふれそめて、われから

ぬれしつゆの萩合いまさら人はうらみねご合くづの葉風のそよとだに合おとづれたえてまつむしの合ひとり音になくわびしさを、夜半にきぬたのうちそて合三下りいと、思ひをかさねよと、月にやこゑはさえめらん合手事本調子いざさらば空ゆくかりにことゝはん合戀しきかたにたまづさをおくるよすがのありやなしやと

○春の契り 三味 本調子

前彈花を見は山邊にしかじ三芳野や、かめのおやまはいはでしる合たよりて昨日今日もまた合二上りしをりをかへてとし歳に合老をたずくる杖竹の、悉せぬ代々のかぎりなき 合前彈 手事中散し手事散し なほいく山の花をたづねん合なほ幾春の花を詠めん

○羽織つま

袖ひちて、結びし中も薄氷、とくと合點は仕ながらも合まだ春さむき雲行きは誰にあたつて武庫山おろし合いたくな吹きそ、身は捨小舟合二上りあしとよしとは由ある中よ夫さへふしのまにく、口説が絶ぬ

しょんへ合雛と星とはな、稀なる契り、それさへきつと守つた誓紙のをもて、あだし心はないわいな

○袖づきん 三味 本調子

夕嵐さむさ厭はぬ袖頭巾合つ、めご人目立ばなの花の合薰りも空ふく、櫓太鼓の呼出しを合ちよつと中戸へ知らすのは、ごふ云ふてよからやら、思ひ直せごかこつ身を、祈れご更に神さんも、惚た同士は是非がない合只世の中は戀草の、たねと眞砂は盡せめや

○あやづる

浮世とは、誰がならはせしすね言葉、宵の妹脊は單の帶か、肱を枕にあやづるよ、蟬の鳴音に尾花が招く、私やいやいなと駒下駄の合音はいくせの浮名に

○あさとて 三味 本調子

定めなき、嵐にそいて同じ枝に、花かと霜の置てもひとり合鳥の鳴聲はるには似ても、落葉いろ／＼落葉が中についた、鴨脚に取あげ髪の合いへば姿も大坂と云ふ、在所うまれの梅の花

や

響く、其豫言はだしみくと、可愛と書けばいとし  
と返事女子氣にして男氣の、結ふ縁のうちかけさへ  
も脱て詠めん千代見艸

月のむかしか、昔の月か、床敷かられて、和田づみ  
の合ゆたのたゆたの別もうきに合霧たち合渡る秋空  
ア・辛氣の朝嵐 合花ハナ紙にも合押さるゝ物を屬は  
かはらず来る物を

○秋 空 三味 本調子

秋暮れて、峯にこがれし紅葉の、かずちる山の夕風  
に合うかれて落つる瀧川に、すくひし杓に色とめし  
合末の契もたがやさん、こうしてさした盃の、二上り  
うけし一種の里言葉、春咲く梅や藤なみの合ふるべ  
のぬしにせかれてせいて、氣は浮舟のあだ枕

○野遊 び 三味 本調子

桙弓、春立くれば、四方山の合霞のごかに棚びきて  
老も若きも心さへ、足さへそらに成ぬれば合芽花ぬ  
く手も引きつれて、よるは董をとことはに合家ぢも

餘所に戯るる、番ひの蝶の夢の間に合菜種の花も咲  
句ふ、世に樂さの限りなし 手事 果しもあらで花むし  
ろ、居ながら汲や春霞 合その盃の數々に、千歳をの  
ぶる、心地して、ア、面白の野邊の遊びや

○花 月 三味 本調子

所から、尾花が露に照まさる合影も果なき武藏野の  
浮名のみ猶立ち添ひて、錦木の合千束に余るつらさ  
をぞ 合遠砧の合音にさへうちも寝られぬ暮ふ夜な夜  
な 手事 三段 逢ふことは、身には何時とも白雲の餘所  
に隔てゝ唉を待ち合散るをぞ惜む世の人の、春の心  
を花につくして

○大和文 三味 本調子

君が代はつきじとぞ思ふ神風や、御裳瀧川の澄まん  
限りは合されば神代のはじめて末久方の君の道、  
いまもたぬせじ古へは、未だ天地わかつして雌雄の  
かたちもわかつねば、ただ鳥の子の如くにて、くゞ  
もりきさしふくむなる、澄みて清きは雨となり、お  
もく濁るは土となる、ふたつの神のあらはれて、み

とのまくばいありし時三下り天照神のこの國へ、降りましますすめらぎの合末たへの世ぞかしこけれ、天てる神のその昔合岩戸にこもり給ひしに、數多の神のなげきつゝ岩戸の前へ舞ひうたひ神樂を奏し給ひける合手事神はその時おもしろやと岩戸を開き給ふより月日のかげも明かに、峰高き春日の山に出づる日のくもる、時なく照すべなりと、よみしもさら理りや、寶祚は幾代なほもつきせし

○八重衣 三味 本調子

君がため春の野に出で、若菜摘む、我が衣手に雪は降りつゝ合春すぎて夏きにけらし白妙の、衣ほすてふ天のかぐ山合みよしのゝ山の秋風さよふけて、ふるさと寒く衣うつなり合手事三段秋の田のかりほのいほのとまをあらみ、我が衣手は露にぬれつゝ合きりぎりすなくやしも夜のさむしろに合手事三段衣かたしきひとりかもねんころもかたしきひとりかもねん

○八千代獅々 三味 本調子

いつまでも變らぬ御代にあいたけの合よゝは幾千代

八千代歴る手事雪そかれる松の一葉に、ゆきそかれる松のふた葉に

○宿の春雨 三味 本調子

百千鳥、嘲る春は物事に、あらたまれ共世の中の變り行こそはがなけれ合千代の松原千代までご、頼しかひもなぞかは手事二上り其うたかたの衰れさを、遺るかたみに取添へて、語り暮せる宿のはる雨

○櫻川 三味 本調子

まへ彈あら玉の春は氷もとけそめて合なみの花こそよ見る度に飽ぬ色なり足曳の合片山椿今ぞ咲く合花に心を越の雪、其初あらしあかしれん、まだ青柳のいと幽艶き玉水の咲ぶりもよき都べに合ふみからいごの嚴しま合互ひに峯の雪解けて千歳もちづる鹿の松

合みちさひ渡る照明の月手事常盤山、やつほの峯の

玉椿合色もかはらで幾世経ぬらん

○瀧盡し三味本調子

音に聞く吉野の瀧の其末は、妹脊の山の、中にはや立つ龍門の、流れも那智のまさなきに合忍ぶ契りの音無や、花のかみの音羽山、亂る瀧の白糸を繰返しつ、青柳に合櫻まじへし都の錦、くれはあやはの織姫や、天津乙女が夏ごろも合二上り引の、瀧津瀧も越す五月雨に、何れあやめか顔よ花引手數多の身なれ共、いなには有らぬ有馬山合にも名而已あげまきや、皴の瀧の其音は合絶すとうたり翁が瀧の、表や箕面裏見なる合それは東路日の光り合月に玉しく嵯峨野の露や、戸無瀧に落る大堰川、下す筏に降る雪は散かふ花と見紛ひて、山静なる峯の雪ゆたかに積る養老の、猶も齡ひを増す泉

○殘月三味本調子

磯邊の松に葉隠れて合沖の方へと合入る月の、光りや夢の世を早ふ合覺て眞如の明らけき合月の都に住やらん 手事五段二上り 今は傳だに臘夜の合月日ばかりは

廻り来て

○三吉三味本調子

ふびんや三吉しくく泪ほうかむり仕て目を隠し合沓見集て腰に付、身すばらし氣なる後ろかけ、未一度こちら向ひてたも山川で怪我仕やんな、雨風ゆき降り夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで煩はぬ様に仕てたもや合毒な物たべずに腹はしかの用心しや合千三百石の世とり子が、紋の有る腹あてして黒髪か剃下し、手足は胼に霜ばれて、あられふ物かと式臺に、身を伏しづみ泣出す合傍に有合ふ一分十三、是たしなみに持て行やと、涙ながらに差出せば、恨めし氣に見返りて、親でも子でも無ならば、病ふが死なふが御かまひない此一分も入ませぬ、馬士こそすれ、伊達の與作が惣領じや、母様でも無ひ他人に、金貴ふ筈はない、胸懲な母さよふ覺にて居やしやれと、わつと泣出しいちらしさ母は魂消入て、御家の御恩を思はずば、何一人子を手放して何の遣ふ、奉公の身のせつなさと、悶へこ

がれて泣居たる合早お姫様の御立と、行列そろへ合  
お乳人には乗物お姫様の御機嫌は、最前の自然生め  
が、謠おらふと口々に、言立られて泣聲で、坂は照  
く鈴鹿は曇る、相の土山雨が降る、ふる雨よりも  
親子の涙しぐれくて出て行く

○狹衣三味本調子

一人おもひを枕に語り、せめて頼の、夢さへも、麻  
の狹衣うちさて、いとゝ寝られぬ秋の夜の、更て  
きぬたの音かと聞けばな、月ぞ合知らする我泪な合  
片しく袖のちゞに、悲く詠めしに、我身の秋はな、  
手事れんは颯と妻戸の時雨は辭よ合袖のなみだの合露の  
亂れ髪、ゆふにいはれぬ我おもひ

○さらし三味本調子

楓の島には晒す麻布賤がしはざは合宇治川の合浪か  
合雪かと白妙に、いさ立て布さらす合鵠の渡せる  
橋の霜よりも合さらせる布に白み有り候合なふく  
山が見ゆ候、朝日山に霞たな引景色は、たとへ駿河  
の富士は物かは富士は物かは合小島ヶ崎に寄る浪に

合小じまが嶺に寄るなみに合月の光を寫さばや合月  
の光を寫さばや合見渡せばく、伏見竹田に淀鳥羽  
も合何れ劣らぬ名所かな合何れ劣らぬ名所かなく  
合立なみくは瀬々の綱代にさへられて、流るゝ水  
を堰とめよ、流るゝ水をせき留よ手事所からとてな  
く、布を手毎に、まきの里人うち連て、戻ろふや  
れ合賤が家へ

○柳三味本調子

あめつちと久しかるべきあきつ洲の中に光を天照ら  
す、神のめぐみは千尋ある、たけのためしも色變へ  
ぬ、松の操もとりどりに限りも知ぬとこよもの合大  
木が中に千早振神を定むる柳葉の、香をかぐはしみ  
神垣に合思ひをかけて八雲たつ、前舞手事二上り手事散し  
のやゑがきをつまごめに、さしもつくりしますらを  
と、思ひしものを淺ましや、心一つを定めかねゆふ  
つけどりのいつまでか合ねにたてまじと今更に、し  
での合がすかすどりつけてさかきのかげに身をかく  
しける

○京名所 三味 本調子

殊更かしこき君の御まつりごと合關の戸さゝぬ折節  
に洛陽御見物申べく候、皇の御宮造りは、申も中々  
おろかなり、先音に聞へし東山、吉田みかやは、天  
照す御神を始めとして、日本六十餘州の御神を、觀  
請ありし靈地なり合弓手に高き御山は、和國無双の  
比叡山合傳教大師の開基にて、唐土の天臺山を寫さ  
れたり、中堂講堂かいだん堂、麓に山王二十一社、  
豐をならべて立給ふ合上りめでは黒谷壇如堂、若王  
じんしや永觀堂、東下りの道こにて合祇園の社清水  
寺、地主權現の花盛り、音羽の瀧の白糸を繰返しつ  
ゝ打眺め、大佛殿は廬舍那佛、歌の中山清閑寺、い  
ま熊野をも打すぎて、いつも秋には有らねども、東  
福寺にて名も高き通天の紅葉いなり山、咲亂れたる  
藤の森、うづら鳴なる深草山合伏見の竹田よご鳥羽  
までも見ひて候、扱又辰巳は宇治の里、八幡やま崎  
たから寺手事松尾かつら梅の宮、御室に近き小塙山  
合嵯峨や高雄あたご山、太秦北野たゞすの森合三下り

鴨川きぶね鞍馬寺、岩くら芹生八瀬の里合本てう子いた  
幾千代と縁を添へし相生の、松と八千代の大内桐民  
も富田の春毎に合雲にやご問ふ吉野山、咲初る花は  
さながら埋もれて合雪と見つらん、花兔、落くる瀧  
の清水に、流れを結ぶ逢阪の合其在原の筒井より倭  
錦あとたれし、藤谷ぞこの淋敷嵯峨の、定家かづら  
やよれ纏ふ、鴛鴦の思ひの二重づる合上り通ふ心そ  
荒磯の、なびく姿や誰が染かけしうへ柳合二人靜に  
忍ぶ夜に、別れを誘ふ合雁金の合夜も本能寺建仁寺  
おとや印金合劍太鼓くれ竹屋町、節こめて合君に  
引る、籠蔓の、榮ひを謠ふ鶴が岡

○菊の露 三味 本調子

鳥の聲、鐘の音さへ身に入て、思ひ出す程涙が先へ  
落て流る、妹脊の川を合とわたる舟の、楫だに絶て

かいも無き世と恨みて過る 合二上り 思はじな逢ふは別れど云へども愚痴に、庭の小菊の其名に愛て、晝は眺めて暮しも成らが、夜るくごとに置露の、露の命のつれなや憎や 合今は此身に秋の風

○出口の柳 三味 本調子

たてまつるヨ奈良の合都の八重さくら合サイ合 今日九重にうかれ来て 合一度の勤めを島原の合ヨ合ヨイサヨ合 出口の柳 ふりわけて 合戀と義理とのヨイサヨふたへ帶、結ぶ契りは、あだし野よサヲ露の合うき身を誰ゆゑに、サイ合世わたる船のかひもなや 合寄るべ定めぬ海人小舟、岸にはなれて便りなや 合島がくれ行磯千鳥 合二上り 忍び寝にく憂きなみだ合顔が見たきに又此處へ 合木辻の里の朝ごみに、菜種やけしの花の色、うつりにけりな徒らに 合我身はこれのふ此姿 合つれなき命ながらへて、又此ごろや忍ばれん 合忍ぶに愁きめせき笠、深き思ひぞせつなけれ本調子今は太鼓もなりやみて 合貴ひし文の數々も盡ぬ合あはれをヨイサヨ身に受て 合せめて 日那御恩ごくをなすなヨ御祈念と敬つて

○新 寿 三味 本調子

合報せん爲のあひの山 あはせましたや若さまに合別れたまひし心根を合思ひられて今とても合昔わすれぬ貰ひ泣 合ヨ合ヨイサヨ合がゝる哀れは又の夜に来るまじきはあつくわん曲輪の間夫狂ひヨ合たりをなすなヨ御祈念と敬つて

○吾妻獅々 三味 本調子

紅を匂ふ姿の糸やなぎ、縁りを垂れて昔を忍ぶ合みどりをあげて千歳を招く、へぬらんの、松といふ字を縫紋の、山の笑くぼに殘の雪の、可愛らしいじやないかいな合 お月さまいくつ琴の緒に 合一つますます壽く糸の合ねんくろりりんくと限りあらじな新玉の 合春にかへる暦も千代のしをりかな

昔より云ひならはせし、東下りのまめ男、慕ふ戀路や、松が枝の合富士の高根に白妙の合花の姿に吉原なまり、君が身に添ふ牡丹に馴て、己が富貴の花とのみ、箭竹心も憎からず 合思ひおもふ千代迄もなさけに合かさす後朝に 合糸竹の心亂れがみ合うたう戀

路や露そう春も、くれ竹の、かざぶ扇にうつす曲、  
手裏剣二上り花やかに亂れみだる、妹背の道も、獅々の  
遊て幾千代まで合かはらぬ色やめでたけれ

○あれ鼠 三味 本調子

詠びき釋迦に提婆や鯨にしやちほこ、月にむら雲花に  
風、國に盜賊家には鼠、宵は天井をぐわらくと伸  
間ねづみを呼集め、角力取やら踊るやら合ちゆつち  
ゆでせい、五百七十七まがり、猫のねの字もいやで  
候合先は梁越たへ、中にも鼠の大將は、天井板の透  
間より、下の様子を窺へば合夜もんくと更わたり、  
人もしづまる行燈もしめる、さらば是から座敷  
へ下やう、皆こいくと打つれて、柱や合障子をこそ  
そくく、ごつそりくと、下り揃へば、大將耳  
をよぢ振て、こりやく手下の鼠共合十四五疋は茶  
の間料理場臺所、山葵擦に近寄るな、走樋のもとに  
水壺あり縁をつたふて辻るなよ必ずく忘れても、  
棚の道具を引くづし、飯焚婆々を起すなよ扱又歎ぶ  
しの達者なもの共は、納戸へはいり簾笥長持かぢる

べし、尾長の冗は行燈部屋、油ざくりに尾を入れて  
随分あぶらをねづるべし、扱まめねづみの奴ばらは  
格子の上に釣た蕃椒かぢるべし、はつか鼠は化粧の  
間、いつもの贅臺かぢるべし、我はこれにて休はん  
と、違棚へぞ上りける合此所にこりく彼所にごご  
くぐわつたりく合かゝる所へ二三正息を切て駆  
來り合さあく大事が起り候、私共が料理場の、肴  
戸棚をかぢる内、臺所に大騒動一寸のぞひて候へば  
赤まだらの大猫が、尾長の首すぢ引くわへ、きやつ  
と一聲鳴た計り、後はごりく恐ろしや、片時も早  
く落たまへと申上れば、大將胸さはきして、やうこそ早く知らせたれ、それが誠のちうくと、云ひ捨  
二階へ上りけり

○松づくし 三味 本調子

松飾る、軒に五葉の縁して、未だ若松や姫小松、常  
盤木祝ふ千代かけて、子の日とこよの松の枝、聲す  
みの江に颶々の、さつと木間の春霞、あからむ内に  
志賀唐崎の松かきや、いつの間にかは磯馴松合色も

深き、松重ね其うすにふに書送る合ふみと假寝や曾根のまつ、盡ぬ眞砂のたとへよる、盡せじ物は海松の位も高き松山に橋立ならぬ松島や合三保の松原吹風が、琴の音さそふ合うたかたや、花にさき立ち紅葉におくれ、月に宿かすおはしま、葉がへぬ松の世々に榮にて

○こすのと 三味 本調子

浮草は思案の外の誘ふ水、戀がうき世か合浮世が戀か、一寸聞たい松の風合問へご答へず、山時鳥合月夜は物の、遣るせなき合癪に嬉き男の力じつと、手に手をなんにも言はず、二人して釣蚊帳の紐

○宇治めぐり 三味 本調子

萬代をつむや茶園のはるかぜに、ことぶきそへてさを姫の、にきおふ袖の若縁、ひと目をなにと初むかし合霞をわけて青山の小松のしろや綾の森、ちとせさはりのなしむしに合よはひゑいせんはゞむかし合たれにもとしをゆづり葉の合千代のみごりの松の尾のかみ代の末の後むかし合ひかりをそへて園の梅、

なほ白梅の色香にも合ふかくぞうつる川柳、湖水こそすたに宇治のなみ合手事二上りはつ花見する山吹の、花たちはなの匂ふてふ、ゆめをむすぶのおりたかや、小鷹の爪にひだしめて合こかげもおふき一森の喜せんのいほの夏の峯、瀧の音をも合手事三下り菊水の朝日山の端薄もみぢ、たか尾の峯にかりがねのあさるこゑ／＼笠ごりの合かずまんごころおもしろや合心をすます老らくは合いはひのしろとうたいた舞つる

○浮 寝 三味 本調子

うきねの床にことふは、枕にかゝる涙なり合せめてはゆめになりともと合まごろめばみじか夜に、山ほとゝぎすおとづれてはや夜があけた合しんぞつらい世の合こがる、浮き身の消もせて合ひるはひねもうす泣くらし、夜は夜ごとにふししづむ、楓の戸をうつ村雨や、梢にそよぐ松風は、ちぎりおかねごはかなや合君がとふかとおごろかされて合いとゞ涙に目がくれてかべにそむける燈火の影かすかなる曉の鐘手事つく／＼ときくからに、とかく叶はぬ世の中に

合ふつと思はじ合とは思へ、とは思へごもまたすて  
がたき合すきし別れに逢瀬といし言の葉を忘れま  
い合この世はさておき後の世ものふさてな合あ  
い見ての後の心にくらふればかほご物をば思はじも  
のを、むかし戀しや今の身は

○こんきやう寺 三味 本調子

去程にこんきやう寺のこん經きん經法印が座の正中  
につゝと出て、こんきやう寺のこん經文行法院が法  
力があらはしお目にかけ奉る御寶前に、頓て壇をそ  
飾りける、八百の燈明の油には、白胡麻がらやら黒  
胡麻がらやら眞胡麻がらやらいぬ胡麻がらやら胡麻  
がらくひごながら、まごながらの油をたてられたり、  
扱にうもくには珍敷一べんへぎなが片干はじか  
み、また、ひ摘蓼つぶ胡椒、野撫子野石竹菊きりき  
り三菊きり是を合せて六菊きり切て掛たる幣帛は、  
大奉書中奉書小ぼうしよ、扱又本尊に掛られしは、  
のら如來／＼三のら如來、六のら如來、是を合せて  
十二のら如來又合せて廿四のら如來の眞言に向ひの

長押の長なぎなたは誰が長押のなが長刀ぞ、兵部が  
前を刑部が通る、兵部が屏風を刑部が持すはほうす  
にかはせてしやうぶがぼうすの屏風にしよ、向ひの  
山の鶴／＼／＼鶴首は白鶴首かあひ鶴くびか、  
眞黒くろく鶴くびをひとつ立ふり立祈れ共、少しも  
驗は無かりけり、僧は大きに赤面して、重ねて奇特  
を見せん逆袈裟も衣もおつ取おゐてな、殿様の小長  
袴、武具馬具／＼三武具馬具これを合せて六ぶくば  
ぐ、折敷に箸百八十せん、天目百ばい茶百ばい棒八  
百本立ならへ責かけのみかけ祈れども、され共、驗  
はなかりけり、僧は大きに怒をなし、實に我とても  
とも驗も無しいさ、法華經、陀羅尼ほんだい二十六  
祈りける、實に御經の功力にや、大願成就ありがた  
しと、僧はくゞりにくい巣まごくゝつて、裏の古胡  
桃の木の古伐口のふる枝の、引ぬきにくひを引抜て

新茶たてう茶たてう、青茶たてう、茶たてう粉茶た  
てう茶たてうとはつほのしよらちは、らりるれろ

○三段獅々 三味 本調子

八千代歴るとも變らぬ色はへ、松に藤枝の其面影を  
合見るに一入、二しう三しう幽艶やこにかく、思は  
る、合花は吉野よ紅葉は高雄、松は唐崎かすみは外  
山合いつも常盤の、ふりはさんさ幽艶や、とにかく  
思はる、手事

○櫻盡し 三味 本調子

飽でのみ花に心は盡す身の思ひあまりて手を折てか  
ぞふる花の品々に、わきて揚貴妃いせ小町誰が小さ  
くらや、兒ざくら、年も若木の姥櫻、我れやこふら  
じ面影の合花の姿をさきがけて、いくへわけ越し三  
芳野の合上り雲井に咲る山ざくら合霞の間よりほの  
かに、見そめし色の初櫻合絶ぬながめは九重の合都  
がへりの花はあれども、馴しなれし、東の江戸ざく  
ら合名に奥州の花には誰もうき身を焦す壇寵ざくら  
花の振袖八重一重したには無垢の緋ざくらや桺に淺

黄の色ませてわけよき縫の糸ざくら合引手あまたの  
身なれども責て一夜の戯れに合ゑひをす、めよ熊谷  
の、猛き心は虎の尾の、千里に通ふ戀の道合忍ぶに  
愁き有明ざくら、君が情はうづ櫻合よしや思ひは桐  
ヶ谷合浮世を捨し墨染ざくら、昔を忍ぶ家ざくら、  
花のとぼその淋敷に月の影さへ遲さくら合下り闇は  
あやなし紅梅ざくら合色こそ見ゆぬ折袖も、匂ひさ  
くらや菊ざくら合花の白露春ことに、打拂ふにも千  
代は經ぬべし

○里の春 三味 本調子

よしのさぞ、廊あたりの菜種さへ合雲井につゞく花  
の色、もれて浮名が立とてもよしや厭はじ身一つに  
合情を盡すつき櫻、心残して行鷹の合くれのむつ言  
いさゝらば、戸さゝね御代のうるほいやいとしつば  
りと降る雨は春の浮艸うき臥に手事二上り嘘も誠ともい  
つはり一つに淀む淵の水おもひの空のもや晴て、と  
ころ斑と明る夜にいと、澄きる鐘の音は、幾たの  
もしき里の春

## ○小夜千鳥 三味 本調子

つ、むに餘る袖の雨、晴る間もなき胸の闇、いふに  
云はれぬ私が苦の、放れぬ鴛鴦の思ひ羽は、何の報  
いか神ちからにも、こりやまあごうじやぞいな合父  
よ母よと鳴聲きけば、妻にあふむが移せしことは  
エイ何じやいなつがもない合世にも因果な者なら私  
が身じや可愛男にいくせの思ひ、あつて何じやいな  
つがもない忍び寝になく小夜ちどり

## ○さゝのつゆ(酒ともいふ) 三味 本調子

酒は計り無しとのたまひし合聖人は上戸にやましま  
しけん合三十六の失有りと練めたまひし合佛は下戸  
にやおはすらん、何はともあれ八雲たつ出雲の神は  
やしをじの、酒に大蛇を平げたまふ、是皆酒の徳な  
れや手事二上り大石さづける畏みも帝の醉のすゝめなり  
合姫の尊のもち酒を、さゝよさゝとの言の葉に傳へ  
くて今世の、人もきこしめせさゝきこしめせさゝ  
手事三下りりうはくりんや李たいはく、酒を呑ねば只の  
人合吉野龍田の花紅葉、酒がなければ只のこと合よ

## いくくのよいやさ

## ○嵯峨の春 三味 本調子

こそ見にし彌生なかばの嵯峨の花合嵐の山の山櫻、  
いろかたへなる花の園、散りても残る心の花に合思  
ひ亂るゝうき身にも又繰り返す此の春も合くむやい  
づみの大井川合浮ぶ筏の行く末は、人の手いげとな  
る花を合怨むやおのが迷ひをば、ばらふはのりの御  
書合三下り嵯峨の寺々廻らば廻れ合水車のわのりせん  
せきの川波合川柳は水にもまるゝ合ふくら雀は竹に  
もまるゝ都のらしは車にもまるゝ、茶臼は挽き木  
にもまるゝ本調子手事我は色香にもまれもまれて玉の緒  
も、絶ひぬばかりに思ひ川合床にふちなす夜半のき  
ぬぐ

## ○さよかぐら 三味 本調子

千早振神のおしへのあとたれて、四海波間も静かな  
る松の嵐の音までも、さよふけわたる神かぐら合吹  
く横笛の音もさへて、歌ふ聲々おもしろや、四方の  
けしきもあさくらに、なほ音樂の袖袂、ひるがへし

ひるがへし昔もこゝにかくあらん、げに天てらす日の本の神と君との隔てなく、御代も榮へも宮柱、ふとしきたて、敷島の大和島根のそのまゝに、月の恵みも光ぞと夕日がくれの雲の端の、たなびく天の橋立や、そも神歌はうばたまの、我が黒髪も亂さずむずび定めぬ玉くらにまようりんねのこひのたね、かはすことばのかずくを瀬の眞砂にきつとひく、打白浪やうきすの岩に、はをやすめひよくの鳥のいもせごと、人目忍ぶやこよひ扇のかなめの契り、手にくるくとひでりがさ、かざすや加賀のあふぎ笠くるわはん女かねやの花扇、めぐるゑにしは扇のわかれ、風にちら／＼散るは櫻か嵐風よきてふけ、花の契りもかはひらしニよりさるほどに床のした、れ露こひて、淡路が島の東もにしも海まん／＼となんなくに風をつらね、空にかかる浮橋を打ちわたり打ちわたり立ちまふ雲の袖袂、引くはうしをの時つ風、治まる浪や芦原の國と臣民も豊かにて萬歳祝ふ春の聲、幾千秋とつきしなく治まる御代こそ久しけやほざに

れ

## ○さつま獅子 三味 本調子

問葉 ふたばしら遠つみ親のあとたれて、さかほこたてしその峯に合絶えせぬ煙千代かけて、嵐にはる、霧島の、神のみすゞにことふりて、誠にあまのかごしまの足駄の音も高々とつるの丸山頂の合赤きは花の櫻島、磯のおき海苔岩浪の、流れに洗ふさつまぐし合とけてさかしきふんじんの、獅子の勇みや亂れ髪、影をうつしてとびかけり 手事三段 むぞうらじげに百丈の高き上より蹴落しつ合 心をはかり代々をつき合 そのはや人の手ぶりぞと、いはでめぐみの深み草合 いよも合ゆたかにことぶきは合千代にやア八千代はふるともや、うごきは合せまい君がおさむる國じやほざに

## ○狐 火 三味 本調子

月はつれなや、早暁の鐘の聲、さらば／＼の聲もたへ行、小田の原合送りかへせば、ひゑの山風、身にしみて合なたねの花のうらがれ合けきの別に、月を

たものにのごひて、あるかなきかの、しゆびを思ふ  
がいのちさ合戀のおぐるま、まわるおのこのあれか  
し、心をのせて、あおふに合かぎりある身の、かぎ  
りをしらでかひもなき世と打なげき、なんの因果に  
しやばにきて、いきてそわる、身ではなし合月  
を見ばやと合ちぎりし人も合こよひ袖をやしばるら  
ん

○狐 火 三味 本調子

あだし此身をや煙りとなさば合せめてくるわのさと  
ちかく合くるわのや合くるわのせめて合せめてくる  
わのさとちかく合何を思ひにやこがれてもゆる合野  
邊の狐火さよふけて合思にやこがれてもゆる野邊の  
狐火さよふけて

○きぶね 三味 本調子

雲のゐにあれたる駒は繋ぐとも、二道かくる其人を  
いかに頼まん仇し野の、あだし此身は儘には成らぬ  
月日程へて昔のわけを、思ふもぬる、我袖の合湊へ  
歸るあだ浪の、よるくことに立出て、ふりさげ見

れば、大原や合御室に近き小塙山合糺の森の木の間  
わけ、通ひ車のたそがれ見れば、車のくたそがれ  
見れば、包むつらさを袂に餘る、わけをゆふせん左  
のかいな、もゝにすけ様命とほりし、其睦ごともい  
つしかに、かはる淵瀬と歎いた、海人の捨ぶね我一  
人、こがれくして行水の、影さへ清き加茂川や合二上り  
やつれ果たる合我顔かたち合かくに見捨ぞよしな  
やな、三尺袖を年がよりたら何振ろにしやうがいな  
合振れやふれふるつまいとし我ふるづまを、ひいひ  
い、後にみぞろの池浪に、ひよくと鳴はひよ鳥、  
小池に住は鴛鴦合はんま千鳥がちりんなりりん  
な、ちりんちりつちんく、ちつとして、搦な  
ゑりくりゑんじよの、岩間くを傳ふ、足は千鳥足  
合西は田のあぜ、浮雲あぶない、くくくくく  
あぶなうてならぬへ、細路あぜ路をくゞりくく  
て合くゞりくくして、松の嵐に三下りさつくとた  
ぎりて落る、鞍馬川合本調子戀の淵瀬とたどりしも猶  
も思ひはうしの時、つき出す鐘と諸ともに、貴布禪

の社に着にけり

○福壽草三味本調子

初春の見るものに、せんとつらねし合其往昔は、黃  
金花さく陸奥の合いはでもしるき盤堤山、今將おな  
じ日の本の、其都には數々の合そことしも無く咲つ  
ゞく壽そへて、床の花、神代のことも思はれつ合幾  
代契らん又幾世、それまた幾世ア、いく代いくよ經  
ぬらん福じの草

○夕霧文章三味本調子

前彈なに九年くかい十年花衣合きまゝに遊ぶ鶯の合  
梅に廊の戀風や、その扇やのかな山と名に立ち登る  
全盛の合まつにしがらむ藤かづら、なれそめて濃紫  
の合明の鳥のそれなりにかねもにくまずね亂れ髪の  
結ばれつ、すいた同士の中さへもあだに別れて丸一  
年、ふたとせごしにおとづれも、泣いてあかしてか  
こちごと、怨みを誰に夕霧が合一世とかけぢをつく  
ぐと合もたれかゝりし床柱、思ひに沈むこひが浮  
世をなんじやぞいな、だるません、いろごと知らぬ

こひ知らず

○夢の浮橋三味本調子

石山や、源氏の巻の葉をわけて、鶴照月にうかみ初  
め合浪間を分る有様や、有にもあらで消る簾木の合  
もぬけて遁れ空蟬の、合ぬ愁さを憶る、中に合思ひ  
ぞ積る君の夕顔合くる、夜を遠しはかなくも消し花  
の縁かたみの、扇名にさゝずみをつくしてや飛蠅合  
かたみに絞る袖の露、つゆに宿かる鈴虫の合ふり捨  
がたき憂き思ひ、晝は幻夜な／＼は心づくしの夢の  
浮橋

○由縁の月三味本調子

憂しと見し、流の昔なつかしや、可愛男に逢阪の關  
より、愁ひ世のならひ合思はぬ人にせき留られて今  
は野澤の一つ水合澄まぬ心の中にも少時、すむは由  
縁の月の影合忍びて寫す窓の内廣い世界に住ながら  
合狹ふ樂む眞と實、こんな縁が唐にも有ろか合花咲

里の春ならば、雨も蒸りて名や立ん

八十八

みちのくのいはでしのぶをなさけとも、愚かなる身  
はゑそ知らず、つばの石文かきつくす、文も許さで  
心から合心に傳ふせきれいの、教への外の法の道、  
うそかまことか白壁を、にらみすまして夜もすがら  
合座禪にあかすひとり寝は、鐘に怨みもあらばこそ  
鳥の八聲も夢となりニ上り悟りの窓の夜は明けて手事  
のごけき春の朝日影、心とけては本來のいちもつも  
なきゆきだるま

○雪 だるま 三味 本調子

花も雪も拂へば清きたもと哉合ほんに昔のむかしの  
事よ、我まつ人も我を待けん合鶯鶯の雄鳥に物思ひ  
葉の、凍る衾に鳴音はさぞなさなさだに、心も遠き  
夜半の鐘合聞も淋しき一人寝の、枕に響く霰の音も  
若やといつそ堰かねて、落る涙のつらゝより、愁き  
命は惜からね共、懲しき人は罪ふかく、思はぬ合こ  
との悲しさに、捨て憂合棄た浮世の山かづら

○名所 土産 三味 本調子

水無月の、初旅衣きて見れば、此處は住よしあをに  
よし奈良坂越て夕暮の、空も静に、寂滅爲樂と告わ  
たる合これぞ名にあふ大佛の、かねをと洩て高まご  
の、餘處にうき名やたつた山、三輪の山路を裳裾の  
糸の合いと故郷春日野の、社に暫し此手をば、合  
せ鏡の底清く、あれく南に雲の峯、暑き凌ぎの三  
笠山合月のな、瀬の飛鳥川、變るや夢の數添て、名  
所くは都の辰巳、宇治の川面ながむれば合三下り遠  
に白きは岩越す浪か、晒せる布か、雪にさらせる布  
にて有そろ合賤の女がはぎもあらはに合よそね島、  
馴れし手業も玉ぞ散る、浪のうねく白玉ぞ散る、  
手事二段本調子あら面白の景色やな、あらおも白のけし  
きやな、我も家路に立かへり、土産に語らん花の家  
土産に語らん

○都 土 産 三味 本調子

花のあけばの紅葉の夕、相見しことのつもりでは合  
ふちと名づくる大井川合こがれよるべの浪の上合う

八十九

かれくへていつかはと合たのみあらしの山の端に、  
うつろひ安き世の人の 手事初段二上り後段 あだし心を散さ  
じと合かむろが袖にしのばせて、あかぬ契を、千代  
もいとはじ

○御山 獅々 三味 本調子

神路山むかしにかはらぬ杉の枝合かやの御屋根に、  
こしきの玉も合ひかりをしてらすあさひ山合きよきな  
がれのいすゝ川、御裳濯川のほしあみの合宇治のさ  
とぞと見渡せば合ころはやよひの賑はしき合かごに  
さゝたてすゞの音、獅子の舞ぞと、うたひつる山を  
こしたる小田の橋合岩戸の前に神樂を奏し合二上り二  
見の浦の朝景色合岩間によごむもしほぐさ 手事關寺  
の夕景色合のべの螢や美女のあそび、うかれてくむ  
や盃の合三下りはやはとぐちに紅葉の合そめてたのし  
むおい人の合淺間合山ながめもまさる奥のあん合晴  
れ渡りたるふじの白ゆき

○御代の春 三味 本調子

ときわなる合松も榮ゆく御代の春合恵みをうけし糸

竹の合その一節に移り来て合梅が香したふ鶯の、な  
く音もあかぬ千代八千代合かはらでこゝになれてき  
く聲にちとせの齡契らん

○都 十二月(みやこみやげともいふ) 三味 本調子

初春の門松祝ふ注連かざり、表にさらく 新袴、大  
福屋徳右衛門が、年始の御禮はかたじけなし、禮者  
の外はとんくに手鞠や拍子七艸、はやして来るや  
ら春駒なんぞ、鳥追ちよろけん徳助萬歳大黒舞、稻  
荷山の白狐、こんと過たる初午の、賑はふ群集の土  
産もの、布袋いなりに撫牛まんぢう食ひ、鈴やでん  
ふう福助おた福、さつても見ことな、松茸だいて涅  
槃の女夫あい、飾る節供や離祭、お道具數々あれわ  
いきの、よいやさじやく、簾笥長持葛籠に衣桁、  
嫁入り道具はや、産したじ、つひに御誕生お釋迦さ  
ん、花の屋形に産湯の甘茶、花より團子、やんちや  
も過て、こわい男の兜武者、義經辨慶、武内太閤、  
佐々木に朝比奈、巴山うばちやりの旗持合御注進口  
上云ふて、汗拭ひ暑まさりの祇園會、鉢の団子はち

やんちき／＼ち、分て眞はふ夕涼み、かる業も  
のまね見せもの浮瑠理、茶店の繁昌、子供すかしの  
酸醤提燈、祭り七夕明年の／＼、やれなごり惜やの  
おんごくなは、なは、やおんごく、なはよい／＼船  
は出て行く、帆掛け走る、おほ大小だい妙法船岡と  
り一文字、みんな出て見る今宵の月見、丸い小芋を  
塗箸で、ぬるり／＼／＼ぬる／＼／＼と、はや菊月  
や後の月三夜はおして、せめて七夜か、十夜の鉢は  
ぐわん／＼ぐわんぐわらぐわのぐわん、叩きだした  
る戎講、福を賜はれ、遣ろ共／＼、何など遣たい顔  
見世の、座附手打の拍子よく、ちようちきちく、  
ちようちきちく、ちよ／＼ちき／＼、ちようちき  
ち、ちよろ／＼／＼、ちようちきちちよちき／＼、  
ちようちきち、祝ひませうと事始めむかひ三軒両ご  
なり、こちも一所に餅をつこ音、はぼん／＼千石萬  
石かず／＼に三百六十としを経て、厄拂ひませう、  
と年越に、掃除をするやら大三十日、みな禮者の書  
目出度けれ

○新秋の色 三味 本調子

底清く、清きながれの鴨河や、水に寫ろう影すみて  
合月は浮世の外なれや思ひくまなき夜もすがら、ふ  
けて砧の音遠く合雲ゐに渡る雁の、越路忘れて通ふ  
らし、盛りを見る萩が枝や、妻こふ鹿の聲おかく  
して合招く尾花に結ぶ露、深きちぎりの例なるべし  
る奈良人形

○けしの花 三味 本調子

手にとりて見ればうるはしけしの花合しほりしほれ  
ばたゞならぬ合匂ひかうばし花びらの散りにし姿憐  
れよ手事二上りりんきする氣も夏の花合雨にはもろき風  
情あり、たれに氣がねをなんにもいはずちつとして  
まつのあらしを琴の音にして

○四季の壽き 三味 本調子

明け渡る春の山家を見渡せば合花、鶯の色音にも合君はなゝそなゝちよと合軒端の松に鶴の聲合夏しらなみの夕風に手事三下りやがて涼しき月かけに合清くやごして合加茂のをがはの友千鳥合いや千代千代と歌ひまつれり

○新都獅子三味本調子

君にこそ合さかりも見ゆれ、おさまれる合花のみやこによろづ代の合春ふく、よろづよろこびの合つきせぬいろのふかみぐさ合今日も富貴の花と見て、めづる心のやさしさに合たけき姿もにくからじ合戯れ遊ぶ獅子の曲合手事二上りしらべ柔ぐいと竹の、聲はなやかに舞の袖、かざす扇のひまよりも合花のかほばせあてやかに、花のたもともつきじなく、かへすがへすも、いく萬代や經ん

○新玉かづら三味本調子

こひわたる合身はそれならで玉かづら、いかにやつれてつくしがた合思はぬ人のあだごひに合うきもつらさもこもりくの、はつせの神の神垣に、かけしめ

ぐみもありあけの合月の都のしなさだめ合手事もとのかきねは間ひもせて合その夕顔の合ゆかりさへ合二上りたのまれ難き人ごゝろ、身をのみこがす螢こそ合いはぬ思の亂れがみ、とけぬあたりにむすびしも、なか／＼かたき岩田帶合三彈手事中散手事三下りたれかゆかりのいろに出て、さかりも見せじ女郎花合こゝろも知らでをなじ野の、つゆにやつるゝふじばかま、あはれをかけよ、かごとばかりも

○新青柳三味本調子

さればみやこの花ざかり、大宮人の御遊にも秋菊の庭のおも、よもとの木蔭枝たれて合暮にかずある靴の音合柳櫻をこきませて合にしきをかざる、もう人のはなやかなるや、こすのひま、もれ来る風のにはひきて合手事二上り手飼のとらの引づなも、ながきおもひに、ならのはの、そのかしは木も及びなき、こひはよしなしや、これはおひたる柳のいろの、かりきぬのかさおりも合手事三下り風にたゞよふ、あしもとの合たよ／＼としてなよやかに、立まふゝりの、

おもしろや、げにゆめ人をうつゝにぞ見る、げにゆめ人をうつゝにぞ見ん

○しぐれ月 三味 木調子  
神さんの、いつ來月がもどり月、私が心はすめやらぬ、難波の、芦をよそに見て、花の都へ歸りさきとはなの、都へ、かへり咲合眞實せいもんで、名残を惜むまゝ成らぬ身は、浮世かへ

○四季の雪 三味 本調子  
そもそも天の濕ほひに、雨露霜雪の四つを見せ同じく雪月花の、三つの徳を分つにも、雪こそ殊に勝れたれ、先づ春は梅さくら合正月より散までも雪を忘るゝ色はなし、夏は五月雨の合ふる家の軒はあるながら、庭に曇らぬ卯の花の垣根や雪に紛ぶらん。手事三下り夜寒忘れて待月の合山の端白き影みにて殘ん雪かと疑はれ冬野に殘る菊までも、また初雪と面白や、山路の憂きや忘るらん、山路のうきや忘するらん

○新子の日 三味 本調子

今日は子の日の遊びといへば、思ふ友だち皆つれ立て、行や小壇の道々見れば、賤が仕業の暇と見へて此所に羽根撫かしこに手鞠、王やぶり／＼春めき渡る、誰が垣根も床敷見へて垂れ柳のいと青やきて風にたよ／＼なみ寄るかげに、雲雀山雀ひよごり頬じろ、おのがとり／＼調子をわけて聲も長閑に囁るほどに、永き日影も暮かた近し、卒や歸らん我宿へ、合二上り春は越路に歸らん頃を、いつの年より頼やおきて、斯る盛りの花さく頃の、心のごけき都の春を合捨ていくへの波路を分て、行は恨めし飛雁がねの中に少しは都の空に、餘波惜くも有かと見へて十や十一十二や三や、おのが様々群行中に合聲も可愛くおくれて飛ぶに、少時休へ文ことづてん、頓て紅葉の照そふ秋に、聲をほに上げ皆つれ立て、渡れ都の池水に

○舌づみ 三味 本調子

萩の戸へ、立やすらひし、忍ぶ月、さらぬ別れの後暮ふ、通ふ嵐に亂れて解て合尾花か袖も、かりの枕

の通宵合所詮つれなや仇なる事と、思ひ廻して舌鼓しよせんつれなや仇なることゝ、思ひまわして舌つゞみ、由縁と問へばかけのきく

○紅葉づくし 三味 本調子

秋ふくるみやまかへの小夜しぐれ、手染のいとの  
龍田姫、おり出す錦しなくに合その名も高雄小倉  
山、みゆきまたなんあすか川、かはるこゝろは薄紅  
葉、からくれないの立田川、流れてとまるしがらみ  
に合もみの浪路のはるかなる、ちさとのほかの唐錦  
わが敷島の道しるべ合紅葉がさねの名取川、きみ松  
ヶ枝のゆふぐれに、月の影さへ通天のをちこち人の  
みちのくのしぐれ紅葉や、いともみち合二上りよる年  
波の水鏡み、うつろふ色のふたおもて合わすれがた  
みは朝露に合かりの玉章合鳶もみち合まだきさらぎ  
の花よりも、ます紫のひとしほに合酒あたゝめしか  
ら歌の合むかしをしのぶ須磨の浦合青葉の笛の鹿紅  
葉合妻くれなゐや青海波合三下り夜るの錦にふるさと  
の合風のたよりも神無月合數はやしほか九重か合十

二ひとへり裏紅に、薄柿うこんいろくをかぞへ  
くていくしほか、秋の名残を詠むならまし

○夕 空 三味 本調子

筆のさや合たいて脊子待つ、蚊遣火の、うはの空に  
や立登るみづに數かく枕の下は戀ぞつもりて今日の  
瀬に手事身は浮草の合ねいる合まも無きア、儘なら  
ぬこそ、儘ならぬ

○墨繪の月 三味 本調子

露そむる野邊の錦のいろくを、ふみわけゆけば、  
かすかなる、あやしの竹のあみごの外面に、も  
れてうつろふ山の井の水合二上り手にむすべば、月ま  
たやごる合つらさ、野わきに吹きそわれて、墨繪に  
かきし松風の合おとやきぬたをそひ寝のゆめか手事  
三下りなれてながむる人心、なぐさめかねつさらしな  
や、おはすでやまに、てる月を見て

○一ツくずや 三味 本調子

一つくずやに、四季の花、粹な水仙、室咲き  
の梅合いとし可愛いと撫子の合よれつもつれつ糸櫻、

垣根卯のはなかきつはた合からさば歌の女夫なか可  
愛らしいじやないかいな

○墨繪の芦 三味 本調子

あめはれて露にしほるゝ萩桔梗合すゝきをなのる萬  
年の、賤がいほりをいふ人も合なく音はいとゞ鈴む  
しの、さやけき月をいまやとて合松の木かげに心さ  
へ、墨繪の芦をうつさんと、筆をふるへば九重の合  
ニ上り雲の上にぞのぼる月、あれにしまごのやれみす  
を、もりくるかげは白紙の合すみのくま／＼かきつ  
みて吉原雀よしあしを、いふことの葉のつゆまでも  
合手事こまかにてらしわけらるゝ、ひかりもこゝにま  
すかゞみ、みがく心の白玉は合げにあきらけく治ま  
れる、ひじりの御代のしるしなりけり

○關寺 小町 三味 本調子

思ひ出れば懷敷や、人の恨みの積り來て、何時の頃  
より浮れ出合頼むものには竹の杖、ないつわらるつ  
物狂ひと、人はあだし野夢なれや、問ふは恨めし昔  
は小町今は姿も耻かしや、誰はとめねど關寺の庵さ

びしき折々は、都の町にうかれ出で往來の袖にすが  
りつゝ、憂事の數々を見給へや人々合春は梢の花に  
のみ、心をよせて短夜の、ほとゝぎすゆき見草あさ  
澤のかきつばた、菖蒲藻の花かれ／＼に、螢も薄く  
殘る朝の名も廣澤の月の影、かこち顔成我なみだ、  
落葉時雨にぬれ初て、我ながら耻づかし三下り百夜忍  
ぶの通ひ路は合雨の降る夜もふらぬ夜もまして雪霜  
いとひ無く、心づくしに身を碎く、一夜を待たて死  
たりし、深草の少將の、其怨念の附添ひて、かやう  
に物を思ふぞや、耶方へ走り此方へはしり、ざらり  
く、ざらぐさつと、こひ得ぬ時は合恶心また狂  
亂の、心づきて聲かはり、けしからず見ゆれば、寂  
々と關寺の、庵に歸る有様は、山田のあぜの案山子  
よの、あき果たりな我すがた

○ひな鶴

雛鶴が、其枝々に巣をくひて、君もゆたかに、我も  
ゆたかに合すめ一氏とて久堅の、光り長閑き春の日  
に賤心なく花の散るらん合げに散ればこそ／＼いと

櫻は目出度けれ、散らぬにまたぬ春がすみ、誰か  
忍ばん鷺の合谷より出る聲さへて、野の末山のおく  
迄も、同じ惠はあいたけの、齡と久しき松はなほ君  
にひかれて合萬代やへん

○揖枕三味本調子

からろおす水の煙のひとたに合なびきもやらぬ川  
竹の、うきふしげきうきねの泊り船合よる／＼身  
こそ思ひしる、浪かなみだか苦もるつゆか、ぬれに  
ぞぬれし我袖をしぶる思ひをおしつゝみ合ながれわ  
たりにうかれてくらす、心つくしかぢまくら合手事  
二段 さして行衛のとほくとも、ついによるへはきし  
のうへの、松のねかたきちぎりをば、せめてたのま  
んたのむは君に合心ゆるして君が手に合つなぎとめ  
てや千代よろづ代も

○龜遊び三味本調子

前引 久かたのそらものごかに光りそふ、げに九重の  
たみの戸や合さかふるさともあづきゆみ、引つれう  
そふ乙女子が合いさやみきをやす、めん合よるべの

水もいづみ川くめやめぐれやさかづきの手事二上りくす  
りときくのまれ人も、浮世を花にして小舟合みつの  
うらはにさをさして合君が代うたふ千代やちよ、萬  
代やへん龜遊ぶ、かめのお山につるのまひ合たゝ萬  
歳

二上り之部

○那鄙三味二上り

國土安全長久の合榮花もいやましに猶悦びはまさり  
草の菊の盆とりくに、いさや呑ふよ合めくれや盆  
の流れは菊水のりうに引れて疾く過れば手まづきへ  
ぎる菊ごろも、花の秋を翻へしてきするひくも光り  
なれや、盆のかげも廻る空そ久しき合我が宿のわが  
宿の菊の下露けふことに、幾代つもりて淵と成りぬ  
よもつきじ世も盡きじ、薬の水も泉なれや汲めども  
く彌増に出る菊水の、呑めば甘露も斯やらん心も  
はれやかに、飛立ばかり有明の夜晝ともなき樂みは  
榮花にも榮耀にも實に此上や有るべき合三下り何時迄

か榮花の春は常盤なる猶幾ひさし有明の月人男の舞  
なれや雲のはそでを重ねつゝ悦ひの歌をうたふ夜  
もすがら日はまた出で明らかく成て夜かと思へば晝  
に成り晝かと思へば合月またさやけし春は花咲紅葉  
も色濃く夏かと思へば雪も降て四季折々は目の前に  
萬木千草も一日に花さきけり面白やく合猶いつま  
でも生の松榮花の程も盡じつきせじ春夏秋冬ながめ  
は同じ月もゆきも花も紅葉もさかゆる末こそ久しけ  
けれ

○雲にかけ橋 三味 二上り

雲にかけ橋霞に千鳥及びないと惚れまい物か、  
賤が伏家の月を見やよいやな

○磯 千鳥 三味 二上り

うたゝ寝の、枕に響く明の鐘合實に儘ならぬ世の中  
を、何にたとへん飛鳥川合きのふの淵は今日の瀬と  
合ばかりやすきぞ變るなど、契りし事も何鹿に合身  
は浮舟の楫も絶、今はよるべも白波の手事本調子棹の  
雲か涙のあめか濡にぞぬれし濡衣合身にしむ今朝の

浦風にわびつゝや鳴く磯千鳥

○ほゝづき 三味 二上り

秋風に吹かるゝ身ともなりやせん、消もいやらでな  
ま中に、燈籠草の名にしをふ合夕べ／＼に疑がはれ  
言わけの間も空蟬の、一重の衣を脱捨て、破れかぶ  
れの床のうち、せりふの種をくり出しに、いつそ言  
葉も夏紅葉、あからむ顔の薄かはや水も洩さぬ實の  
中を、世の口のはにかゝるも愁や、粹な手に揉まれ  
くて、末はねびきの里ばなれ

○今 小町 三味 二上り

松のくらゐに柳のすがた合御くらの花に梅が香を、  
こめてこかるゝあいきようは月のしづくか萩の合  
ゆのなさけにあこがれて、われもまよふやてふ／＼  
の、戀しなみのいくもゝ夜、かよふ心は深草の合  
少將よりもあさからぬ、淺香のぬまのそこまでも、  
ひく手あまたの花あやめ、たとへむかしのがら人の  
山をぬくてふ合ちからもて合ひくともひかぬふり袖  
は合すいな世界のいま小町三上り手事本調子たかき位の

花なれば、おもふにかひもあらし山、されど岩木に  
あらぬ身の合いきな男の手くだには合いなにもあら  
ぬいな舟の、しづみもやせんこひのふち合あはぬつ  
らさはあしひきの、やまごりの尾のながき日をうら  
みかこちて人しれず合こよひあふ瀬の新枕合つもる  
思ひのかたいこも解てうれしき春の夢

○紅の文 三味 二上り

宵の間は、後に逢ふせをしほ寵の、煙りつい立きり  
が谷合さすきかづきの八重ひごへ、知らせののへの  
紅の文、心ごび立ひざくらも、ア、儘ならぬ憂きつ  
ごめ

○鳥邊山 三味 二上り

一人来て二人つれ立つ極樂の清水寺の鐘の聲はや初  
夜もすぎ四ツも告げ九ツ心の闇路をば照らすや否や  
稻妻の光しあこの暗きこそ合我ら二人の身の上よ 合  
今はなま中ながらへて、だてをしたら憂き身に愛想  
もこそも合盡た浮世やいざ鳥邊野の合露と消んご最  
期の用意、女はだには白無垢や、上に紫藤の紋、中

着緋さやに、黒縪子の帶、年は十七はつ花の合雨に  
しほるゝ立すがた、男も肌は白小袖にて、黒き縪子  
に色あさき裏、二十一期の色さかりをば、戀ごいふ  
字に身を捨小舟合何處へ取つく島とても無し合鳥邊  
の山は其方ぞと、死に行く身のうしろがみ合彈く三  
味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ  
騒ぎあり合あの面白さを見る時は、染ごの其方とそ  
れがしが、去年の初秋たなばたの、座敷踊りをかこ  
付て、忍び逢ふた事思ひ出す合羽織かづいて茶屋ぞ  
めき、ふたせの玉に見付られ、迷惑するを見るごき  
は、其方に私が無理いふて、口説した事思ひ出す 合  
祇園林の群がらす、かあい合かあいの聲きけば、父  
母の事思ひ出す、涙に道のはかさへ行かぬ思ふまい  
とは思ひはすれど、此所ぞ浮世の別れの辻よ、早ふ  
ござれと手に手をとりて合行けご歩めご目に見るご  
とに、今を始の終りより合追人の者や來らんにさあ  
く 最期急がんと合鳥邊野の露ときへて行く、見る  
に二人がせき來るなみだ、じつと押へて是お染ごの

思ひきらしやれもう泣しやんな、私は泣ねごそれこなさんの、いゝや其方の、いや此方のと、顔と面とを見あはせて一同にわつと歎くにぞ一足づゝに消て行くついに、此野のはなふる雪や、折からにはや寺々の鐘も撞やみ、夜はしらぐと、鳥邊山にそ着にける

○梅の月三味二上り

うたがひの合雲なき空や、如月の合其夕かけの、折つる袖も合くれなる匂ふ梅の花がさ合ありとや此處にうぐひすの、鳴音をり知る羽風にばらり合ほろりと降は涙か花か手事本綱子花を散すは嵐のとがよ、いやあだし野の鐘の聲

○鞆猿三味二上り横づち合

扱も目出度の秋津洲や、目出度のく秋津洲や、黃金升にて米はかる米はかる、四角ばしら角桂、角のないこそ添ひよけれく、ひんだの踊りは面白や面白や合夜さの泊りは何處が泊りぞなばかさこしか室か明石か、室が泊りじや、松の葉越に月みれば、葉

越にく月見れば、暫し曇りて又さゆるく、ひんだの踊りは面白や合いとし殿御が見ゆるやら、犬がほえ候四辻にく、伽羅の薰りときだんとは、幾夜とめても止め飽ぬく、ひんだの踊りはおもしろやいもの一がのこ

○鹿子づくし三味二上り

色を染出す、かのこの模様、京はなんでもくよいひは鹿子、雲の海、伊達を駿河のふじかのこ、よいかのく、よいく鹿子の小袖、胸高に着なして思ひそめ鹿子、淺黄かのこに、紅かのこ、たまりませんとな、腰をほとく、ほとくと打出しがのこ人が名たて、つい結がのこ、お江戸むらさき鹿子はいもの一がのこ

○梅が枝三味二上り

憂かりし身の、昔をさんげに語り申さん、去にても我ながら、よしなき戀路に犯されて、永く悪しゆにたうけるよ、さればにや、女ごゝろの亂れがみ、ゆひがい無も懲ごるもの、夫の紀念をいたゞき、此狩

衣を着しつゝ、常に打し此太鼓のねもせずおきもせず涙、しきたへの枕上に殘る執心をはらしつゝ、佛しよに到るべし、嬉しの今の教へや合三下り思ひ出たる一念の、起るは病ふとなりつゝ、つがさるは是くすりなりと、護心の教へなれば思はじく戀忘れぐさも住吉の、岸にあふてふ花なれば手折やせまじ我こゝろ、契り淺きぬの片おもひ、執心の助け給へや實に面白や同くば、さんげの舞をかなで、あいじやくの心を捨てたまへ、いざやくさらば安執のくもりを拂ふ夜の、月もなかばなり、夜半樂をかなでん心も共にすみよしの、松の隙より眺むれば波もてゆれる淡路渦、沖もしづかにあを海の、青海波のなみがへし、かへすや袖のをりを得て、軒端の梅に鶯の來鳴や花の越天樂、うたへや謡へ梅ヶ枝、梅ヶ枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かばいかにせん花に宿る鶯合二上り面白や鶯のくの、聲に誘引せられては花の影に來りたり、我も御法にひき誘はれて、く今日の前に立舞ふ舞の袖是こそ女の男をこぶる、さうふ

れんの樂のつゝみ、うつ、なの我ありさまやな合思へば古へをく、語るは猶も執心ぞと、申せば月も入り、音樂の音は松風に類へて在りし姿は明くれに、面影ばかりや殘るらんく

○道づれ三味二上り

何處へじやゑ、私は丹波の筆山へ合私も連て行かしやんせ、女の道づれいらぬ者はて胴よくな和尚さんそんなら來いと手を引て、梅田づみを眞直に合行ば程なく丹波なる、さゝ山にこそ着にけり

○竹生島

去程に合是はまた勿体なくも竹生島、辨財天の御由來、佛法最初の御寺なり合本尊何かと尋ねるに合せうめん童子のかのに申合聖德太子の御建立合三水四石で七不思議、龜井の水のそこ清く千代に八千代にさざれ石合巖となれや八幡山合八幡に八幡大ぼさつ合山田に矢橋の渡し守合漕ゆく船から眺むれば合女浪男浪のたへまよりゆん手に高き志賀の寺合馬手は合陸路でかたを演合沖を遙かに見渡せば背聖のほめ

給ふ餘國に稀なる竹生島合孝安天皇の御代の時合頃  
は三月十五日合しかも其夜は土との合みを待辰の  
一天に、二又竹を相添へて、八聲の鶏と諸ともに合  
是竹生しまとは讀すなり合辨財天は女体なれど合十  
五童子の其つかさ、巖に御腰を休らへて、琵琶を彈  
じておはします

## ○千歳草三味二上り

うら若し稚あそびの餘念なき、はづんで手鞠の、數  
は一二三四ういつも變らぬ常盤木合猶くれ竹千代を  
かさねて民も豊に、なびく草木も四季をりくの合  
春を迎へて開く梅が香、君が爲とて摘む若菜のいろ  
もとりぐみつば四ツ葉と年を重ねて祝ふ七草神を  
いきめの鈴菜すゞしろ、芹なづな合蝶は菜種の花に  
あそびて董士筆たけて杉菜や夏は涼しき池水に菖蒲  
さつきと、楳扇かざして頓てあふひと澤瀉合菊に姫  
百合顔にもみぢの照そふ秋に合山も錦も今日あらた

## ○千代の友三味二上り

めし、松に八千代も祝ふだいぐたから山ぐさ橘、  
かうじくて、軒のひらき鬼もじぎして、福は内へ  
ご祝ひ納むる御代萬歳盡せぬ宿こそ目出度けれ

## ○散紅葉三味二上り

霜柱折れてはかなき朝はの、日陰の紅葉散ぢりに其  
色ごても山鳥の尾の流れもきなる泉川合嬉し泉や捨  
小舟こゝろ淋敷秋さへ有るに、そらみがち成る此冬  
のゆふさる、野や心あらば合高野の奥のしば鳴鳥の  
聲ふき残せ山おろし

## ○若葉三味二上り

年は未だ合何日も合立ぬ筈竹の合今朝合そよさらの  
春風を我知顔に鶯の合百喜びの合音を立て、合唄ひ  
連れだち少女子が摘や千歳の合初若葉手本若葉摘手

の優美さに梅が枝に囁る百千鳥の聲添へば色さへ合  
ねさへ目出度き

○新玉 三味 二上り

壽きを合幾千代かけて祝ひまひらす新玉づきの合筆  
にあゆみの面煩きまばゆき日影長閑なる吾が君が代  
ぞ目出度き

○おはつ三味 二上り

戀なかは墨と硯のふた思ひ、筆の命毛こよひが限り  
我は此世に捨られて、夏の梅田のはかない事は責て  
一日夫婦といふて、明し暮して寝たよはも無し明日  
は我身のよし悪を、のせてうたふか面にくの、十八  
チ、それ、私は十九の厄の年、思ひあふたる、縁は  
つたなき朝顔の、うちしほれ、こゝぞ浮世の別れの  
辻よ、早ふござれと手をとりて、見るに悲しやせき  
くる涙、じつと押へて是のふやいの、思ひ切らしや  
れもう泣しやんな私は泣ねごいやこなさんの、いゝ  
や其方の、いやこなさんの、顔とくを見合せて  
一同にわつこ歎くにぞ、涙のつゆの玉の緒も絶なば

たひよ二人ゆく道

○一ツ夜着 三味 二上り

櫛いれぬ、秋の柳の枕さへはづれ次第の假寢は、誰  
に、すねてと人の問ふ迄、ほに出る合其稻舟の最上  
川、堰にせかるゝ、したよりも合今宵までとの只一  
つ、思ひ遣りなき男氣のかみかけてとは仇なみの碎  
け過たる二人が中も、恨みられたり恨みたり後は互  
ひに云ふことも、何の斯のなき一ツ夜着

○懲の旅路 三味 二上り

風ささふ、初ねの床の情より、そゝろに迷ふ心もふ  
かく、約束の、日をばくるわの輪のうちに、双ぶ矢  
筈の紋ごころ、縫てふ鳥の翼もほしき、いつそ斯ふ  
かご言ぐさに、露のたまくさ繁々の、便りもいと、  
懷敷ふ思ひまゐらせ候べくとの、しめしは仇に煎  
じ茶の、かはらぬいろと千代こめし、松にかゝれる  
鳶の紋、忍びて出る谷のとへ、解おびの縁や夢の世  
の契り

○言葉 じち 三味 二上り

江戸むらさきの小むらさき合可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>さめぐる盃<sup>さかづき</sup>の合<sup>あ</sup>若<sup>わ</sup>  
々しくも葉<sup>は</sup>がくれに心<sup>こころ</sup>がすゝく風呂浴衣<sup>ゆかた</sup>合<sup>あ</sup>算木崩<sup>さんぎくらぶ</sup>  
の羽識<sup>はしのひ</sup>をも合<sup>あ</sup>露<sup>あつ</sup>にぬれなす隠<sup>かく</sup>し藝<sup>げい</sup>、やツの太鼓<sup>たい</sup>の合<sup>あ</sup>  
やつの太鼓<sup>たい</sup>の言葉<sup>ことば</sup>じち

○夕<sup>ゆふ</sup>べの雨<sup>あめ</sup> 三味 二上り

見たい逢<sup>まつ</sup>ひたい、かくともすぐる、身<sup>み</sup>ぞ愁<sup>うら</sup>や合<sup>あ</sup>いつ  
そ絶<sup>たま</sup>なば絶<sup>たま</sup>よかし合<sup>あ</sup>三筋<sup>さん</sup>の糸<sup>いと</sup>に合<sup>あ</sup>せめては憂<sup>う</sup>きを忘<sup>わ</sup>  
れやせんと、暫<sup>しば</sup>し向<sup>むか</sup>へば忘れはやらで、松風ならぬ  
面影<sup>おもかげ</sup>かよふ、兎角<sup>とくかく</sup>懸路<sup>けいろ</sup>は、夕<sup>ゆふ</sup>べの雨<sup>あめ</sup>の、晴間<sup>はれま</sup>知<sup>し</sup>  
ぬ我<sup>われ</sup>おもひ

○新道成寺 三味 二上り

花<sup>はな</sup>の外<sup>ほか</sup>には合<sup>あ</sup>松<sup>まつ</sup>ばかり合<sup>あ</sup>暮<sup>くろ</sup>初<sup>はじ</sup>て鐘<sup>かね</sup>や、響<sup>ひび</sup>くらん暮<sup>くろ</sup>初<sup>はじ</sup>  
めて鐘<sup>かね</sup>や響<sup>ひび</sup>くらん合<sup>あ</sup>鐘<sup>かね</sup>に恨<sup>うら</sup>みが數々御座<sup>ござ</sup>る、先初夜<sup>さき</sup>  
の鐘<sup>かね</sup>を撞<sup>たた</sup>ときは、諸行<sup>しよぎょう</sup>むじやうと響<sup>ひび</sup>くなり、後夜<sup>ごよ</sup>の  
鐘<sup>かね</sup>を撞<sup>たた</sup>ときは、せじやう合<sup>あ</sup>滅法<sup>めつぽう</sup>とひゞくなり、晨鐘<sup>しん</sup>  
の響<sup>ひび</sup>きには合<sup>あ</sup>生滅<sup>じゆめつ</sup>、入相<sup>いりあい</sup>は、寂滅<sup>じやくめつ</sup>、爲樂<sup>めら</sup>ご響<sup>ひび</sup>けども  
我<sup>われ</sup>ごしやうの雲<sup>くも</sup>はれて、眞如<sup>しんに</sup>の月<sup>つき</sup>をながめ明<sup>あ</sup>さん 合<sup>あ</sup>  
道成卿<sup>だいじょう</sup>は承<sup>うけ</sup>り合<sup>あ</sup>初<sup>はじ</sup>て伽藍<sup>からん</sup>たちばなの合<sup>あ</sup>道<sup>みち</sup>なりこうき

やうの寺<sup>てら</sup>なればとて道成寺<sup>だいじょう</sup>とは、名づけたり合<sup>あ</sup>山寺<sup>さん</sup>  
の春<sup>はる</sup>の夕暮<sup>ゆふぐれ</sup>來て見れば合<sup>あ</sup>入相<sup>いりあい</sup>の鐘<sup>かね</sup>に花<sup>はな</sup>や散<sup>ちる</sup>らん、入<sup>い</sup>  
相<sup>い</sup>の鐘<sup>かね</sup>に花<sup>はな</sup>やちるらん合<sup>あ</sup>さる程<sup>ほど</sup>に／＼寺々<sup>てら</sup>の鐘<sup>かね</sup>、月<sup>つき</sup>  
落鶴<sup>おちづる</sup>ないて霜<sup>さく</sup>ゆき天<sup>あま</sup>に、みちしは程<sup>ほど</sup>なく日高<sup>ひだか</sup>の寺<sup>てら</sup>  
こうそんの漁火<sup>よか</sup>憂<sup>う</sup>ひにたいして人々<sup>ひとびと</sup>眠<sup>ね</sup>ればよき隙<sup>ま</sup>ぞ  
とて立<sup>た</sup>まふ様<sup>よう</sup>に覗<sup>の</sup>ひ寄<sup>よ</sup>てつかんと爲<sup>あ</sup>しが思<sup>おも</sup>へば此鐘<sup>この</sup>  
うらめしやとて、龍頭<sup>りゆうとう</sup>に手<sup>て</sup>をかけ飛<sup>と</sup>そと見<sup>み</sup>にしが引<sup>ひ</sup>  
かづいでぞ失<sup>う</sup>にける

○島<sup>しま</sup> 臺<sup>だい</sup> 三味 二上り

初春<sup>はつはる</sup>の祝<sup>いわく</sup>にうたふ高砂<sup>たかさご</sup>の合<sup>あ</sup>尾<sup>お</sup>上の松<sup>まつ</sup>の下<sup>した</sup>かけに落葉<sup>おちば</sup>  
かくなる慰<sup>なぐさ</sup>とうば合<sup>あ</sup>千歳<sup>せんざい</sup>の鶴<sup>つる</sup>も羽<sup>は</sup>をのして合<sup>あ</sup>龜<sup>かめ</sup>のあ  
そびも、きは一つ合<sup>あ</sup>笑<sup>わら</sup>ふかごには福<sup>ふく</sup>の神<sup>かみ</sup>やがて富<sup>とみ</sup>  
貴<sup>じ</sup>自在<sup>じざい</sup>になるならば、松竹梅<sup>まつたけばい</sup>じやないかいな

○松<sup>まつ</sup> 竹<sup>たけ</sup> 梅<sup>ばい</sup>(十二曲の内) 三味 二上り

立<sup>た</sup>わたる、霞<sup>かすみ</sup>を空<sup>そら</sup>のしるべにて、長閑<sup>なが</sup>き光<sup>ひかり</sup>新玉<sup>しんぎょく</sup>の  
合<sup>あ</sup>春<sup>はる</sup>たつ今朝<sup>いまさ</sup>は足曳<sup>あしづ</sup>の、山路<sup>さんじゆ</sup>をわけて大伴<sup>おほぶ</sup>の合<sup>あ</sup>津<sup>つ</sup>  
に來<sup>く</sup>鳴<sup>な</sup>うぐひすの合<sup>あ</sup>南<sup>みなみ</sup>より笑<sup>わら</sup>ひ初<sup>はじ</sup>む、薰<sup>かは</sup>りにひかれ  
聲<sup>こゑ</sup>のうらゝか合<sup>あ</sup>羽風<sup>はふう</sup>に散<sup>ちる</sup>や花<sup>はな</sup>の色香<sup>いろか</sup>も猶<sup>ま</sup>し榮<sup>さか</sup>有<sup>ある</sup>此里<sup>このさと</sup>

の、難波は梅の名所二上り 合本調子君が代の濁らで絶む  
御溝水、末澄けらし國民も、實に豊なる四の海 合千  
歳限れる常盤木も、今世のみなに引れては、幾世か  
ぎりも嵐ふく、音合枝も榮ゆる若みどり生立松に巣  
をくふ鶴の、久敷御代を祝ひ舞ふ 手事三段二上り 秋は猶  
夕間暮、外面は虫の聲々に合かけて幾よの秋に鳴く  
音を吹おくるあらしにつれてそよぐは窓のむら竹

○新され盡し 三味 二上り

春立て實に長閑にも住吉の岸の小松を根引せん合 東  
の山に出る日の影曇らじ白極の合 かみの内の雲雀花  
に蝶紋あらしは辭よ合 虞と下すや伊豫すだれ花のく  
も山吹からに合 散やちりく花きりん 合三下り いつか  
扇の夏げしき合 しば山くは山はたけ山望む高の峰  
たかき麓に流れ細川の妹があと問ふ常夏の花の撫子  
しも妻と合本調子 夕露拂ひつむ袖の木下蔭に宿りして  
夏を忘れて秋風の合 其望月の影照らす鐘の響きは興  
福寺、紅葉の錦黄昏の、みやこ告る入相は先ぜんり

う寺南禪寺、數も限らぬ高臺寺、なに正ばう寺祥雲  
寺合 千たい佛を誓ひにて、嘘じやおじやらぬはんぐ  
わん寺、雪の下にもきにならば一夜は明せあさ倉の  
鳥のたすきや三雲や狩場に急ぐ丈夫が合 鎌倉風の袴  
こし、大友菱のだて模様合 劍さきしやんと差袖は、  
糸や蜀金朱座にしき釣石だ、みいろくと盡ぬ榮ひ  
は長樂寺かわらぬ色や常盤なる、さたけ松もと千代  
八千代

○沖の船 三味 二上り

恨みわび、千さね袖とは今ぞ知る、君は繫がぬ沖の  
船、風の誘へばよる身じや者を、我は磯邊の海人こ  
とも船よ合 あまごも船よと叫べとも、愁ひ浮世の  
山おろし、餘處の浦わへ吹て寄る、ひるとも分て忘  
られぬ、なじまぬ先がましゞやいな

○菜の葉 三味 二上り

可愛と言ことは誰が始めん、外の座敷もうはの空  
合もと様参ると示す心のあとなさは合 上々様のちは  
文も別にかはらぬ様参る 合 思ひまはせば勿体なうて

合 言葉さげたら思ふこと菜の葉に留れ蝶の朝

○すり鉢 三味 二上り

海山越て此の世に住なれて、比翼連理と契りし中も  
煙りを立る賤女が心こころに逢ぬ日も逢ふ日も夜  
は一人寝の合暮を惜みて松山かづら、晝のみくらす  
里もがな

○花 紅葉 三味 二上り

花も紅葉も散しほが有るこの、迎もちるなら風にま  
かせて散れがしな、雨にしほれて、枝に朽なば色も  
なや、鳥のふみして猶愁や、露も匂ひもさつくりご  
したがよいわいな合

○花盜人 三味 二上り

手まくらに、夢をむすぶや居すまひの、隙をうかが  
ふ花のかげ、そよ吹く風も身のけ立、こゝろの鬼が  
只ひごつ、御はし間近く忍びよる、聞じこすれご鈴  
の聲合今もむかしの色かへぬ、其一枝をうばひ得て  
木々のさかりを知る風情

○春の雁 三味 二上り

昔たれ、粹といふ字を書初て、流れの里に夜となく  
晝ともわかぬ醉こゝろ合雪の朝も月見る夜半も合三  
味、三筋の上調子、人のそしりも空ふく風の、何の  
儘よの手枕に、結ぶ榮花のあだ夢を合け節覺す夜明  
の鐘の聲、つくづく見ればみそらにも、花を見捨て  
故郷へ、後を濁さず歸る雁

○花ごゝろ 三味 二上り

たのまれぬ物とは云へど我こゝろ合實に浮雲のあり  
し世に、誘はれなれし花鳥を合餘處にもせまじ合身  
にもせじ、只きそはぬを加茂川の、水くさい氣とつ  
められて合由縁の色は見いながら、肌に耻かし老の  
浪

○春の假名 三味 二上り

花のまぎれに假初の合いろは匂へこちりぬるを、浮  
名もらすな夕がすみ、わがよたれそつねならん、心  
のしをり露ふかき合うのおく山けふこにて合迷ふ  
習ひの思ひ寝にあさき夢みしゑひもせず合京九重に  
とへ百重、千代も萬代もつきせじ

## ○扇盡し三味二上り

花の色はうつりにけりな徒に、是見よかしと殿中で  
互ひに濡し袖扇合顔はひ扇柏扇、名も岩本の御社に  
合くぜつ扇の貴冷扇、なか四座扇八重一重、千代の  
舞鶴うつし繪や合扇の數はつきせねど、いつか開けば、皆春なれや萬代の、猶あんせんぞ目出度けれ  
ば、皆春なれや萬代の、猶あんせんぞ目出度けれ

## ○萬歳獅々(八千代獅子に合)三味二上り

君が代の、久しうかるべき例には合かねてぞ植し住吉  
の手事松の二葉は、あやかり物よ、青葉は増て落葉  
さへ、妹脊かはらぬ契りとは合嬉しかろふて有るま  
いか合手事松の齡ひを重ねかさぬる、松のよはひを、  
重ねかさぬる

## ○松の壽三味二上り

千歳経る松のことぶき縁りなる合苔はむす共色かへ  
ぬ合操すぐ成若竹や雪の重みは未知らず合知らぬ筑  
紫へ行く梅も昔うまれば難波津に合冬籠りして咲う  
ちに鶯の來て春を告げ手事花の鏡となる水に龜ぞ浮  
びて君が代を合久しかれとぞ祈り舞ふ鶴も群れゐて

## 遊ぶなり

## ○儘のかは三味二上り

合夢が浮世か浮世がゆめか合夢てふ里に住ながら合  
人目は懸と思ひ河、嘘も情も只口さきで合一夜流れ  
の妹脊の川も合其水くさき心から手事餘處の薰りも  
衿そで口に付て通は、何のまあ、可愛くの鳥の聲  
に、覺てくやしきア、儘のかは

## ○松の二葉三味二上り

松の二葉はあやかり者よ合青葉は増て落葉さへ合妹  
脊かはらぬ契とは、嬉からうで有まいか合暮の時雨  
は床しき者よ合あふ夜は、まして一人寝を合忍びぐ  
るまの契りとは、嬉からうで有まいか

## ○袖の露三味二上り

白糸の絶し契りを人問はん拂愁に秋の夜ぞ長きあだ  
に問ひ来る月は恨めし、月は恨めし合明方の枕に誘  
ふ松虫の合音も合絶じくにいと猶合荻吹く風の  
音信もきくやと待て佗しさの、涙の露の置て思ひ、  
ふしてまろ寝の袖にかわかん

## ○袖 香 爐 三味 二上り

春の夜の暗はあやなし其れかとよ、かやは隠る、梅の花合散れご薰りは猶のこる、袂に伽羅の煙りぐさきつく惜めご其かひも、なきたまごろも、ほんにまあ合柳は縁り紅ゐの、花を見捨て歸る雁

## ○井 筒 三味 二上り

筒井づゝ合井筒の水は濁らねど、かはせし人は朧月入る方もなき我思ひ、只變らじと一すじに合寝ても覚てもいとしさの、餘りて洩て憎ふ成る、墨と硯はこひ中なれど、人が水さしや薄く成る、其一念の付そひて、蔭にたゞみあゝ合ひなたにおほひくるくくるくと、苦敷胸のほむらの火の、わき来る水に消ませで合放ちは遣らじと取つけば霞にへだつ後ましや合少しは夫ぞと思ひしらずや思ひ知れ、足元はよろ／＼よろ／＼と、よはり果たる釣瓶のしづく落てかたちは無かりけり

## ○なでしこ 三味 二上り

柄顔の咲と其まゝ隙行駒の合乗りもゆるしか紫の、

雲のそなたはなつかしや女郎花なら落やさんすまひ私は元より撫子の共に榮を祈りし人は合そらに咲ても花物云はぬいとし根じめの虫所、聞ひませぬと神さんの、脊中叩いて夜もすがら

## ○雪 景 色 三味 二上り

雪景色合おもしろの四方の山邊も白妙に合見渡す空の薄がすみ、雲と見しは、白雪の／＼拂へご拂へご降つむ合花と見紛ふ梢にも幽艶や、何れも白妙に合なかめ／＼て雪や氷りも見ながらに、袖をかさして立寄れば合それは木々の花、切くべて樂まん酒にいさや、遊ぶべき、先冬季より咲初る、窓の梅の北面は、雪ほうじて寒きにも異木より先だてば先梅を伐や初むべき合梅はさま／＼有る中にさ早咲き梅のわつさりと、／＼、色よし品よし信濃梅、思ひこがれて書く玉章を、便り求めてやり梅や、那方へとんと、をり梅、この枝がさわらば御免なれ、ふり振て／＼、ふつて／＼、合振ふつた袖振の誰が袖の香の匂ひ梅、初音床しき鶯の羽風につれてふは

と亂れ亂れく亂るゝ垂れ梅合しなと拍子をかぞへ  
くて夫それ、くくく、其處らでしめろ任せ  
てをけろの、とんと、とんと、くはづんで鞠梅、  
ひいふう三四五六なゝやあの、音はくしとん  
くくしとんくくくと、丁度百ついた  
面白や合數々の盃は、ここごここへ廻つたてうに  
てうじててうくら、ちよろくめきのてう四郎、は  
なしよしのてう太郎すうわんばうにわにふだう、早  
々たて、遊んだ合さんくさんくざ、濱松の音は  
幾千代、御夜は萬年

## ○八重霞三味二上り

面彈 八重がすみ合立隔つれご合きつゝ鳴く、聲は、  
まがはね春の鶯合花に名殘は惜けれご合かへろやれ  
夕暮

## ○夕顔三味二上り

住は誰、問ひてや見んと黄昏に、寄る車の音づれも  
絶て床しき中垣の、隙間もとめて垣間見や合かさず  
扇に焚しめて、空薰物にほのくと、主は白露光り

## ○七草三味二上り

皇の吾代もつきじ石川や合蟬の小川の絶々と、思へ  
ば思へば音すめる合すゝなすゝしろ神さびて雲の上  
にもはこべらや、結びし水も隔ても浪の佛の座よ、  
手事 天地五ぎやう和らきて光りのごけきちり分ぬ  
なづな芹摘賤の女も、もらさで祝ふ千代八千代

## ○五大力三味二上り

一筆かきそむるは、懷敷さのま、合日々に思ひ参ら  
せ候べくと別より程はあらず候へど、思ひ寝にする  
一人寝の、我は心も目もあはず合たばこ戀草にんと  
成る合去し御見にうつりのみ、暮し候、折からの暑  
や寒やの起臥に、風なごひかせ給ふなよ、さまをひ  
かへて身の養生、是第一にたのみいる合よしなし草  
のよしやよしなま中まみに物思ふ、たとひせかれて  
程降るととも合縁と時節の末を待つ、何とせう合互  
ひの心打とけて上べは解ぬ五大力、さは去ながらか

はる、色なき御風情やがて逢をそへ語ろぞへ惜き筆  
とめ候し。

○新七草 三味 二上り

たうとの鳥とエ日本の鳥とエわたらぬさきに七草は  
やしてナ、君をいさめの合君を祝ひて、若菜摘

○腰づけ 三味 二上り

天の戸の、明るや鶏の聲たかく合景色にぎはふ里の  
春合我も少し人眞似の、團子も時の席まじり、一ツ  
くれよと云ふお客様を合我方人と有難く、半分にても  
言の葉の、逢ふせ三つの深みどり、濃も薄きも取交  
て合千世の榮にを頼もしく合日本一と名づけ申さん

○一ツ橋 三味 二上り

何事もよふ、知て居てあて言を、無理じやなけれど  
又しても憎さも、憎し、いつそに、今朝は去すまい  
とは思へども合有し不首尾も外からも我身の科も云  
ひ立るこちの、心はほんにくつきり急げば、廻る辛  
氣、心の果しなや夫も厭はず、今こそ斯うよ、末は  
添ふもの身の一二期のふ身のいち期、渡り初ては斯浮

世にも心だよりの一ツ橋

○高尾山 三味 二上り

名にしおふその名や四方に高雄山、げに秋ふかき  
ろくの木々のこづゑもこくうすく、色つけそめて  
なまめきしあだし心にあゝ山中の妻こふ鹿に泣たて  
られてすこしははぢの初紅葉身にしむあさのきりぶ  
すま、かづきたればねみだれがみの、とけしなさ  
けの薄紅葉、思ひそめたる深谷のそこの、そこのこ  
ころは人知れず、かいて見んにもかみなし月よ合三下り  
ふたたび花の咲き匂ふさくらもみぢのちりやすき世  
にまつは時雨のそめかねて、つたの紅葉を干とせの  
いろと枝にいく秋ちきるらん、みわたせば峰もふも  
とも皆そめなして錦をかけし山の夕ばへ

○放下僧 三味 二上り

おもしろの、花の都や、筆に書とも盡せじ、東には  
祇園きよ水、落くる瀧の、音羽のあらしに地主の櫻  
は散ぢり、西は法輪さがの御寺、まはらば廻れ合水  
ぐるまの輪のじせんせきの川浪、川やなぎは水にも

まるゝ垂れ柳は風にもまるゝ、ふくら雀は、竹にも  
まるゝみやこの牛は車にもまるゝ茶臼は挽木にも  
まるゝ實にまこと忘れたりとよこきりこは、放下に  
もまるゝこきりこの合二ツの竹の合世々を重ねて打  
納りたる御代ぞ目出たき

○松 畫し 三味 二上り

うたひ囃せや大黒、一本めには池の松、二本めには  
庭の松、三本めには下り松、四本めには志賀の松、  
五本めには五葉の松、六ツ昔は高砂の、尾上の松に  
曾根の松、七本めには姫小松、八本めには濱の松、  
九ツ小松を植ならべ十ヶで豊久野伊勢の松、此松は  
有情の松、情ありまの松が枝に、口説ばなびく相生  
の松、又いつ毎の約束の、日をまつ時まつ暮をまつ  
連理の松に契りをこめて目出度な若戎

○たはぶれ 三味 二上り

春は只昨日も今日も定めなく、老も若きもたはぶる  
ゝ、高根の雪と見る花に、心を移すやるせなきア、  
辛氣合言の葉ぐさも縁となり、手に手をむすぶ誰が

袖の、其移り香に誘はれて、月も臘にふみ迷ふ、花  
の面影夢かとも、そこはかと無く暮て行春の別れや  
憎からん

○根引の松 三味 二上り

前引 神かぜや伊勢の神樂のまねびしてをぎには有ら  
ぬ笛だけの合音も催馬樂に吹き合をさめばや 手事三下り  
難波津のく芦原や昇る朝日のもとに住むたみのゝ  
鶴の聲々を合琴のしらべに聞なして 合手事本調子 軒端に  
通ふ春風もふきやめうがの合めてたさを野守が宿の  
門松は老たるまゝに若みどり世もうらゝかに成にけ  
り手事二上り そもそもく松のとく若に萬歳はやす君が代は  
合蓬が島もよそならず秋津洲てふ國のゆたけさ  
神の年越末ながれとなゝの社の七草をはやしそや

○正 月 三味 二上り

軒毎に、色を飾るや三ツの朝、すげなき松も笑顔と  
見ひて合風に袖ふる麻詞、可愛しさと花の顔、問  
ふて見たいは八重霞合思ひを包む曙に心のなぞを掛  
て見る來ぬには一人おもひ寝の憧るゝ胸の福沸し合  
神の年越末ながれとなゝの社の七草をはやしそや

され唐とりの渡らぬ合さきに暫しが程も合たつた一  
言のちにと云ふて別るゝ宵戎君が約束たがへすに合  
参りましたと後から、脊中たゞいて戯れも酒のきげ  
んの千代よろづ世の、限りも戀もうち解て、猶おく  
ふかく契りける

○萬歳 三味 二上り

徳若に御萬歳と、御代も榮まします、愛敬有ける新  
玉の年立返る朝より水も若やぎ木芽もさき榮けるは  
誠に目出度さふらひける合京の司は關白殿おり位の  
帝、日本内裏王は十ぜん神は九ぜん、よろづやす  
浦安が此許に正月二日寅の一天に生ます若戎、  
商ひ神と祝はれたまふ商ひ繁昌と、守らせ給ふは誠  
に目出度さふらひける合やしよめく京の町のやし  
よめ賣たる物は何々、大鯛小だい鯉の大魚、あはび  
蠣螺、蛤こく蛤くはまぐりめさいなと、賣たる  
者はやしよめ、其所を打過そばの店見たれば、金襴  
純子絢紗綾ひぢりめん合繡子絢紗子、縞じゆす繡珍  
いろく結構に飾り立てさふらひしが合町々の小娘。

や、お年のよつたる姥達まで賣かふ有様は實にも治  
の御代なり時なり惠方の御藏にすつしりく合寶を  
納むる門には門松脊門には脊門松そつちもこつちも  
幾年の御祝と御代ぞ目出度き

○神樂 初(十二曲の内) 三味 二上り

千早ふる神代のはじめ、素蓋男の、あらき心を憎ま  
せて、天てる神の御いかり岩戸に隠れませば、  
とこ闇の夜と成にけり合萬の神の歎かせつ岩戸の前  
に集りて神樂を奏したてまつる是ぞ神樂の始めなる  
手事とき天照大神宮すこし打笑たまひつ、三下り岩  
戸を開きましませば人の面しろぐと見ゆる心の嬉  
しさは面白きとは申なり

○泊り船 三味 二上り

笛の隙間にもる日影、便りなき身の便りに成れば合  
人の詞の力草合結ぶひたちの紐とけて、愚痴なせり  
ふは戀の花、さかりも今日か明日のよに、情あづけ  
る心の憎き、云ふて恨みを泣あかす千鳥の聲も我そ  
ても波を枕に泊りふね

## ○屠蘇酒 三味 二上り

いく春の、豊なる代や注連かざり、君まづ顔も若や  
きて、屠蘇のさゝへに幾千代を合汲かはしたる相生  
のなにかは竹のうきふしをごぐの春こそ樂けれ

## ○鳥 追(かぐらの手に合ふ) 三味 二上り

君が住あたりの草にやごしても合見せばや袖に餘る  
白露合晚稻の田をも刈り穂に色づく秋の群鳥をおふ  
の浦船こぎつれて、あれ／＼見よや、よその船にも  
手事打鼓うつ、鼓しごろに聲立て、日を暮し夜を明  
し、思ひ亂るゝ我こゝろ合そらに鳴子のむら雀稻葉  
の雲と立去りて、行衛も知らぬ身の程を合哀れとさ  
へも云ふ人の涙の數そへて、賤き業を忍び寢に、笙  
とつゝみの聲諸共に、おひつ追はれつ幾度か鳥追ひ  
舟の浮しづみ

## ○葛の葉 三味 二上り

辛氣晴しに紛らす酒も、思ひ深きに醉もせず、いつ  
そ恨みてものう醉もせず、思ひふかきに醉もせず、  
いつそ恨みても來ぬは何ぞや只あけの鐘あだし枕に

月は落つ、いつそ恨みても月はおつあだし枕は月に  
落つ、いつそうらみても、風はごうぞや只秋の風ち  
らぬものなら葛の葉の、いつそうらみてものふ葛の  
葉

## ○秋の扇(十二曲の内) 三味 二上り

盡ならぬ、浮世の義理ぞ恨なる、粧ひあつき我扇、  
月よ花よとあこがれて、最も涼しき君が手を放れも  
やらで縁しにも、愁や嵐の時しも秋風に吹分られて  
枯がれなれど過し扇にのころ文そら嵐がなき成らば  
いつも變らぬ袖の移り香

## ○火桶 三味 二上り

浮名たつ、事の耻かし夜る毎に、肌とはだとを温め  
て、思ひの盡に撫さすられて合寝覺の伽は吸付たば  
こ、愛想も一寸くせつ言、煙管で叩くかんしやくに  
思ひ寄るべの文の數、肌身放さぬ年月を、うつれば  
變る飛鳥がは、花に寝とられ合夏はまた時鳥めに見  
かへられ、つる秋風と餘處にふく、雪が粹だけ仲人  
して、逢せてくれる嬉しさを、昔がたりの張火桶

## ○狹むしろ 三味 二上り

去年の秋ちりし梢は紅葉して合今將みねに在明の月  
日ばかりをかぞへても合待にかひなき村時雨合時し  
も分す降からに色もあせつゝ早晚に我袖のみや變る  
らん合<sub>三下り</sub>中<sub>二上り</sub>鳴音を添へてきりくす夜半の枕に告  
渡る合嵐の末の鐘の聲合結ばぬ夢もさめやらで只忍  
ばるゝ昔なりけり

## ○梅 月 三味 二上り

梅が香をいつしか風にさそはれて散にし跡や我ひと  
り只ぼうぜんと眺めやる合空にさへぎる浮雲の月  
をいだきし憎らしい

## ○花の香 三味 二上り

ながかれと、何おもひけん世の中の憂きを見するは  
命なり、思へば夢の世を、知らでかひなくすむ月の  
合うつゝの闇に見る花の臘おぼろと見も分ぬ合明て  
散なん暮てちりなん散ればぞ花の、色も香も合何れ  
はかなき合春の風合ふかぬ其間の一盛り、惜や暫し  
の花のゑん合餘波を雲に吹とちよ合とめて甲斐なき

花の香を袖につゝめご小笠のあられ合こぼれやすさ

よ我涙、俱になきつれ歸る雁合よそに見てしな思ひ  
こそやれ、なごか心のなかるらん

## ○新縁の綱 三味 二上り

春はいろ、笠にふらるゝ雪よりも難面人の冷さを六  
ツの、歌仙も詠わびて、箭竹心に戀すてふ合かざす  
や金のかんざしのさす手引船磯邊もよせず合沖にゆ  
らく由良の戸のおつと取かぢ合點じやゑいかア、  
ようそろのんこ帆を卷たての船歌は丸に三ツ引懸風  
や、君にあふぎの替紋は、色のつかさを求めん手くだ  
だ、中を隔てるませの菊咲しも憎や、夕照に顔は紅  
葉の戀のおに合丹波大江の山よりち勝る思ひや八雲  
立出雲やへ垣つまごめは何處へ結ばん縁の綱

## ○四季の眺 三味 二上り

梅の匂ひに柳もなびく春風に、桃の彌生に花見て戻  
るゆらくと夕霞春の野がけに芹蓬合摘かけたる面  
白き合里の卯の花田の面早苗、色見えて繁る若葉の  
陰訪ひ行かはまだき合初音の山時鳥、一聲に合花の

名残も忘られて家土産に語ばや手事三下り草は色づき野菊も咲て、秋深き野邊の朝風露身にしみて、ちらりくと村時雨よしや濡共紅葉ばの染かけたる面白さ合野邊の通路人目も冬枯て合落葉時雨る、木枯の風峯の炭がま烟も寒し降雪に野路も山路も白妙に見渡したる面白さ

○名護屋帶 三味 二上り  
逢ふて立名がたつ名の内か、逢はで焦れて立名こそ實たつ名の内なれや、思ふ中にも隔のふすま有にかひなき捨小舟合思や世界の男の心、私はしら浪うつなき、秋の寝覺の其睦言を、思ひ出す程いとしさの、そつと身もよもあられう者が合締てなごやの二重帶が三重まわる、深山うぐひす鳴音に細る合我は君ゆゑ焦れて細る、ア、浮世、昔忍ぶの戀ごろも

○かづき面 三味 二上り

まよひ行、時もたがへず丑みつの、秋風さむく身にしむも、嫉妬の念のはれやらず、夜なくごとに恐ろしき、姿かはれば心も變り、人はそれ共いざしら

衣合鬼女の面をかくし持、庭のたまりの泉水に、寫す姿は我身からぞつと身の毛もたちまちに合ほにあらはるゝ糸すゝき、木々のしげみを傳ひ行く合積る恨みの數々を、いつか晴さん今宵の内に、思ひ知らさん思ひしれ合逢ひみし時は我れならで、枕は外にかはさじと、云ひしも今は仇なみの、水に寫ろふ月小夜が、馴染はるか遅さきの菊の實生の種まき残す三月四月は袖でもかくす合最早七月あらはれ月よ薬祈念ても下るまひかな、うらめしや合此世を去らば我一人、思ひおもはれ思ひのかづら、亂れ髪ばらりばらり、ばらく本おそはれ恐るゝ小ぐるまの、めぐる因果はくろり、くるく、苦敷此身合かづきし面は其儘に、生れついたる二ツの角、おのれと動く計りにて、我身もあきれて是はいかに、取にとられず、ぬけ共はなれぬ執着の、いごう爲ることを漫ましき

○夏の妻 三味 二上り

木下闇の手枕に一年ぶりの中なをり合身は任せても

物いはぬ合もたれ掛れば弱竹の、節もこめたる憂き思ひ心が問は、何とせふ

○繪そらごと 三味 二上り

かりの世に、かしに行身の苦をぬけて、人だち多き春野のに、忍ぶ顔なる何時までも、かはらぬ色は常盤木の合枝にたとへて誓ひしことも合閨の扇の繪そらごとかや思ひの増はいな合扇のねやの閨のあふぎの繪空ごとかや思ひのますわいな合ほんにかはれば又川竹の、沈む心をひき立る、酒は、うき身の忘れぐさ

○あいの山 三味 二上り

もとは浮氣でいそめ川の、深ふ成ほご、逢はれはせいて、越にこされぬ人目の鬪よ寒の、師走も日の六月も、愁ひ勤めに日を暮しやるが顔にはそりが可愛や見ゆる、思や二人が生ながらへて、居るも不思議の内なるが、久しうりにてあいの山、逢に來たさに三ツつきの合棹は契りのたがやさん、今はひとつに添はれもせぬが何のかみ駒のばち當り、三は切れ

ても一世の縁、一期離れぬ心ぞや、嬉しうござんす

る合、こちの正たい無が辻で禿をくごくとき連だちに見付られて笠もかむつて逃ふがの合戀が商賣なれば憎むさとでは無けれど、さきんざんに間夫がついて浮名立るが迷惑、通ふまひそや、あつくわん曲輪の馴染はな、只我身の仇の花衣、來ては袂の雨やきめとりぼうし

○ひとりぼうし 三味 二上り

なつかしき、そのふの宮のちまたより合我名慕ふて千早振合神の昔に心をしめて待てば月日のたつか弓会いるこしかたを尋ねて問て、文でかゝせて筆の鞘合手事たきて待夜は心をしめて、しめて待夜の蚊遣火さへも合いぶせく立て只ならぬ、辛苦辛氣の身はひとりぼうし

○留守の思ひ 三味 二上り

風吹けば、沖津白浪たつた山、夜半には君の一人たれて月日を小車のいつしか春に大堰川岸の櫻の影寫り、花に棹さす筏士の行末はれて相生の待とし聞かば今歸り來ん

○佐用姫 三味 二上り

友慕ふ千鳥鳴なり領布りし磯山おろし吹おちて漕ぎ  
放れ行くとも船の合唐や日本と隔てゝも元の港の心  
さへ變る事なき縁あらば中には荒き波風もよしや厭  
はじ糸竹の合節有ればこそ大ぬさの引く手數多も有  
るものを暫し逢はねば我胸の合むね走ひに憧れつゝ  
松浦の山のあとの汐風

○三段きぬた(十二曲の内) 三味 二上り

糸による、物ならなくに我もちの、心細くも合おも  
ほゆる哉 合本調子ものとは無しに別れ路の合山もあら  
はに木の葉ぶり残る松さへ峰に淋しき 手事五段 ものと  
はなしに冬ぞ來て 合山もあらはに木の葉ぶり、殘る  
松さへく峰にさびしき

○里の暁 三味 二上り

梓弓いる方ゆかし夕月の合にはへる春も橘の合夏來  
にけらしな鳥羽玉の合闇をも照らす螢火の合其の影  
さへも陽炎の合立まされたる思ひ寢のなき魂かへす  
合手事 唐の其故事の忍ばれて合そら焚ならぬ煙の末も

合妙に薰りし雲の端のいつち行くらん短夜のそら

○臍の述懐 三味 二上り

夫人の五牀の中の穴の數、九穴と言て此臍は仲間へ  
入らず人一代無役で暮すのみならず、帶や一布で締  
つけられて日の目拜まぬ其上に雷といふ奴が我を取  
んと時折に鳴りつをごしつ光りおる、外の穴衆の樂  
み聞に春は花見に夏螢秋は月見に冬雪見とて四季折  
おりに樂みめさる合鼻は紅梅蘭麝の香ほり味い物に  
はかき鼻めさる、口は三度の食事の外に酒よ肴よ煙  
艸に茶菓子合耳は音曲琴三味線よ三下り合本調子 そんな  
樂み思ひはないが、皆な穴衆が一つ宛夜毎日毎に樂  
みめさるを、傍に居ながら見る事ならず、何の因果  
で仲間へ入らぬ、窪い所へ垢のみたまる、あな耻か  
じやあな憎や有るに甲斐なき臍の穴

○初 烏 三味 二上り

氣晴ては風あらたなるやなき髪櫛けづりこやかつや  
まなんご合其詩は昔く合鬼も二八の縁の髪に解る  
ひさがしら合こけてふとても縁と袖そでと縁との増

鏡鑑も洗ひ落いてすいとなん合黒きものは黒きぞよ  
けれ初からす

○女郎花 三味 二上り

行水の一夜泊の薄氷、解ての後は偽りと噂もよしや  
三芳野の、花も雲ぞと云ひし虚言合其のむくひは誰  
がきるじやへ、軒から白眼鬼瓦露の涙をこぼすのは  
名のみ残りし女郎花

○きりくす 三味 二上り

世の中に生とし生ける物ごとに、妬み争ふこと成に  
此くさむらの蟋蟀、只陸敷交るは、何哉故の有やら  
ん子あり孫あり數々の、其樂の陸敷さ見るに彌増我  
君の合我々如の宮仕へゆるされ給ふしるしにやたね  
く多き壽の、代々の榮ぞ頼もしき合此蟋蟀の陸敷  
妬み争なきごとく、只打ち解し君のおすがた

○寶 船 三味 二上り

春の初めの磯を漕ぐ、御船は寶を積來ぬと、世のう  
さも無く、迎ふる春の豊けさに合儘ならぬ身も糸遊  
の、心に解て合西も東もおさとをぎ、春をうかめて

難波江の芦間長閑に吹きわくる、風に任せて淀堤合  
のぼることじに引れてぞ、加茂川さして九重の合都  
の春につながるゝ、深き契りもかるぞと、朧の月  
の影忍ぶ船の寶を此里へ合三下りあげて岸根に寄る浪  
の盡せぬ數は何時迄も人の情と積かへて、明す一夜  
は永かれと、あかね枕に千代の春合こめて幾夜の契  
り頬まん、ア、籠て幾夜の契り頬まん

三下り之部

○花の旅 三味 三下り

春風に、なびく姿や淺みざり、好た仕うちに誘はれ  
て、思ひ立名の出口のやなき合都をすぎて此所かし  
こ、八町三所かきちらす、一風かはる大津繪の、七  
ツ道具のむさし坊、かたい石塲の間より、ぬるりぬ  
るりと勢田うなぎ、長い旅路をふみ分けて、草津の  
里の姥が餅合つくぐ杖の下くぐる目川の水の忍ふ  
戀、なんば石部のお前でも、心たがはす其手くだ座  
敷さはきをかこつけて、踊子汁は水口に、味ひ首尾

じやと登りあふ、阪はてる／＼鈴鹿と合の 合本調子  
ひの土山、雨にしつぱりと、大竹小竹さかの下心の  
たけは盡されぬ、筆捨やまの其中を合關にせかる、  
桜本の、娘ごゝろの一筋に、津の町とほる阿彌陀が  
さ、人目かまはぬ旅の空、雲出の川を高からげまた  
の泊りを松坂と合黄楊の柳田もとほり過ぎ、かみの  
油の口上手、煙草入うる小林やおちもをばたも買ふ  
て行く、數は積るにかぎりなき、神の恵みの山田へ  
○はで浴衣 三味 三下り

通ふかみ浮名のたゝぬ文月に合百夜の松のひかりさ  
へ、さす盃のかげ寫る笛の、音色のはなばなし、十  
郎さんや待かねん、虎が戀路のまくらより、放れま  
いぞと戯れに、頬む佛の顔よりも、思ふ男のはで浴  
衣

○信夫山 三味 三下り

冬木立、深き哀れは知らるゝものを、昨日の露は今  
日の霜夜の合ねられぬ儘に思ふはいろ／＼合心の奥  
のしのぶ山

○石橋 三味 三下り

我も迷ふやさまぐに、四季をり／＼の戯れに、蝶  
よ胡蝶よせめて暫しは手にとまれ合見かへれば、花  
のこかけに見えつ隠れつ羽を休め、姿やさしき夏木  
立、心つくしのナ此年月をへ、いつか思ひの晴るや  
と、心一つにあきらめて、よしや世の中合短夜に、  
夢はあやなし其移り香を、憎て手折か主なき花を、  
なんのさら、さら／＼さら／＼さらに、さらに戀はくせ者 合  
露しのゝめの、草葉になびく青柳の、いと幽艶く、  
二ツの獅々の身を撫て、頭うなだれ耳をふせ、花に  
宿かる、浮世のあらし、那方へ誘ひ此方へよりつ園  
の胡蝶にたはぶれ遊ぶ、己が友よぶ獅々のこま合花  
に寄るてふ連だちて、追ひ回り下りつ、上りつ、そ  
ばへ揚羽のしほらしや、おひ回り下りつ上りつ、そ  
ばへ揚羽の幽艶や面白や合時しも今は牡丹の花の咲  
や亂れて散は／＼散來るは、散るはちるは散來るは  
散れ／＼ちりかゝる様で、おいとしうて寝られぬ、  
花見て戻ろ、花には憂さも打忘れ合人日忍べは合恨

はせまい爲に沈みし戀の淵合心からなる身の憂を、  
やんれそれはく工、誠 やつらや花に胡蝶のまつ  
れて合心からなる身の憂をやんれ其はくそれは工  
誠憂や愁や花に胡蝶の來つれてつれて、くせもの  
くよるべくや浪の立名も儘よ、口説ご君は難面  
さよチ、其れくじや實にさ思ひ廻せば昔なり合牡丹  
丹に戯れ獅々の曲、げに石橋のありさまは、笙歌の  
花降り蕭笛金笙候、夕日の雲に聞ゆべし、目前の奇  
特あらたなり合暫く待せたまへや、影向の時節も、  
今幾程によも過じ合獅々とら殿の舞樂のみぎん合獅  
々虎でんの舞がくのみぎん、牡丹の花ぶき匂ひみち  
く、大きんりきんの獅々頭、打てや囃せや牡丹ば  
う、紅金の端あらはれて、花にたはぶれ枝に臥轉び  
實にも上なき獅々王の勢ひ、なびかぬ草木もなき時  
なれや、萬歳千秋と舞納め、萬ざい千しうと舞をさ  
め獅々の座にこそ直りけれ

## ○すゑのよるべ 三味 三下り

すゑのよるべは、いざ白なみの、をきにたゞよふ捨

小舟、かいなやつらや吹流されて、すいた泊りをま  
ならぬ、いやな嵐を、ひらきてうけて合ほの字顔  
するうきつとめ、あたしんきなと口ぐせに合いうて  
なぐさむ心の底も、ふかひあさひのわけこそかわれ  
ごふでこひちの、みをつくし、あくくいく思ふま  
い

## ○越後獅子 三味 三下り

越路がた、御國名物さまぐ成れご田舎なまりのか  
た言交り、しら兎なる言の葉に合面しろがらしそな  
事猶、ゑい浦の海人の子が、七ツか八ツ目鰐迄、績  
や綱亭の綱手とは合戀の心もこめ山の、當坂うわ氣  
で黄連も、なに糸魚川いと魚の合もつれもつるゝく  
さ浦の、油うるしと混交て、末まつ山のしろ布の縮  
みは肌の何處やらが、見透く國の風流を、うつし  
太鼓や笛の音も、ひいて唄ふや獅々の曲合むかい小  
山のしちく竹、枝節そろへて、きりを細かに十七が  
室のこぐちに晝寝して、花のこゝろを夢に見て候、  
手事ゆめの占かた越後の獅々は、牡丹は持ねご富貴

は己が姿にきがせ舞納む、すがたに咲せまひをさむ

○き・す 三味 三下り

雉子鳴く野邊の若草摘捨られて、餘所の嫁菜といつか扱焦れこがるゝ苦界のふねよ、寄るべ定めぬ身はかげろふの、吾妻が顔も見わされて現ないぞや、是のふ男あれ、虫さへも番ひ放れぬ揚羽の蝶合あれく迎も二人づれ、好た同士のなかくに合春にも育つ花きそふ、菜種の蝶は花しらず、てふは菜たねの味知らず知らずしられぬ中なれば、うかれまい者さりとては合其方が世話に容ふりも合我身の末のはなれ駒ながき夜すがら引しめて合むかしがたりの飛

鳥川

○鳶 紅葉 三味 三下り

雲が云ふ月は隈なきものとは知れど仇と情と浮世のぎりと合三すちに分る清水のいとし可愛の行合はしなこそ變れ涙の雨に濡がきります證を見せて合三下り引手あまたと鼠なき外はてらした鳶もみぢ

○肌知らず 三味 三下り

餘所で解く帶とは知らずて居る、心盡しと白糸の結し縁も名計にまだ解初ぬ合雪の梅、匂ひを包む袖香爐わが振そでも末留て合咲てみだれて散ころまでも、契り盡せぬ中なれど合思ふ計りに娘氣の他男のあだなる氣とも、戀に妬みの憤氣の角も合をりにふれてはつれくや伊勢物がたり、宇治姫のおごのみ誘ぶ春風に合つれて芽出しの心さへ知らん菜種に群ゐる蝶の合羽根もいろく色糸ぬひの伊達を重ねしつ紋合やがて二人が對ひ鶴、つるのまる寝のよすがら迎も鐘を恨みつ物かわと鶏も合憎まぬ長枕ほんに男の肌知らず

○園の秋 三味 三下り

太夫すは、皆かしに行て露ばかり、跡にかるかや桔梗やの、其庭もせも秋くれば合ときに尾花や女郎花廓げしきと打つれて合しやんと小襷をとりかぶと、おのがより風より添ひて、咲亂れたる萩すき手事其手にからむ顔朝の合東雲がたの朝風、空も匂ふか

秋の七草

百五十二

○吉

野 三味 三下り

吉野の山を、雪かと見れば雪では有らでん、ヤア、  
これの、花の吹雪よの、ヤア、是の合立田の川を、  
錦かうと見れば錦ではあらでん、ヤア、是の、紅葉  
しがらみのん、ヤア、これの

○道中 双六 三味 三下り

筆のさや焚て待夜の蚊遣より、香のすがりは簪のさ  
んきも捨て車座に合廻り始る双六は、五十三次手の  
内に、投だす賽の目くばしに合壁にまじく大津繪  
の、ふり出すやり手先ばらい、座敷踊りの中入に合  
仲居が運ぶ重箱は、嫗が餅かと口ぐちに合坂はてる  
くすぐすぐかの茶屋に、花の一もと忘れて來たが  
あこでや、あとで咲やらそれ開くやら、よいやな、  
あヨひの土山雨と見て、曇るさしひを迎ひ駕合人目  
の關の門立の、赤前だれの夕でりに、おじやれおじ  
やれの手を引て、をつこ泊りの床とれば、眠る旅路  
のなみ枕合七里ものらぬ引船に、つなで悲しむ憂き

おもひ合一間にこもる琴の音の、岡さき、く女郎  
衆が、はし女郎衆、一夜妻から吾妻路に合夜もあか  
坂のきぬくに合かさす扇のうら道を合見附こす程  
おそろしき、音に聞ひし大井川、岸の柳の寝みだれ  
て、こゝは島田の逗留かいな、さればいな合つもる  
情の雪の日に、富士に雲助ぶらくと合かうしの外  
の轉び寝に、夢にはみしま合箱根やま登り下りの懸  
丹頂の鶴は、庭上に舞をかなで、齡ひを捧る、君が  
御代合盡じ盡せじよむ共つきじ眞砂のかず一つ二ツ  
三津の濱四ツの海、波靜にて豊におさまる御代ぞ目  
出たき

○丹頂の鶴 三味 三下り

數々のさかづきに千代萬代とかさねくして廻らする  
てうしも取どり糸竹の、聲も賑はふ嫗々の松の風、  
丹頂の鶴は、庭上に舞をかなで、齡ひを捧る、君が  
御代合盡じ盡せじよむ共つきじ眞砂のかず一つ二ツ  
三津の濱四ツの海、波靜にて豊におさまる御代ぞ目  
出たき

○一 人 寝 三味 三下り

色見へて、移り香おしき世の中に、人目忍ぶの戀の

やま、思ひも憂しや去とては一人寝られぬ床のうち  
燈し火消て我すがた、見ぬ寝覚の夜もすがらいつ  
そ明なば明よかし

○鄙の袖三味三下り

雲井にまがう海の面、誰が波立て逢ふ事も、淀みが  
ちなる世の憂さを合我は人目にせかれては、磯の千  
鳥となき明し合なんの儘よと苦界もやめて、うき寝  
數そふ時鳥あふ夜短しあはぬ夜長し、心からとは思  
へども、辛氣／＼ゑ、あはぬ夜長し心からとは思  
思へ共、辛氣／＼ゑ、干にほされぬ鄙の袖

○東山三味三下り

圓團きてねたる姿は、ふるめかし、起きて春めく知  
恩院、其樓門の夕暮に、すいたお方に逢ひもせて、  
すかぬ客衆に呼びこまれ、山寺の入合告ぐる鐘の聲  
諸行無情はまのかは、わしはむせうに上りつめ、  
花の頂きございて見やう、花はうつろふものなれど  
葉こそ惜しけれ、惜しけれ葉こそ、縁りのめだち色  
ふかみ草

○東まご三味三下り

逢ふ時は、語りつくすご思へども數々のころ言の茎は  
を、思はでつらき、鐘のこゑ／＼聞ゆなる、夫のみ  
成かくだけの、まだきに鳴て夜も明ば、きつにはめ  
なとかこちつゝ合三下りあふさきるさの物おもひ兎角  
逢ふせの涙川、袖の棚みせき留ん猶も思はまさり草  
葉末に置る露の身がもうき命は知らねども又色々と  
云かわす、言葉の中に後朝の別れを急ぐ東まご明け  
てくやしき玉手箱

○黒髪三味三下り

黒髪のむすぼれたる思ひをば合とけて寝る夜の枕こ  
そ獨り寝る夜は仇枕合袖はかたしくつまじやと云ふ  
て合愚痴な女子の心と知らずしんと更たる鐘の聲合  
夕べの夢の今朝見て、ゆかし懷敷やるせなや積ると  
知らで積る白雪

○あやぎぬ三味三下り

うぐひすも都の春にあいたけと、きは淀川へのばり  
舟合さゝへられたる北風に、身はまゝ成らぬ丸太ぶ

ね合岸のやなぎに引とめられて、歩み習はぬ陸路を  
も、上りつ戻り幾たびか、一夜をあかす八軒家合さ  
こねを起す綱じまの、告る鳥か寒山寺、つきぬ話の  
たねとなりけん

○水 駒 桦 三味 三下り

春雨に名のみぞ殘る梅の花、柳に鶴の替ここば興有  
る聲のいろくに、藻鹽草さく人の癖、見せに來た  
やら南や西に、すいと憧る、柴小舟、ひくや三筋に  
流るゝあせは、乾く間もなき水駒さほ

○水 鏡 三味 三下り

ひとめも知らぬ男なら、恨みも戀も有まいものを、  
なませ近江の水かみ、寫して見れば水底は、かた  
い堅田の石山にきつうのせたに、私やのせられて、  
思ひ過しは我からさきの、一つまへ帶しごけない振  
よ合假令あはづと三井寺のかねては思ひいる崎の合  
矢橋の風ひらの雪のくれ合實なれども徒ら髪の、い  
ふに云はれぬ世の中の、人のうはさも七十五日、浮  
名きのごくの山ほご、きす、はてそうじやわへはて

そうじやわへ、末はひとつ本の水

○三津山 三味 三下り

足引の合大和の國三津山の昔をかたるよも 合本櫻子  
にしへに櫻のはや、かしは手きんなりと云ふ人有け  
る、其ころ耳なしの里に桂子と合申す女あり、また  
畝火の里に櫻子といへる遊女ありしが合かの柏手の  
きん成に、契りをこめて玉櫛筈合ふたみちかける掛  
るさ、いと淺からぬ思ひづま、月の夜あめの夜半と  
ても、心をそめて通ふかみ合住家も二つの里なれば  
月と花よと争ひしに合かの櫻子になびきてぞ耳なし  
の里へは來ざりける二上り其とき桂子うらみ佗、扱は  
我身もかはる世の、夢もしばしの櫻子に心をよせて  
此方をば、忘れ忍ぶの軒の草合はや枯がれに成める  
は、元よりもたのまれぬ合二みち成れば、此まに  
住果べしと思ひきや合只何事も時にしたがふ世のな  
らひ合殊更春のころ成れば、盛りなる櫻子に、移る  
人をば恨むまじ三下り我は花なき桂子の我身を知れば  
春ながら、秋にならんも理りや合さる程に合起もせ

す寝もせず夜半をあかしては合春のもの迎ながめふ  
る夕暮に立出て合入相もつくぐと南は香久山や西  
は畝火の山に咲く櫻子の里見れば、更によそ目も花  
やかに本園子うらやましふぞ思ほゆる合あら恐ろし、  
山風や我は畝火の里に住む、櫻子といふ者なるが、  
かやうに物に狂ふぞや合因果の花につき慕ふ、嵐を  
除てたび給へ合光りちる月のかつらも花ぞかし、元  
より時ある春の花、咲はひが言なきものを、花もの  
言はずと聞つるに合なご言の葉を聞すらん、春いく  
ばくの身にし有て、かけ唇を動すなり合扱花は散り  
ても又もや咲ん、春は年々、頃は彌生の雲こなれ櫻  
子、雲こなれ櫻子、花は根に歸るねたし後妻を合打  
ちらし打散らすうて共去らぬは煩惱の大櫻、花に臥  
て泣叫ぶ合なみや亂る、花心合有明櫻光りそふ、月  
の桂子一ツよに合二道かかる三津の山、爭ひ立や春  
霞天の香久山うねび山たなびき初めてみなし山合春  
の夜みちてほのぐくご合東雲の空と成にけり

## ○やばらしい

わりて見よ、花の在家はやまさとの合櫻は散ぞ目出  
度けれ合只何事も仇なみの、立もたぬも日の影の  
流れて早き河霞

## ○和歌の縁 三味 三下り

新枕、かわす契は幾夜まで結ぶ縁に解く下紐を、締  
て寝る夜ぞあかし合ふ言の葉つきぬ常盤木の春を  
待得し初みごり合まつが浦わへ漕くる船の、縁につ  
ながる纜に合ひかる、道は敷しまの心みがん玉津  
島、ひかり合のごけき何時までも變らぬなかの御注  
連繩

## ○かねが岬 三味 三下り

鐘に怨みが數々ござる、初夜の鐘と撞こきは、諸行  
無常とひくなり、後夜のかねを撞ときは、せツし  
やう滅法と響くなり、晨鐘のひきは、生滅めつる  
入相の寂滅ゐらくと響くなり、聞いておごろく人もな  
し合我もごしやうの雲晴て合眞如の月を詠め明さん  
ニヨリ云はず語らぬ我こゝろ合亂れし髪もみだるゝも  
難面は只うつり氣なごうでも、男は悪性もの、櫻さ

くらと唄はれて合言て秋のわけ一ツ勤さへ只うか  
 くと、どうでも女子は悪性もの、あづま育ちはは  
 すばな者じやへ合戀のわけ里、武士も道具をふせ編  
 笠で、張と意氣地の吉原、花みやこは歌で和らぐ敷  
 島はらに、勤する身は誰もふしみの黒染、煩惱ばだ  
 いの撞木町よりなには四筋に通ひきつちに禿だちか  
 ら室の早ざき、それがほんに色じや一二三いよ、夜  
 露雪の日しもの關路も、ともに此身を馴染かさねて  
 中は丸山たゞ丸かれと、思ひ初たが縁じやへ合梅と  
 さんく櫻は、いづれ兄やら弟やら合わけて云はれ  
 めナ花のいろ、菖蒲かきつばたは、何れ姉やら妹や  
 らわきては云はれぬ花の色へ、西も東もみんな見に  
 來た花の顔さよへ合可愛らしきの花むすめ合戀の手  
 ならひつい見習ひて合誰に見しよとて紅鉄漿つきよ  
 ぞ、みんな主への心中立、おゝ嬉おゝうれし合末は  
 斯じやになそふ成までは、とんと云はずに濟そゝへ  
 話紙さへ偽りか嘘か誠か、どうも成らぬ程あひに來  
 た合ふつゝり惜氣せまいぞと嗜んで見ても情なや、

女子には何がなる合殿御々の氣が知れぬく、惡  
 しよなく氣がしれぬ恨みくしてかこち草露を含み  
 し櫻花さわらば落ん風情なり合面白の四季の眺や、  
 三國一の富士の山雪かと見れば花の吹雪が吉野の山  
 散りくるく嵐山合朝日山くを見渡せば歌の中山  
 石山の合末の松山いつか大江山、生野の道は遠けれ  
 ご懸路に通ふ淺間山、一夜の情、有馬山合いなせの  
 言葉合あすか木曾山待乳山、わかみかみ山いのりき  
 た山いなり合山縁を結びし妹脊山、二人が中の黄金  
 山花咲くゑいこのく姨捨山、峰の松風音羽山入相  
 の鐘つくば山、東叡山の合月の顔ばせ三笠山合頼め  
 氏神さまが合可愛がらしやんす合出雲の神さんご約  
 束有れど、つい新枕さとに戀すれば浮世じやへ合深  
 い中じやと云ひ立てこちやくくよい首尾で合よ  
 い首尾で憎てらしい程可愛らし合吉野初瀬の花紅葉  
 合いつも色よくな合さき初て紅をさすが合品よしあ  
 ったすきのの字の賤が業、しほらしいや田長鳴く臯  
 月五月兩さをとめく田植唄、早乙女く田植唄、

裾や袂を濡した、さつき花の姿の亂れ髪、わたい不思儀や此の鐘の、不思議や此鐘の我一念の心のきづな胸のほむらは明王の火炎の黒煙を立たる如にて、思へば此鐘恨めしや逆龍頭に手をかけ飛ぞ見えしが引かづいてぞ失にけり

○あをば三味三下り

是は情の仕業やな合さのみ人にな愁かりぞ、悲しみの合涙眼にさへぎりて合西も東も白波の合よる邊定めぬうたかたの、いつそ泡ごも消もせて、幢れこがる、合身のゆくへ合青葉々々と合呼へごも濱の合はまの松風音は合かり合松かせ濱の合はまの松合かせ音ば合がり、そよご計りの便りかなと、うらみ歎くぞあはれなる

○海士三味三下り

かくて海底に飛入れば、空も一つに雲の波、煙りの浪を凌ぎつゝ、海まんくと分け入りて、直下と見れば、底もなく、邊り知らぬ海底に、そも神變はいざ知らず取得ん事はふじやうなり、斯て龍宮に到り

て、宮中を見れば、其高さ三十丈の玉塔に、彼玉をこめ置き、香花をそなへ守護神は、龍なみ居たり其外惡魚わにの口のがれがしや我いのちさすが恩愛ふる郷の方ぞ、戀しき、又おもひ切て手をあはせ、南無や志渡寺の觀音さつたの、力をあはせてたび給へ迎、大悲の利劍を額にあて、龍宮城へ飛いれば、合手事左右へばつとぞ退いたりける、其隙に寶珠をぬすんで逃んこすれば合守護神おつかく、かねてたくみし事なれば、乳の下をかき切り玉をおしこめ、剣を捨てぞ伏たりける、龍宮のならひとて死人を忌ばあたりに近づく惡龍なし、約束の繩を動かせば、人々悦び引あぐれば、玉はしらず海士人は海上に浮び出たり

○あづさ三味三下り

三ツの車にのりの道、夕顔の宿の破れ車あら、耻かしや我ずがた、梓の弓のうらほづに、現れ出し面かげの、昔忘れぬ取なりを、あれあれを見や、蝶は菜種に、なたねは蝶のつがひ放れぬ妹背の中を見るに

妬まし、又うらやまし、我は磯邊の友なし千鳥、わ  
くらはに合問ふは嬉しや去とては、問はれて今は耻  
かしの、もりて浮名のだつか弓さいた、白羽の矢は  
だて姿、人の目につく徒ら髪の、なんぼいはれし中  
なれご合今は秋田の落し水五月合雨ほど合こひ忍ば  
れてサヨへなをく盡ぬ恨みぞや、俱に奈落の苦し  
み見せんと、那方へひけば、此方へ引く、行ては歸  
りかへりては、あら餘波惜や合戀はくせ者いろく  
の合花や紅葉に移り氣の、男はいやよさり迎は、ほ  
んに辛苦も厭はぬ悪性合その心は水くさい、流れ  
の私が辛抱を、思ふて見さんせ、あに胸愁な合いや  
とよ夫はそら言よ、袖の時雨は誠の血汐、染し誓も  
偽りならず、二人かわせし契も今は仇と成行妬の程  
を思ひ知らずや思ひ知れご鐵杖ふり上げてうてう  
く合手事打やうつゝの手にも取れず露が螢かちら  
くちら合此手柏子にて結ひし水も筈の葉に又立ち  
寄るを幣をつ取て、きんせい東方合南方ほつぱう西  
方おのく守のめうぶの神佛合ましませい怨靈いづ  
けにけり。

○うち盤三味三下り

北時雨、小原の里にき、なれし梟の鳥の宵だくみ合  
早すりおけと世話やきし合糊つけ物のせわしさも合  
今日のひよりを樂みに合おもひ身をさへ苦にせぬを  
曾手事あふ度ごとに荒けなく百度千たび續けうち叩ひ  
てくたゝかれて合あた嬉しいは槌の音  
契合りたがふな

## ○硯の海三味三下り

幾千代と、ちぎりあふ夜は鳥の音を、うらみし事も  
いつしかに、けふわかれ行く袖の露めるゝたもとは  
清瀧の合糸くりかへすをだまきに合しるしの筆の合  
後留めて合その玉章はうす墨の、ときわかきわにく  
れないの、むらさき山にはいまとふゑにし合ゆかり  
はのこれども合もし秋風や吹きぬかと合心はもじの  
せきぢなる合硯の海に打向ひ、ちさとをかけてかり  
がねの、たよりを松のことのはや、かりのたよりを  
まつのことのは

## ○春日かけ三味三下り

ときはなる松の梢にひな鶴が、みぎはのかめと諸と  
もに、ちよをたのしむはる日かけ

## ○鐵輪三味三下り

忘らるゝ、身はいつしかに浮草の根から思ひの無な  
らほんに、誰を怨みんうら菊の、霜にうつろふ枯野  
の原に、散り果なで今は世に、ありてぞ愁き我つま  
の合あしかれと思はぬ山の峰にだに合人の歎きもた

ふ成にいはんや年月思ひに沈む怨みの數、積りて孰上  
心の、鬼と成ることはり合いでなく怨みをなさん  
としもと振あげ後妻の合髪を手にから卷て打や宇津  
の山をば、夢うつゝ共わかざる浮世に合因果はめぐ  
り合ひたり、今さら左こそ悔しかるらめ、掇こりや  
思ひ知れ合殊さら怨めしき、あだし男をとつて行ん  
と、臥たる枕に、立よと見れば、恐ろしや御幣に、  
三十番神ましまして、魍魎鬼神はけがらはしや出よ  
くと責たまふぞや、腹打ちや思ふつまをば取らで  
剩へ神々の責を蒙る悪鬼の神通つう力白在の勢ひ絶  
て、力もよはくと、足弱ぐるまの、廻りあふべき  
合時節を待へしや、先此たびは歸るべしこいふ聲ば  
かりは定かに聞へ、云ふ聲ばかり聞へて、姿は目に  
見えぬ鬼とぞ成にけり

## ○龜のつがひ三味三下り

おもひ寝や、夢さへ闇の虫の聲つらや難面やあだ人  
の、ちぎりは憂しと世を捨し行すゑ何ごたらちめの  
心のわきと吹あれし身のかなしさを汲てしる、情て

りそふ庭の月、晴ゆく雲や武藏野の、むねも廣野となりゆきし、其うれしさに何時となく忍ぶ契りのかひ有りてほんのまこと、萬代の龜のつかひの片かたをしめて、寝夜のうつゝにも、惜からざりし命さへながくもがなと祈るなる、例をひくと色かへぬ、松の浮名も厭はまじ、同じはちすと定ては思ひおゝこと更になく死ての後の後までもかたみと殘す懸ごろも

○夜々の星 三味 三下り

玉くしげふたゝび三たび思ふこと、思ふがまゝにかきつけて 合本調子 みすれごあまのかづきして合かるてふそこのみるめにも合ふれぬをいたみたのみにし 合筆にさへだにはづかしの 合軒の忍ぶにきひやすき 合露の身にしもならまほし、ならまくほしの光りすら合手事たにてあやなくなるまでも 合二上り 八夜九夜とおもひあかこ雲井をながめすべをなみ 合袖のしづくにせき入る、硯のうみに玉やしづめん

○かたいご(かがぶし) 三味 三下り

やへの沙路、をへだて、住はなげよしかはすまも無きうき枕、とけぬ心のあやにくに、名残ぞまさる専なを、汐なれ衣かたしきて 合二上り 思ひぬる夜の夢にだに、其面影の見ゆもせて包むにくゆる藻しば草、憧れゆく身の幕はれて、餘所の勤も大切に見せつ見られつ暇なき、心のいとの一筋に、かけし誓ひは仇しよの、うつろひやすき花の色、外にちらきぬ言の葉も、禿が袖に忍ばせて見し嬉しさもいつしかに、我のみ思ふ片便、待につれなき秋の風

○高瀬舟 三味 三下り

木津川の流れも狹き身は高瀬ぶね、淺きは戀のまへかたよ、そこの心を知らせたや、亂れみだる、川やなぎ、まつに繋がる引ふねの、寄るべ定めぬ憂きおもひ、何の空吹松のかぜ合身にしみぐと最愛く、遣り手禿のうき愁き合闇をひき出す東雲に、送る姿の一重帶、またのさらばと云ふ迄は、ほんに逢ひたし逢はねばつらし氣の毒や涙の玉の緒も、思ひに絶なは絶よかし、それきへ心に任せぬは、ごふもなら

ぬへ

○お 七三味 三下り

百七十

むかしより、戀にうき名をたてまつるヨヲ、色はさ  
まく有なかに別て哀れを止めしは合八百屋のむす  
めお七こそ、戀慕の闇のくらがりに、よしなき事を  
仕出して、親の歎きはいか成らん合 お七なくくヨ  
ヲ申すやう 合上り 愛に目もくれ夜も日もわからずうつ  
らくと來ぬ人を、まつほの浦の夕なきに合 やくや  
藻壇の身をこがす私が思ひと迷ひの種じやいな助け  
給へや南無妙合 ほうれんげ經／＼合せめて一日わが  
世帶、夫婦と云はれ死ぬならば合 未來のつみも厭ふ  
まじ私が思ひと迷ひのたねじやいな、助けたまへや  
南無めう合法蓮華きやう、く、羊のあゆみ程もなく  
いさまぬ駒の鈴が森、見る人袖をやしほるらん

○落 葉 三味 三下り

音も懷敷みだれざけ、落葉一人を粹なといふて合 女  
房ひでりのせぬ様に合 荻もすすきも偽りも、何のか  
の無き尾ばなと云ふて合 女房ひでりのせぬ様に

○別のかね(つき出し共いふ) 三味 三下り

つき出の始めより、先相なれそめて春秋いくつ、越  
路の方をよそに梨子地の硯はこ、あけて云はれぬ憂  
きこと計り、其きぬくのぬかづきに、別れの鐘と  
憎みしが今身の爲になるかね成らは、可愛かろうに  
儘ならぬ合たとへごうした憂きめに合 ふが合 鬼すむ  
里のつとめで有ろが、男ゆゑなら夫りや苦にならぬ  
二八十六で文つけられて合 二九の十九でつい其こ、  
ろ合 四五の二十なら一期に一度わしや帶とかぬ二十  
なら四五の合 四五の二十なら一期にいち度私やおび  
とかぬ返らぬ昔戀しのぶ

○待 宵 三味 三下り

君來すば、閨へも入じ一人言、してうかくと、愁  
や妻戸にしょんぱりと、ろちを見遣れば月しんく  
と浮渡る合もはや夜明の鐘のこゑ、憎や小宵も待明  
し

○まこと 三味 三下り

くもる胸合泣ても晴ぬ時雨月ねがひの、願も神の留

百七十一

主、内かたの首尾皆わたしゆゑ合お淋しかろふ、お氣づまり、儘ならぬ世の、ア、うたて、假寝覺す松風のよりの戻りし廻り氣の、くちく多き今の里ふねや禿をつけ、させててうくのと疊さん逢ふてかうかと借に行く合つれの座敷のいさましさ、小面の憎い明がらす待一人寝をかき口説、あはふあはふの念力のとゞく方まで五大力

## ○けしごゝり 三味 三下り

根のびせし松によりにし宿り木の合とみしかづらも露に濡、時雨の雲にあふとなし合あらしの木の葉ちり塚に、塵もとまらぬ三つせ川、なれしいとには似ざりけり合なみのもんびの音物すごき山彦、更にむなしき契りさへ、かはかん袖のけしごゝり合むすぶあさちに、おく霜の合春に逢はめや、法にあはめや

## ○富士太鼓 三味 三下り

思ひぞ積る胸の花、涙にしほる藤かづら女心の亂れ髪、ゆひかひなくもこひ衣のそのうつり香をきぬぐのかたみと今は鳥かぶと、重き思ひを戴きて狂

ひ出るぞはかなく消なし、草葉の露と合殘るこの身を如何にせん、こひしや床しやいとしやと、或日は歎き笑ひつゝ、こひし心がきやうきやうく狂氣となつて現なく合太鼓こそ、太鼓こそ失せにし人のかきなれ、思へばぐ腹立ちや、うしろに呼ぶは妻の聲前にはかたきのときの聲、うてやうてとせめつゝみ、越天樂をまおふよ合うたへや歌へ梅が枝に風吹かば如何にせん、花に宿る鶯手事持ちたるばちをばつるぎと定め、持ちたるばちをば劍と定め、しんゐの焰は太鼓の烽火の天にあがれば、雲の上ひとまことの富士おろしにたへずもまれて、裾野の櫻四方へばつと散るかと見ひて花衣、さす手もひく手も伶人の舞なれや合富士が恨みも、ろともに、踊りあがりててうとうつ合嬉しや今こそは思ふかたきは打ちおさむ、うたれて音をや出すらん合げにや女人の罪深く五常樂を歌ふよ、さてまた千代や萬代と千秋樂を歌ふよ、民も榮へてあんおんに泰平樂を舞ふよ合日もすでに傾きぬ、日もすでに傾きぬ、これ迄なり

や人々よ伶人の姿鳥申皆ぬき捨てゝ我か心、亂れ笠  
亂れ髪、かゝる思ひは忘れじと、又たちかへり太鼓  
こそ、うき人のかたみぞとあと見をきてぞ歸りける

○二一 葉葵 三味 三下り

問ふべくも、よしと問へかし、さくが淵なす青海波  
合露のかことの夕ぐれに、分行くものは萩すゝき 合  
なびくは私があやまりか、ア、悪性な風の、女郎花  
なら氣が済むけれど 合二葉あふひの末かけて、二世  
の二世のナやばらしい松の思はんことの耻かし

○四ツのくさ 三味 三下り

程ちかき、戀の道のべ有ものを、憎やあらしに吹ま  
ごはれて、あちな道すち行とも知らず、里に見駒ぬ  
筈龍膽、野きく草ふち夏枯草ちよつと憐氣も花のつ  
ゆ、袖をかへせば夢むすぶ

○四ツの民(四曲の内) 三味 三下り

限り無く、静なる代や吹風も、名古曾の關も山櫻鎧  
の袖にちりかゝり、花すり衣陸奥に、駒を進むる君が  
爲め合弓を袋にすきくはや、案山子を友と野邊の業

合菜つみ水ひきみつき取り合薪をかたに彼處なる木  
間の月を樂みて、山路の憂きを忘れめや 合雨露しも  
を凌ぐ身の合工匠はすみとかねてより、大宮造り殿  
づくりニ上り鳥帽子素袍も花やかに、賤が軒端も建つ  
いき合錦おるてふ機もの夜寒厭はじ綾どりの絹、  
手事三下り本調子染て貴賤の色わかな、同じ眺は白妙や  
雪は一入きぬぐの、情あきなふ、すぎはひに合姿  
言葉は賤しくて、心ばかりは皆やさしかれ

○娘道成寺 三味 三下り

かねに恨みは數々ござる、初夜の鐘をつく時は、諸  
行無常とひゞくなり、後夜のかねを撞ときは、是生  
めつ法とひゞくなり、晨鐘の響きには生滅めつる入  
相は、寂滅ゐらくと響けども、聞いて驚く人もなし、  
我は五障の雲はれて、眞如の月をながめ明さん合二上り  
云はず語らず我心、亂し髪も亂るゝも難面は只うつ  
り氣なごうでも男は惡性な櫻さくらと唄はれて言て  
袂にわけ一ツ、勤めさへ只うかゝると、どうでも女  
子は惡性な、廓育ちは蓮葉の者じやえ手さり歌戀のわ

けさとかぞへくりや、武士も道具をふか編笠の張  
と意氣地の吉原、花の都は、歌で和らぐ敷鳥原の勤  
する身は、誰とふしみの墨染、煩惱菩提の、撞木町  
より難波四すちに通ひきつちの、禿立から室の早咲  
それがほんの色じや一二三四夜つゆ雪の日、しもの  
關路と、ともに此身を、馴染かされて、中は丸山た  
ゞ丸かれと、思ひ初たが縁じやに合三下りしごけ形容  
目に立つ娘、誰に見しよとて品やる娘、可愛がられ  
て色づく娘、むすめくと澤山そふに、云ふて下ん  
すなこちや鐵漿つけて、袖も留たり、嫁入の談合、  
頼て東へ行く身じや者を、餘波惜さは限りなし、頼  
てあづまへ行身じや者を、私やごうも成らぬほんば  
に、ほんに儘に成らぬは浮世の習ひ合娘の花がさ開  
いて品よく、さしかけゆりかけ合幽艶らしい取なり  
小穂かいざり、小づまでなきあへ、去とはさりとは  
のふ扱合しだれ柳の糸ざくら、よれつもつれつな容  
もし姿やさしき今のは合くれに通へば思ひの種  
じや合人目の闇は辛氣なせかひア、合夫だ戀路の  
時節も今幾ほごに妙なりや

習ひかや、サア／＼そうじやいなサアサアそうじや  
いなサ／＼アなうじやな、晴ぬ思ひの夕月夜おぼろ  
夜のときも實に水は南にほしは北にたんだくの山の  
姿や雲の峰、月のあらはれ水に浮みつ、袖をかへす  
や、夜陰の春雨に、思ひ／＼に時を得て合ごかうの  
一天鐘も鳴り、鶴は八聲のほの／＼と夜も明しらむ  
時の太鼓合鐘の供養も實に有難き、法の庭、影向の  
時節も今幾ほごに妙なりや

○室の梅 三味 三下り

春といふ、名のみ計りや朝には、馴にし塘とや出せ  
なにはがた、人はあしとも云ふならめ、我はよしと  
はなげ笛おもはねご合浮世のきりは是非もなや合我身  
ひとつは元の身の合春にもならば梅が香の、闇にも  
ぶ

○むすぶ手 三味 三下り

渡て知れ、身に入む秋の風にはあらで、遠ざかり行  
なにはがた、人はあしとも云ふならめ、我はよしと  
はなげ笛おもはねご合浮世のきりは是非もなや合我身  
ひとつは元の身の合春にもならば梅が香の、闇にも  
ぶ

通ふ袖のつゆ、いと、思ひやまさるらん

○虫づくし 三味 三下り

わび人の長きあだに暮さじと夜を秋風の身にぞしみ  
く吹わたるくれ待がほに咲花よ合亂れこうろき身  
のこひち晝は名立ぬ螢のひとひ合萩の上風すがたを  
ば合野邊の錦のはたおりが舌鼓打さりくす、物い  
はせじ鳴いた轡の音のねをげも鈴の聲合手事千年かぎ  
らんく松の音や

○虫の音 三味 三下り

思ひにや、こがれて集く虫の聲ごゑ小夜ふけて、い  
とゝ淋しき野菊にひとり、道はしら菊たざりて此處  
に、誰をまつ虫なき面かけを、慕ふこゝろの穂にあ  
はれて、萩よすきよ、寝みだれ髪のとけてこぼ  
るゝ、涙の露の合かゝる思ひを何時さて忘りやう合  
兎角りゑんの、拙き此身、はるゝ間もなき胸の闇、  
雨のふる夜も降らぬ夜も、通ひ車の夜ごとに来れど  
合逢ふて戻れば一夜が千夜、あはで戻ればまた千夜  
合それくそれじや、それが實にき、ほんに浮世が

儘ならば何をうらみん由なしことを合桔梗かるかや  
女郎花、我は懸路に名は立ながら、一人まる寝の長  
き夜に合手事おもしろや、千草にすだく虫の音の、機  
織音はきりはたりてふ、きりはたりてふ、つゝれさ  
せてふ、ひぐらし蟋蟀、いろくのいろ音の中にわ  
きて、我しのぶ松虫の聲、りんくりんくりんと  
して、夜るの聲めいくたり合すはや難波の鐘も明  
方の、あさまにや成ぬべし、さらばよとも人餘波の  
袖を、招く尾花の、ほのかに見ゆし跡絶て、草ばう  
くたる阿部野の塚に、虫の音計りや殘るらん、む  
しのね計りや殘るらん

○浮船話 三味 三下り

愚憎か住家は京の辰巳の世を宇治山と人はいふなり  
茶ちやくちや茶園で合はなすこひ茶は縁のはし姫、  
夕への口説の袖の移り香花たちばなの、小島ヶ崎よ  
り手事一さん走りに戻つて見たれば、内のおかたが  
格氣の角文字、うしも涎を流る、川瀬に口説ばおち  
あひ我から焦る、螢をあつめて、手くだの、學もん